
東方欲望録～全ては欲望を満たすため～

フロスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方欲望録〜全ては欲望を満たすため〜

【Nコード】

N6918Q

【作者名】

フロスト

【あらすじ】

幻想郷……それは忘れられた都。そして幻想郷にある博麗神社に、一人の男の娘が居候していた。

ある日の夜、幻想郷の空から“欲望”が舞い落ちる。

これは東方Projectと仮面ライダー^{オーズ}000のクロス小説です。アंक始めグリード達の性格がオーズ本編と大きく違います。それが嫌な方は回れ右して下さい。

Count 1『男の娘と巫女と欲望』

「ん……ん……」

朝。

一人の少女が、布団から上半身を起こし大きく背伸びする。

少女の名は博麗^{はくれい} 霊夢^{れいむ}。『楽園の素敵な巫女』などと呼ばれる巫女である。

台所がある方向からは、トントんと、規則正しい包丁の音が聞こえる。

霊夢は、欠伸をしながら移動し、襖^{ふすま}を開ける。

居間には、朝から瓢箪^{ひょうたん}に入った酒を飲む少女の姿が。

頭から二本の大きな角を生やし、服や手足に繫いだ鎖の先には、丸や四角、三角などの飾りを付けている。

見た目は少女だが、こう見えても霊夢より長生きしており鬼の『小さな百鬼夜行』、伊吹^{いぶき} 萃香^{すいか}が居た。

何だかんだでここ、“博麗神社”に居着いている変わり者である。

「お、霊夢、おはよう」

「おはよう、萃香」

妖怪を退治する博麗の巫女が、妖怪（鬼）と挨拶を交わすのは奇妙な光景だが、“この世界”ではごく当たり前の事である。

萃香に挨拶した霊夢は、視線を萃香から台所に移す。そこでは、いつも自分が着ている脇が露出した巫女服と同じ物を着た少女……否、“少年”が朝食を作っていた。

3

「おはよう、霊夢」

巫女服の少年が、霊夢に気付き挨拶する。

霊夢も、巫女服の少年に「またか」と思いつつ、挨拶を返した。

「おはよう、名無^{めいむ}」

——ここは幻想郷。忘れられた都。忘れられたモノが流れ着く場所。

そして、少年は名無。“名が無い”という意味の名の、幻想郷・博麗神社に居候する少年である。

それは、一週間ほど前の事……。

その日も、霊夢はいつものように、境内の掃除をしていた。

と、いうよりも、特に異変もなく、参拝者もなく、他にやる事がないのだが。

「うっさいわねっ！　たく・・・・・・・・」

何か電波でも受信したのか、文句を言いながら掃除を続ける脇出し巫女。

すると、そんな彼女の後ろに、クパアと空間・・・・・・・・“スキマ”が開き、そこから一人の女性が姿を現した。

金色の長髪に妖艶な笑みを浮かべ、片手には扇子。『神隠しの主犯』と言われる、幻想郷最古参の妖怪――八雲やくも紫ゆかりである。

霊夢は紫の存在に気が付くと、ため息を吐き、厄介なモノを見る目を向けた。

「あんた、また来たの？」

「あら？　ご挨拶ね」

明らかに嫌がる霊夢に対し、紫はニコリと笑い軽く返す。

紫は、掴み所のない性格のため、どんな嫌味も彼女には効かないのだ。

「で、何の用よ。言っとくけど、面倒ごとは嫌よ」

紫のコレはいつもの事のため、霊夢は早々に用件を聞く事にした。といっても、霊夢は巫女の修行をサボるほど——妖怪退治は喜んでやる——やる気が無い。

だが紫は、笑みを浮かべたまま扇子を開いた。

「それがね、用があるのは私じゃないのよ」

「は？　じゃあ誰よ」

「それは・・・・・・・・・・」

「それは俺だあああああっ！！」

——突如、霊夢は“下から”強烈な突風を感じた。

霊夢が着用している巫女服は、肩と脇が露出しているのに目が行きがちだが、下も袴ではなくスカートと、珍しい物である。つまり、強い風が吹けば舞い上がってしまう訳で・・・・・・・・・・。

「——ふんッ!!」

故に霊夢は、自分の影から出現し、スカートをめくり上げ、背後に立っている男の顔面に、陰陽玉を投げるのである。

「ぎゃんっ!?!」

陰陽玉が顔面にめり込み、男は倒れる。茶髪に上下漆黒の服、さらに黒いサングラスで全身真っ黒の『怪しい』が形を持って動いているような男だ。

『逆鬼』を読んでいる方なら、この真っ黒で『怪しい』男の正体——
荒木^{あらぎ} 錬矢^{れんや}である事はお分かりだろう。

錬矢はムクリと起き上がる。陰陽玉が顔面にめり込んだままである。

「痛いな霊夢。いきなり何をするんだ」

「いきなりはあんでしょっ!!」

当然、霊夢は鍊矢に文句を言う。

だが、鍊矢に文句を言っても聞く耳はない。鍊矢は紫と似たり寄つたりの性格なのだ。

「はぁ……で、鍊矢。あんたが来たって事は、用があるのはあんたなのね？」

「もちコース♪」

勿論、その事も知っているため、霊夢はため息を吐きながら用件を聞く。

鍊矢は気分を良くして、用件を話始めた。

「いやー、実はさ、霊夢に預かってほしいのがあるんだよ」

「預かってほしい？ 何よ」

「それは……」

——これだっ！！」

鍊矢は自分の影から巨大な——人間が一人入りそうな——カプセルを取り出し、ドンッと霊夢の前に置いた。

霊夢は目を丸くした。目の前に置かれた巨大なカプセルにはない。カプセルの中に入れられた“少女”を見たためだ。

それにより、鍊矢を、脅えた、軽蔑した、やっぱりか、が入り交じった白い目で見る。

「……………あんた、ついに……………!？」

「え？」

「そうね……………これは私のミス。初めてあんたと会った時に退治しなかった私のミスよっ!！」

「霊夢さーんっ!？　そう言ってお札構えるの止めてっ!？　お札はマジキツいからっ!！
違うからっ!　違うからねっ!？」

「鍊矢、最低ね」

「ゆかりんも乗るなっ!　事情知ってるだろっ!？」

誤解する霊夢と悪ノリする紫を何とか止め、鍊矢は説明し始める。

それを聞いて、霊夢はあんぐりと口を開けた。

「実はな。俺の“外”の友人のジエイルっつーのが、『このオーメダルというのには、“ニンゲン”のメダルはないのか?』って言うてな。だから作っちゃった、てへっ」

「・・・・・・・・・・はっ・・・・・・・・・・!？」

「だから、このカプセルに入ってるのは、俺と俺の友人がノリと勢いで作った、『擬似コアメダル——“ニンゲンメダル”を核にセルメダルで体を構成した“擬似グリード”』なんだよ」

さて、ここで“オーメダル”と“グリード”について説明が必要だろう。

オーメダルには、“コアメダル”と“セルメダル”の二つがあり、コアメダルはあらゆる生き物の情報を圧縮して造られ、セルメダルは“欲望”が形を持った物だ。

グリードは9枚のコアメダルを核に、大量のセルメダルで体を構成した『メダルの怪物』である。

コアメダルには複数の種類があり、赤い——鳥が画かれた——コアメダルが核なら鳥系グリードが、緑の——昆虫が画かれた——コアメダルが核なら昆虫系グリードが構成される。

今霊夢と紫の目の前にいる鍊矢も、漆黒のコアメダルを核に構成された悪魔系グリードだ。

つまり、カプセルに入っている“少女”はその悪魔グリードが産み出した、グリードという事らしい。

「いやな、ノリで造ったのはいいけど、俺達忙しいから養えなくてさ。霊夢、悪いけどコイツ養ってくれない？」

「私からもお願いね、霊夢」

両手を合わせ、頼む鍊矢と微笑む紫に対し、霊夢は……………
激怒した。

「——んなアホな理由で妖怪造るなああああああつ——！」
グリード

飛ぶ弾幕。紫はスキマに入り、鍊矢は自身の影に飛び込み、回避。

霊夢は息を切らし、弾幕を止め、ため息を一つ。

「はぁ・・・・・・・・・・。ほんと、あの二人の能力は厄介ね」

紫の能力は『境界を操る程度の能力』。先程のように、空間に裂^{スキマ}け目を開きその中で自由に移動でき、鍊矢は『影を操る程度の能力』で自由に多種多様な影に潜り移動出来るのだ。

霊夢は再びため息を吐き、そこで二人が居た場所に、一枚の紙切れが落ちていたのに気が付いた。

それを拾い上げ、見ると、それは鍊矢がカプセルの“少女”について書かれた物だった。

『霊夢へ。

ホントに急で悪いな。俺達の方は色々ゴタゴタするから、グリードの存在を知られるわけにはいかないんだ。

そいつは説明した通り、擬似グリード。普通のグリードと違って、核となるコアメダルは一枚しかない。その反面、自身の欲望が叶えばセルメダルが増える・・・・・・・・・・どちらかと言えば、“ヤミー”に近い性質だ。

まあ、グリード、ヤミーって言っても、体がセルメダルで出来てる以外は普通の人間だ。

それと、そいつを造る時にモデルとして、霊夢、お前を使った』

そこまで読み、霊夢は視線を“少女”へと移す。

——なるほど、確かに似てるかも。

と納得し、再び紙切れに視線を戻す。

『理由としては、単純に“アミダくじ”の結果でそうなった。それと睡眠学習で一般知識は学習したと思うが………どうなったかは、正直分からん。』

——だがそこはいい。寧ろ問題はここからだ。霊夢、お前はどう思ったが知らんが——』

「んっ………ここは………？」

紙切れを読んでいる途中、自分が知らない声が聞こえ、霊夢は咄嗟にその方向を見る。そこには、カプセルから“少女”が起き上がり、周りを見渡していた。どうやら、先程撃った弾幕が、カプセルをかすめ、その衝撃で起きてしまったようだ。

だが、そこで問題が………。

『——そいつは、“男”だ』

これが、霊夢と少女、ではなく少年との出会いであった。

しかもこの時、少年は真っ裸だったため、再び弾幕が飛んだ。

そして、落ち着いた霊夢は少年にタオルを渡して体を隠させ、色々話を聞くと、名前が無い事が発覚。そこで少年が『名が無い』名無^{めいむ}』と言い、それがそのまま名前となった。

「……………という訳よ」

「へー、鍊矢がねえ。ていうか、名無って男なんだ」

霊夢から名無との出会いを聞いて、萃香はそう言った。萃香が名無と会った時には、既に巫女服を着ていたため違和感がなく、今の今まで女だと思っていた。

因みに錬矢は、幻想郷が誕生した時から出入りしているため、幻想郷の住人達は大概知っている。

とそこで、萃香は『男なのに巫女服』という事に気が付き、霊夢に質問した。

「あれ？ 名無って男なんだよな。だったら男なのに巫女服っておかしいか？」

「まあね。私も最初は、香霖堂に行ってテキトーな服を買おうと思ったのよ。そしたら名無が……」

「『新しく服を買うのは効率が悪い。幸い、霊夢と体のサイズが同じだから霊夢の予備の服でいい』……と言ったのさ」

「ああー」

霊夢が訳を話していると、朝食ができたのか名無が交ざる。

萃香は名無がいかに言いそうな事に、納得。

名無は“四人分”の朝食をテーブルに並べながら、話を続けた。

「だってそうだろ？ 妖怪退治で蓄えがあるとは言え、参拝者がいない博麗神社ではできるだけの節約は必須……。僕が霊夢の服を使えば、その分の服代が浮く」

「あんたは人が気にしてる事をズバズバ言い過ぎなのよっ!!」

博麗神社は名無の言う通り、参拝者がいない。人間が住む人里から遠いのもあるが……ここ（博麗神社）には、よく妖怪や妖精が遊び（イタズラ）に来るため、人間は近付かないのだ。

霊夢は参拝者が来ないのを気にしてるため、名無の言葉がグサリと来る。

（こうして見ると、姉妹にしか見えないよなー）

名無が霊夢に似ているため、姉が文句を言い妹はスルーしている……そんな風にしか見えない。いや、名無が姉か？

以前、名無の存在を嗅ぎ付けた文屋が新聞に『博麗の巫女に姉妹

がいたっ！？」という見出しで書いていた事は記憶に新しい。

そう思いながら、萃香は朝食を食べにくる普通の魔法使いを待ちつつ、姉妹？ のやり取りを見るのであった。

—

その日の夜………。

幻想郷の上空から、月夜に輝く“欲望”が落下した……………。

幻想郷に、新たな異変が起きる。

「さーて、どうなるかな？」

C
o
u
n
t
2
に
続
く

キャラ設定（前書き）

名無と錬矢の設定です。

あくまで設定ですので、途中変わるかも。

キャラ設定

名前…名無^{めいむ}

年齢…不明

容姿…肩まである黒髪をそのまま下ろしている・女の子と間違える顔立ち・・・というか霊夢似・背丈は霊夢と同じ程度

性別…男

能力…『全てのモノ事を検索する程度の能力』

二つ名…『全てのモノ事を知る者』『欲望の王』

概要

幻想郷に住む、本作の主人公。その正体は鍊矢とディンゴが制作した擬似グリード。擬似コアメダル・『ニンゲンメダル』を核とし、体をセルメダルで構成されている。

まだ眠っている時に幻想郷・博麗神社に送られ、そのまま居着いた。名前が無いが、特に気にしてなく、名無し＝名無として以降自分の名前にしている。

あらゆる『欲望』が無く、羞恥心も無いため霊夢と同じ巫女服で生活している。だが何の前触れもなく『欲望』が芽生えたと暴走し、自分が満足するまで止まらない。普段の『無欲状態』は大人しく、見た目が女の子のため霊夢より女の子である。

『全てのモノ事を検索する程度の能力』

名無が持つ能力。その名の通り、全て・あらゆる者・物と事象を検索できる。

特定のモノ事を検索するにはキーワードが必要で、キーワード無し、もしくは少ないと、情報が多すぎて絞り混む事が出来ない。

名前…荒木^{あらぎ} 錬矢^{れんや}

年齢…不明

性別…男

能力…影を操る程度の能力

概要

悪魔系のグリッド。幻想郷が造られた時から出入りしている、ア
ンク達を封印した張本人。

残りは『仮面ライダー 逆鬼と夜天と魔法少女と』を参照。

C o u n t 2 ・『右腕とメダルと変身』（前書き）

今回、アंक登場・名無がオーズに変身します。

アंकの性格が、オーズ本編と若干違います。

Count 2・『右腕とメダルと変身』

早朝、博麗神社の近くの森。

木が少し開けた場所に、一枚の赤いメダルと数十枚の銀のメダルが落ちていた。

幻想郷では物が落ちている事は、別に珍しい事ではない。“外界”の忘れられた物が、流れ着く事が多々あるからだ。

だが、このメダルは確かに“外界”のモノだが、流れ着いた訳ではない。昨晚、幻想郷の上空からバラ撒かれたモノだ。

何の変哲のない、普通のメダルに見えるそれは、突然、銀のメダルがゆっくりと動き出した。

銀のメダルは赤いメダルを中心に集まり、赤いメダルをすっぽりと覆い隠す。

集まったメダルは右腕のような形を象り、やがてメダルは赤い、鳥の印象が入った本物の“異形の”腕に変わった。

『ん・・・・・・・・こっは・・・・・・・・？』

赤い腕は起き上がり・・・・・・・・・・というか浮き上がり、周りを見渡す（?）。

だが、見渡す限り木・・・・・・・・森の中。すると赤い腕は、急にワナワナと震え、大声で叫んだ。

『畜生っ！ “ウル”の奴、俺達を封印しやがってええええええええええっ！！』

察しの方が殆んどだろうが、この叫んでいる腕の名は『アंक』。グリードの一人で、鳥系幹部である。

彼を始めるグリード達は、同じグリードである“ウル”に封印され、その事を思い出し怒っていた。

『くそっ！ しかも、コアメダルが一枚だけって事は・・・・・・・・残りにはウルが持ってたやがるなっ！?』

確証はある。何故なら、ウルというグリードは仲間を封印する際、9枚のコアメダルと大量のセルメダルにバラバラにしたのだ。

アंकはワナワナ震え、怒りを表現するが……腕だけのせいか、何とも滑稽だ。

暫くして、一度疲れたように垂れ下がり、気を取り直して移動を始めた。

『ちつ、まずはメズール達と合流……いや、体を手に入れるほうが先か？ とにかく、コアメダルを見つけないとなあ……』

そう呟きながら、アंकは進んで行った。その先には、神社のよ
うな建物が見えた。

一方、博麗神社では………霊夢が盛大にため息を吐いていた。

「はあ~~~~」

「霊夢、ため息吐くと幸せが逃げるよ。………気持ち分けるけど」

萃香が瓢箪の酒を飲みながら、霊夢に同情する。その視線の先には、目をキラキラさせ、手に持った長方形の石板と赤・黄・緑のメダルを見ながら怪しげに笑う、名無の姿があった。

「ふふ、ふふふ………」

「………はあ~~~~」

今度は萃香も一緒に、ため息。

名無の“病気”が発症したのだ。

名無は、興味があるモノ・事を見つけると他の事をそっちのけに、自身の能力『全てのモノ事を検索する程度の能力』で調べるのだ。

現に、名無の格好は巫女服ではなく、寝間着のみである。

霊夢は壊れた名無から視線を移し、テーブルの上に置かれた、中身（名無の手の内）のない小包の袋に目を向ける。

幻想郷には、宅配便などない。故に小包が自動で届くなど、あり得ないのだが……。差出人名義は、『荒木 鍊矢』。つまり、わざわざ小包に包み、誰にも気づかれないように居間のテーブルの上に置き、それを朝起きた名無が発見。……。現在に至る。

萃香は瓢箪を一仰ぎし、疑問に思った事を口にした。

「ぷはっ……。にしても鍊矢の奴、何で名無にあんなの送って来たんだろ。直接渡せばいいのに」

「さあね。妖怪の考えなんて、私に分かるわけないでしょ」

「いや、鍊矢って妖怪なのか？」

「妖怪でしょ？ グリッドって種類の」

霊夢の中ではグリッド＝妖怪という図式らしい。

いつまでも寝間着のままではアレなので、霊夢は名無に近づき頭を叩いて、無理矢理にでも着替えさせる。

（・・・・・・・・それにしても――）

――あのメダル、名無と錬矢に似てる気がするな・・・・・・・・。

そう思いながら、萃香は酒をまたひと飲みするのであった。

あの後、霊夢は外に出て、いつものように境内の掃除をしていた。

普段なら名無も手伝うのだが、着替えさせられた後、再び検索を始めたため使い物にならない。今も賽銭箱の前の階段に腰掛け、不気味に笑っている。

霊夢はツツコむ気も起きないので、名無を視界からフェードアウトさせていた。

そんな様子を、近くの木の陰から覗くモノ……いや腕があった。勿論アंकだ。

アंकは霊夢と名無のうち、名無が持っている三枚のメダルに注目していた。

『間違いない。俺とカザリ、ウヴァのコアメダルだ……！』

自分と、仲間のコアメダルを発見し喜ぶ。何であんなガキが持っているのか、と疑問に思ったが、奪い返せば考える必要もない。

そう考え、直ぐに奪い返しに出て行こうとしたが、待て、と思い留まる。

（今の俺はこんなだ……。忌々しいが、“ただの”人間

にも負けるかもしれないな。……もつと慎重に動くか)

そう考え直し、木の陰から木の陰に移りながら名無の背後に回るように移動する。

「そこっ!!」

突然、霊夢の声が響く。

——バレたかつ!?

そう思い、アंकは体(腕だけだが)を強張らせる。

霊夢は持っていた竹箒を投げた。

投げられた竹箒は真っ直ぐに飛び、アंकが隠れていた木を通りすぎ、近くの草むらに落ちた。

「痛っ!？」

すると、草むらから声が聞こえ、そこから三つの影が飛び出し、逃げ去っていく。

背中に透明な羽が生えた、三人の少女……『サニーミルク』、『ルナチャイルド』、『スターサファイア』のイタズラ妖精である。

博麗神社の敷地内にある大木に住む彼女達は、こうして霊夢にイタズラしようとしているのだ。……大概は失敗しているが。

ルナチャイルドは『周りの音を消す程度の能力』を持ち、サニーミルクは『光を屈折を操る程度の能力』で姿を消すため、アンクも気付けなかったのだ。

(なんだ、妖精か……。ん？　そう言えば、ここはどこだっ!？)

アンクは今更な事を疑問に思った。何せ封印された場所と、気が付いた場所がまったく違うのだから当然だ。

霊夢は竹箒を拾うため、草むらに近づく。アンクは偶然にも、霊夢や三妖精には見えない木の陰に隠れていたため、見つからずに済

んだ。

竹箒を拾い上げ、逃げ去った三妖精を思い出して霊夢はため息一つ。

「はあ。ホントあの妖精、よく出るわねえ。お陰で参拝客が来ないわ」

無論、博麗神社に参拝客が来ないのは三妖精だけのせいではない。

愚痴言い、霊夢は掃除を再開する。

その隙にアंकは木の陰から移動し、本殿に近付く。そして、飛び出せば名無の首を欠ける距離まで近付いた。

近くに萃香が寝ているが……アंकは無視する。

『……よし、行くかつ！』

決心し、一気に飛び出す。この距離なら、気付かれてもこっちの方が早い。

そして、いざ手が届きそうになった時……。

『ッ！ なっ！？』

突如、ガシッと何かに掴まれ、アंकの体は動きが止まる。

慌てて見ると、寝ていたはずの萃香ががっしりアंकの体を掴んでいたのだ。

「んあー……………」

どうやら寝ぼけているらしい。

当然、アंकはそれを振りほどこうとするが、鬼である萃香の力は半端ない。腕だけのアंकでは、抜け出す事は出来ない。

『くそっ！ なんて力だっ！？』

それでもアंकは振りほどこうとするが、まったくの無駄である。
すると、萃香は予想外の……アंकや、夜雀が戦慄する
事を口にした。

「んあ………焼鳥」

『………え………』

「いただきまーす」

『や、やめ………あああああああつ！！』

神社に響き渡る絶叫、というか悲鳴。

それに、流石の名無も気がつき、霊夢は駆けつける。

「ん？」

「なによ、今の悲鳴っ！？」

そして、二人が見たのは………萃香に噛みつかれ、グッタ

りした腕であつた。

「何これ？ 腕の妖怪？」

「ふふふ．．．．．！ 興味深い、さっそく検索を始めよう．．．
．．．！！！」

「止めなさい」

名無と霊夢に救出されたアंकは、居間でお茶を出されていた。

「同居人が失礼したわね。ま、お茶でも飲んで」

『あ、ああ。それじゃあいいただき・・・・・・・・って違うっ！！』

出された湯飲みに手を伸ばし掛け、アंकはバンツとテーブルを叩いた。

意味が分からず、名無と霊夢は首を傾げる。

『違うだろっ！ 反応がっ！？』

普通俺を見たら驚いたり悲鳴上げたりするだろうがっ！ なのに何でお茶っ！？ 反応が違うだろっ！！』

アंकとしては、自分を見た瞬間、驚いたり自動販売機に潰されたりとの反応を予想していた。だが目の前の二人の反応は予想外過ぎて、アッパーかと思ったら金的を蹴られた気分だ。

どうやら反応が気に食わなかったらしい、とアंकの言いたい事を理解した名無と霊夢だが、寧ろこっちが反応に困り顔を見合わせてしまう。

「そう言われても、ねえ？」

「ねえ？ 確かに腕の妖怪は珍しいけど、それだけじゃね？」

『誰が腕の妖怪だっ！ 俺はグリードだっ！！』

「ああ、鍊矢と同じか」

『鍊矢って誰だっ！？』

ギャーギャー煩いので、霊夢は本日何度目か分からないため息を吐いて、幻想郷について説明を始めた。

「はあ。あんた“外の世界”から来たみたいだし、幻想郷について簡単に説明してあげるわ。

私は博麗霊夢。ここ、博麗神社の巫女よ。

それでこっちは名無、よく姉妹に思われるけど違うから」

「よろしく」

「ここは幻想郷、忘れられた都。約数十年前に、当時の巫女が『博麗大結界』を張って、“外の世界”と幻想郷を分けたの。それ以来、巫女が結界を緩めるかあるスキマ妖怪の能力じゃないと“外の世界”には出られないし入る事は出来ない。ただ、“外の世界”で忘れられたモノ——幻想になったモノが流れ着く事がある。だから、“外の世界”で迷信になっている妖怪・妖精は大概は幻想郷に居るわ。多分、あんたは後者だと思う」

——なるほどな、と、アंकは納得した。

グリードが封印されたのは800年も前の事だ。グリードからしたらたった800年だが、人間が忘れるには充分な長さだ。

自分が幻想郷にいた理由・自分に驚かない理由に納得し、今度は錬矢について質問した。

『さつき、『錬矢と同じか』と言ったな。どういう意味だ？』

「錬矢は、あんたと同じグリードよ。結界無視して、好き勝手に“外の世界”と幻想郷を行き来してる奴。

まあ、幻想郷が出来た時から出入りしてたみたいだし、幻想郷最古参の妖怪……で、どうしたの？」

『……いや、嫌な奴を思い出した……』

「？ そう」

急に頂垂れたアंकに、霊夢は首を傾げる。そして、あっと思いき出し名無を指差した。

「そう言えば言い忘れてたけど、名無は鍊矢の奴が造った疑似グリードだから」

『あぁっ！？ 疑似グリードだぁっ！？』

（間違いないっ！ ウルだ、こんな事するのはウルしか居ないっ！）
『』

アंकは霊夢から聞いた鍊矢という人物の無茶ぶりから、自分達を封印したウルである事を確信した。

すると突如、外からズドンッとか何か重いモノが落ちた音が聞こえた。

『ヤミーだっ！！』

霊夢とアंकは即座に反応し、外に出て、音がした方に急ぐ。

そして、音のした場所——神社の正面に行くと、そこには、ギザギザした牙を覗かせる大きく裂けた口にうねる尻尾、右腕には円形状の盾を持つ二足歩行のトカゲのような怪人……アサルトヤミーがそこにいた。

霊夢は初めて見るヤミーに、驚きの声を上げアंकが答えた。

「……………何よアレっ！ あんな明らかな妖怪見た事ないんだけどっ！？」

『ウルのヤミーだっ！！ アレは下級型だな』

悪魔系グリード・ウルのヤミーには二種類ある。

一つは下級型と言われる、その場で即座に造れ知性がなく欲望のままに暴れるタイプ。

もう一つは育つのに時間が掛かるが、知能が高く能力も高い上級型だ。

アサルトヤミーは、下級型に分類される。

「ガアアアアアアアアッ！！」

「なるほどね……………こんなの造ったのウルっての誰よっ！ 退治してやるっ！！」

『お前らが鍊矢って言ってた奴だっ！！』

「ああっ！ 偽名だとは思ってたけどアイツの仕業なわけねっ！！」

こちらを見るやいなや、襲って来るアサルトヤミーの攻撃を避け
霊夢とアंकは叫ぶ。

アサルトヤミーの一撃は、二人の背後にあつた賽銭箱を破壊した。
因みにその近くに萃香が寝ていたが………起きる気配はな
い。

「あああああああつ！ 賽銭箱があああああああつ！！」

『あの鬼、よく起きないな』

泣き叫ぶ霊夢に、萃香にツッコむアंक。

霊夢は涙目になりながらお札を構える。とその時、アサルトヤミ
ーの背後から名無から現れアサルトヤミーの頭を踏み台に跳び……
……霊夢とアंकの前に着地した。

「はっ！」

「ギャッ!?!」

「ふう。二人とも、無事みたいだね。あのヤミーは僕が相手をしよう」

二人の前に着地した名無は、三枚のコアメダルと長方形の石板を見せつける。

『俺のコアメダルッ!!』

「——これらに関する項目を全て閲覧した」

叫ぶアंकを無視し、名無は長方形の石板を腹部に翳す。すると石板は金属の板——【オーズドライバー】に変わり、ベルトが伸び名無の腰に固定される。その際、【オースキャナー】と【オーメダルネスト】がベルトの左右に現れる。

オーズドライバーの三つの窪みに、向かって左端と右端に赤のタカ・コアメダルと緑のバッタ・コアメダルを入れ、真ん中の窪みに黄色のトラ・コアメダルを入れバックルを傾ける。

バックルを傾けると同時にオースキャナーを右手で持ち、左手を右上に動かしオースキャナーをバックルに添うように滑らせコアメダルを読み込ませた。

そして、不思議な歌が流れる。

「変身」

《タカ！　トラ！　バッタ！》

《タ・ト・バ♪　タトバ♪　タ・ト・バ♪》

そして、名無の姿は変わり……『仮面ライダーオーズ』
がそこに居た。

名無が変身したオーズに、霊夢とアंकは驚く。

「……………なに、今の歌？」

『歌かよっ！？　それよりもなんだそれはっ！！　というか俺の
アメダル……………！！』

「歌は気にしない」

オーズはそう言い、アサルトヤミーを見据える。

アサルトヤミーは突然現れたオーズに怯む事なく、雄叫びを上げ

襲い掛かる。

「ガアアアアアアアッ！！」

「はっ、ふっ、ハアッ！！」

オーズは振り下ろされるアサルトヤミーの爪を右腕で弾き、腹部に左拳を入れる。さらに、右足を叩き込んだ。

それによりアサルトヤミーは吹き飛ばされる。が、吹き飛ばされている最中、体を捻り体制を入れ替え、神社の拝殿の前……・賽銭箱があつた場所に着地。獣のように膝が二つある脚を伸縮させ飛び出す。その際、飛び出した衝撃でさらに神社を破壊する。

「ガアアアアアアアッ！！」

「神社があああああつ！！」

「はっ！！」

オーズはそれに冷静に対処し、カウンターで右腕を振るう。だが、カウンターが入る直前にアサルトヤミーは地面を蹴り、カウンター

を避けオーズの頭上を飛び越え背後に着地、その鋭い爪を突き立てた。

背中に走る痛みにも耐え兼ね、オーズは膝をつく。

「グウツ！？ はっ！！」

即座に反撃するが、アサルトヤミーは避け、高い身体能力を活かして境内を縦横無尽に跳び回る。

それにオーズは、顎に右手を添え冷静に分析する。

「なるほど、——なら」

そう呟き、両脚に力を集中する。すると、胸のオーラングサークルのバツタの画が輝き、光が両脚に伝達された。

「はっ！！」

「ガァアッ！？」

オーズは跳び、再び頭上を飛び越えようとしていたアサルトヤミにオーバーヘッドキックを叩き込む。

アサルトヤミも流石の不意打ちに耐え兼ねて、石畳に頭から落ちた。

無事着地したオーズは、今度はトラの画が輝き両腕に装備された【トラクロー】を展開させ追い討ちとばかりに切り裂いていく。

その際、アサルトヤミから体を構成するセルメダルが出る。さらに弱ってきたのか、立っているのも弱々しい。

それを見たオーズは、オースキャナーを右手に持った。

「さて、これ以上神社を傷付けるわけにはいかない。——そろそろ終わらせよう」

《Scanning Charge》

再びオースキャナーでメダルを読み込ませ、電子音が響く。

オーズは屈み、力を集中すると両脚が本物の飛蝗のように変化し、それをバネに飛び上がる。そして赤・黄・緑のリングが現れ、右足を出しリングを通過、アサルトヤミに向かって落下する。

「——せいやああああああああつ!!」

「ガアアアアアアアアアツ!?!」

【タトバキック】が炸裂し、アサルトヤミィは爆発。大量のセルメダルが降り注いだ。

妖怪の山・河童の工房。

工房の中で一人の河童の少女、『河城にとり』が額に流れた汗を拭き取り、いい笑顔をしていた。

「ふう、やっと出来た」

「ういーっす、にとり」

「あ、鍊矢」

そこに怪しいが出歩いてるようなグリード、鍊矢が入って来て、挨拶する。

にとりも鍊矢に気付き、いい笑顔のまま話し掛けた。

「頼まれてたの、今出来たよー」

「おお、早かったな。つーか悪いな、無理言って」

「いいっていいって。こっちも楽しめたし。…………お陰で連日徹夜だったけど」

その証拠に、目の下に隈が出来ている。

にとりは苦笑しながら（でもいい笑顔のまま）、「それでね」と

作業机を漁り、一枚の大きな紙を取り出し見せつけた。

「貰った設計図を元に、私なりに新しいのを考えたんだー」

「ほお、銃か」

「うん。剣はあるから、銃も欲しいかなって」

大きな紙——設計図に描かれた図面を見て、鍊矢は感心する。

確かに、“アレ”のフォームは中距離のウナギを除けば、近距離武装ばかり、遠距離の攻撃に欠けていた。

鍊矢の反応が良かったためか、にとりは更に機嫌を良くする。

「さっそく作るよー！ 理論や設計図は出来てるし、材料もまだ余ってるから直ぐに作れるしー」

「ははは、頼もしいなあにとり。——だが……………寝れ」

「……………うん、そうする」

いくら妖怪とは言え、これ以上の徹夜は死ねる。その事を理解したにとりは、「出来たの持っていいよー」と言い残し工房を後にする。

にとりを見送った鍊矢は、頼み作ってもらった物の一つ——片刃の大剣を手に持ち、感触を確かめた。

「流石にとり、良い仕事だ。……さて、行くか」

鍊矢は片刃の大剣を軽く振るい、呟く。

その視線の先には、作業机の上に並べられた多数の色に塗り分けられた複数のカント、変わった形状の自動販売機があった。

Count 2・『右腕とメダルと変身』（後書き）

アंकを始めウル（鍊矢）以外のグリードはオーズを知りません。

というのも、

ウル（鍊矢）がグリード封印、直後にオーズドライバー完成↓ウル（鍊矢）がオーズドライバー強奪↓800年後、幻想郷へ・・・という流れです。

というか、自分グリードが好きなんですよ（理由は不明）。だから裏切りはありませんし、グリード達は基本仲良いです。

Count 3・『勢いと猫と魔法使い』（前書き）

東方欲望録、これまでの3つの出来事！

一つ、グリード鳥系幹部アंकが復活するが右腕だけであり、焼き鳥と間違われる。

二つ、霊夢とアंकの前に、アサルトヤミーが現れた。

三つ、仮面ライダーオーズに変身した名無が、アサルトヤミーを撃破した。

Count the Medals・今オーズが使えるメダルの数とグリードのメダルの数は？

オーズ

・タカ×1

・トラ×1

・バツタ×1

アंक

・タカ×1

Count 3・『勢いと猫と魔法使い』

それは、幻想郷に“欲望”．．．．．大量のセルメダルと数枚のコアメダルが降った夜の事。

その夜、黒い衣服に白のエプロン、大きなリボンが付いたトンガリ帽子の少女．．．．．“普通の魔法使い”、『霧雨 魔理沙』
がいつものように箒に股がり夜空を飛んでいた。

「ふあゝあ。パチュリーの奴、本返せってしつこかったから、すっかり遅くなっちまった．．．．．」

本当に眠そうに呟く魔理沙。

彼女は『悪魔が住む館』と呼ばれる全体が深紅色の館、『紅魔館』の地下にある『大図書館』に行き、その帰りであった。

魔理沙は『借りた物は死ぬまで返さない』ため、よく魔導書を“借りられる”大図書館の司書長、パチュリー・ノーレッジに長く引き留められたようだ。

「だから死んだら返すって．．．」と、漏らす魔理沙だったが、引き留めた裏にあるもう一つの理由^{わけ}には、気付いていない。

とにかくそんな訳で、魔理沙は夜の空を飛んでいるのだが、彼女はふと、空へと視線を向ける。

夜空には、月が幻想郷を照らしていた。満月である。

魔理沙は特に理由はないが、何となく、月を眺めてみると、月の真ん中に黒い“点”が見えた。

「何だ………?」

魔理沙は、目を凝らしてその“点”を見詰める。点は段々と大きく………近づいて行き、そして――

「んがつ!?!」

額の真ん中にヒット。魔理沙は落っこちてしまう。

「痛ったあ………。何なんだ………。?」

森の中に落ち、赤くなつた額を擦りながら立ち上がり、周りを見る。すると、キラんと光る何かを見つけ、拾い上げる。

それは、ライオンの絵が描かれた黄色いメダルであつた。

魔理沙がそのメダルを怪訝な表情で見詰めていると、周りにも他に、数十枚の銀色のメダルが落ちている事にも気づいた。

『落ちている物は必ず拾う』が信条の魔理沙。眠い事もあつて、特に考えず黄色いメダルと銀色のメダルを拾い、同じく落ちていた箒に股がり、自宅へと飛んでいった……。

「——せいやあああああつ——！」

「ガアアアアアアアアアツ!？」

【タトバキック】が炸裂し、アサルトヤミーは爆発。大量のセルメダルが降り注ぐ。

セルメダルの雨の中、着地したオーズはゆっくりと立ち上がる。その時だ。

「——おいっ!!」

「ん？」

突如大声で呼び掛けられ、オーズは声の方向を向く。そこには、格好は巫女服のままだが、まるで“別人”のようにオーズを睨む霊夢？ がそこに居た。

表情だけではなく、黒髪は金髪の無造作ヘアーになり、“右腕がアंक”になっている。

以上の事から、オーズは顎に右手を添えて考え、答えを言う。

「なるほど、霊夢に取り憑いたのか」

「ああ。丁度いい所にあったんてな、使わせてもらった。

……そんな事より、コアメダルを渡せっ！ 元々は俺達のだっ!!」

一度体（霊夢）を見た後、オーズドライバーに納められた3枚のコアメダルを指差し叫ぶアंक。……そして、右腕（本体）で（霊夢の）首を掴む。

「メダルを渡せ。さもなくばコイツがどうな」

「断る」

「るか……。はあっ!？」

霊夢を人質に、コアメダルを取り戻すつもりだったアंकだが、予想外の早さの返答に剽軽な声が出てしまう。

そして、変身した体の感触を確かめているオーズに、慌てた声で問い掛けた。

「お、おいつ！話を聞いているのかっ!？この女は人質なんだぞっ!？」

「問題無い。この程度の事態で、相手の要求に従う必要がない」

何か、自信があるように言うオーズ。アंकは怪訝な表情を向けるが、オーズは言葉を続けた。

「コアメダルに関する項目を閲覧した時、グリードに関する項目も閲覧した。

「……鳥系幹部アंक。今君は腕だけの状態を察するに、コアメダルが1枚だけの状態だ。当然、力も足りないコアメダルの数だけ弱くなっている。
更に、幻想郷の一部の住民は能力を持ち通常の人間より強く、霊夢は博麗の巫女。つまり……」

と、そこで一旦言葉を切る。

アंकは怪訝な表情をさらに強くした、その時だ。

「ブンッ!!」

『なあっ!?!』

「霊夢が、コアメダル1枚だけの君を弾き出せない道理はない」

アंकが支配していた筈の体が突如動き、右腕を振り抜いた。

それにより、アंकは弾き飛ばされ近場の木に衝突し、セルメダルが零れる。

「——たくつ、迷惑な妖怪ね」

自身の体のコントロールを取り戻した霊夢は、木の根元で延びているアंकを睨みながら文句を言う。

そして、オーズに対しても文句を言う。

「あんたもよ。いくら何でも即答はないでしょ」

「問題無い。霊夢なら大丈夫だと確信があつた」

シレッと、霊夢に近寄りながらそんな事を言うオーズ。

それは、霊夢を信じている、という事なのか。その言葉を聞いた霊夢は、「そ、そお・・・」と言ってそっぽを向いてしまう。

オーズは霊夢の反応に気付かず、傾けていたオーズドライバーを

水平に戻す。そうすると、一瞬光りに包まれ、変身が解かれる。

変身を解いた名無は、木の根元で延びているアंकに視線を向けた。

「さて……………どうする？」

「もちろん退治よ。また取り憑かれたらたまらないわ」

名無の問いにそう答え、霊夢はお札を持つ。名無も、“オーズに関する項目は”閲覧し終えているため、特に止める理由はなかった。すると。

――ブオオオオオオ！――

と、石段の下の方から、聞いた事もない音が聞こえ、名無と霊夢は石段の方に注目する。

これはバイクのエンジン音なのだが、幻想郷では無い物のため二人が知らないのも無理はない。

― ブォォォォォ！ ―

次第にバイク音は近づいてき、そして――

― 跳！！ ―

と最後の石段を跳び台に飛び上がり、ブレーキ音と共に着地しスライディングしながら二人の前に停まった。

「……………」

霊夢は、いきなり現れた黒い塊に啞然。名無は……………目をキラキラさせている。

「ふう、さすがにとりだ。良い仕事だ」

バイク——黒い車体に黄色のラインが特徴の、『ライドベンドー』から降りながら、乗っていた人物——鍊矢は、ライドベンドーの性能に満足する。

そして、名無と靈夢に話し掛けようとした、が。

「よう二人と——」

「よくも神社をおおおおおおつ!!」

——夢想封印

「ぎゃあああああああつ!!?」

博麗神社で夢想封印が炸裂した頃、幻想郷の『魔』が集まった森・
・・・・『魔法の森』。

その中にあるゴミ屋敷・・・・霧雨 魔理沙の家兼『霧雨魔法店』で、魔理沙は遅い目覚めを迎えていた。

霧雨魔法店は、一応なんでも屋を営んでいるが、店主の魔理沙の収集癖でゴミ——主に外界からの流れ物——で足の踏み場もない、ゴミ屋敷となっていた。

「ふあ・・・・・何かダルいな・・・・・」

時刻は既にお昼頃。

寝るのが遅かったせいかな？ と、魔理沙は右手で目を擦る、と。

（ん・・・・・？）

目を擦る、手の感触が違う。何か硬い物を腕に付けているような・
・・・・。

右腕に違和感を感じた魔理沙は、まだ寝惚けた目で右腕を見る。

普通なら、肌の少女の細い腕がある筈だった。だが、そこにあった腕は、肘から指先が黒く、手の甲には鋭利な爪が生え、明らかに魔理沙の・・・・人間の腕ではなかった。

「・・・・・なんじゃこりゃあああああああつ
!?」

それは見た魔理沙は、当然シャウト。

『うつ・・・・うつん?　ここは?』

さらに、魔理沙の右腕?　が魔理沙の大声に反応して、喋り、動き出す始末・・・・。

「腕が勝手に動いた喋ったああああああつ!?!」

『うわビックリしたっ！？ ああそう言えば・・・・・・・・。って、
何で支配出来ないし動けるのっ！？』

魔理沙が再びシャウトし、腕は大声に驚き、一人で納得。そして、
意味が——本人しか——分からない事で驚く。

「うわああああああああっ！？」

『痛っ、痛いっ！ 痛いからっ！！』

魔理沙は腕を壁に何度も壁にぶつけ、腕は銀色のメダルを出しながら痛がる。

混乱しているためか、魔理沙は冷静な判断が出来ず、涙目になりながら何度も腕をぶつけるが、当然どうにかなる訳もない。そのため・・・・・・・・。

「アリ、アリスウウウウウウウウウウウウウッ！！」

自宅を飛び出し、同じ森に住む友人に助けを求め疾走する。裸足・パジャマのまま。

「えつ、ちよつ、待つ……メズールアंकウヴァガメル誰か助けてええええええええええつ!!」
 ㊦

「――で、何であんたはあんなの（ヤミー）を作って送ってきたわけ？」

靈夢の冷たい視線が向けられる。勿論その先にいるのは、服がボロボロになりアフロヘアの、正座中のアホ悪魔——鍊矢である。

夢想封印が炸裂した後、神社の居住区画に移動し、現在鍊矢に問

アंकも退治されず回収されたが、当たり所が悪かったのか未だに動く気配はない。

「えーつとですね。名無に送ったオーズ、オーズを名無に慣れさせたくてヤミーを送ったんです……はい。すみません」

と、素直に頭を下げ、土下座して謝る鍊矢。

別世界では好き勝手やり、人を引つ掻き回すのが“癖”の鍊矢であるが、幻想郷において実力はトップクラスだが……腰は結構低い。まあそうでなくても、自分が送ったヤミーが神社の一部を破壊したのは事実のため謝るしかないのだが。

「壊した所、ちゃんと直さないね」

「はい、喜んでやらせて頂きます」

「よろしい。……で、これ、どうするのよ？」

修理を条件に許した霊夢は、テーブルの上で放置していた腕……
……アंकを指差す。

というのも、夢想封印をアホ悪魔に叩き込んだ後退治しようとしたら、鍊矢に止められたのだ。

それ故、鍊矢に理由を聞いたのだ。

「あーうん。一応、同族だからな。……おい、アंक、起きろ」

「……んああ？ 誰だ、お前……？」

「まだ寝惚けんのか？ ……ああ、この姿じゃ分からねえか。待ってろ」

アंकをペチペチ叩き、起こす。だが“今の姿”だと分からなかったようで、鍊矢がそう言うと、体を大量のセルメダルが包む。

そこに居たのは、悪魔。全身漆黒の屈強な体に、血管のように深紅のラインが走っている。ただし、左肩・右腕・左足、さらに背中
の右翼は形が定まっていなかったように黒い靄^{もや}となっており“不完全状態”ではあったが。

因みに、グリード態は幻想郷の殆どの住人は知っているため、霊夢は驚かない。

『……あつ！ お前ウルツ！！ よくも俺達を封印してくれたなっ！！ コアメダル寄越せっ！！』

「ウザい」

『がはっ！？ セ、セルメダルが……………』

グリード態錬矢——ウルを見た瞬間、意識が完全に覚醒したようで、アंकは直ぐに詰め寄るが即座に叩き落とされ、セルメダルが散らばる。

それを眺めていた霊夢は、流石に可哀想になったので助け船を出す事にした。

名無？ 萃香？ ウル（錬矢）が持ってきた物の検索と昼寝で役に立たない。

「錬矢、渡してあげなさいよ。どーせあんたが寝込み襲って奪ったんでしょ」

「ん？ 確かに寝込みを襲ったが……………何だ霊夢、アंकに惚れたか」

「そんなんじゃないわよ。ただ惨めで可哀想だからよ」

『み、惨め……………！？』

霊夢の言葉が、アंकのハートをブレイクした。

「ああそうか。…………無理だっ!!」

「『…………はっ!?!?』」

ウルの手ツキリ、自信たっぷりに言われた言葉に、霊夢とアंकは啞然となる。

グリードから人間態に戻った鍊矢は、その理由を言う。

「だって、自分以外のコアメダル、とセルメダル、幻想郷中にバラ蒔いたから」

『な…………何イツ!?!?』

「あんた…………何やってんの」

その理由に、アंकは怒り、霊夢は呆れる。

一言で幻想郷と言っても、かなり広い。更には妖怪なども蔓延っているため、まず腕だけのアंकがコアメダルを見付けるのは不可能に近い。

そもそも、バラ蒔いた理由が分からない。

その事を霊夢がツツくと……………。

「いや……………年代物のワインが手に入ったから……………」

とりあえず陰陽玉を投げた。主にアंकが。

『ふざけるなあああああああああつ!!!』

所変わって、魔法の森。その中の一軒家。

窓から見える家の中は棚に大量の人形が置かれており、見る者によつては不気味に見える。

ここは“七色の人形遣い”、『アリス・マーガトロイド』の自宅である。

そして今、アリスはエプロンを着け昼食の準備をしていた。

「……………うん。良い感じね」

味を確認し、満足して微笑む。

本日の昼食は鯖の味噌煮。洋食が多いアリスだが、たまに、挑戦の意味も込めて和食も作る。

エプロン姿で調理器具を持ち微笑む姿は、新妻を彷彿とさせる……………話がズレた。

「それじゃ、お皿出して」

自身の近くに浮いていた人形に指示を出す。

アリスの能力は『人形を操る程度の能力』。文字通り人形を自在に操る能力だ。アリス自身が動かすか、指示を出す事で人形達を動かしている。

人形が持つてきた皿に出来上がったばかりの鯖の味噌煮をよそい、テーブルに運ぶよう人形に指示を出す。

事前に他の人形達に指示をしていたため、既にテーブルの上には白米が装われた茶碗と味噌汁、漬物が準備されている。

「ちゅ・ゅ・ゅ・ゅ・ゅ・ゅ」

と、椅子に座り、手を合わせ、頂きます、と呟いて食べようとした時、それは訪れた。

「ア
ア
ア
ア
ア
ア
リ
イ
イ
イ
イ
イ
ス
ウ
ウ
ウ
ウ
ウ
ウ
ツ
！
！」

外から自分を呼ぶ大声が聞こえ、家の出入口の扉を乱暴に叩く音が響く。

はぁ・・・・・・・・・・、とアリスはため息を吐き、席を立って扉に向かう。

「何よ魔理沙、そんなに大声出して・・・・・・・・」

扉を開けながら、面倒そうに言う。

これはいつもの対応だし、多少邪険に扱っても気にするような友人ではない。だが、訪れた友人――魔理沙の今の状態は、アリスの予想の上を行くものだった。

「アア、アリ、アリス・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・へ、ヘルプ・・・・・・・・』

星柄のパジャマ姿の魔理沙が半泣き状態で、魔理沙の右腕が獣のように変わっており右腕が助けを求めている。

そんな状況を見て、アリスはこう言わずにはいらなかった。

「・・・・・・・・・・なにこのカオス？」

その後、アリスは二人？ を落ち着かせるために家に入れ、紅茶を出す。因みに昼食の鯖の味噌煮諸々は人形に一度下げさせた。

「どう、落ち着いた？」

「ああ・・・・・・・・・・。助かったぜ、アリス」

『ありがと。・・・・・・・・・・本当に助かったよ』

紅茶を飲み、落ち着いた魔理沙と右腕はアリスに礼を言う。

なお、右腕は魔理沙から離れているのだが……どうやって紅茶を飲んだかはツツコミ無しの方向で。

アリスは落ち着いたのを見計らい、右腕に質問をぶつけた。

「ところで、貴方は何の妖怪かしら？　腕だけの妖怪なんて初めて見たわ」

『うーん、妖怪と言われたら妖怪かな？　僕はグリードの一人、カザリ』

右腕——グリード猫系幹部・カザリは質問にそう答える。

妖怪の部分を否定しなかったのは、自分でも自覚があったからだ。

グリードと聞いたアリスと魔理沙は、やっぱり言うか、名無と霊夢がアंकに言った言葉を言う。

「「ああ、鍊矢と同じか」」

『鍊矢って誰？』

カザリは当然、それに疑問を抱くが、それを聞く前にアリスはカザリが外界から来たと判断し幻想郷について説明した。

説明省略。

『ふーん、なるほどね……』

「今度は私だ。カザリだったか、お前はなんで私にくっついてたんだ？」

カザリが幻想郷について納得したのを確認し、今度は魔理沙が問う。

一瞬、話すのに悩むカザリ。魔理沙にくっついていた理由を話す事は、自分の弱味を話す事でもあるからだ。

だが、ここで話さないとかえって怪しまれると思い、話す事にした。

『僕達グリードは、体を9枚のコアメダルと大量のセルメダルで構成されている。

封印から目覚めたら、コアメダルは1枚だけでセルメダルも少しし

かなかったから腕だけが復活したの。

それで残りのコアと、他の仲間のグリードを探すために何か仮の体が必要だった』

「それで、魔理沙に取り憑いた」

『その通り。けど、何故か支配出来なくてね、驚いたよ』

「……あつ！　もしかして昨日の夜拾ったのがコアメダルだったのかっ！！」

『うん。復活するまでは意識無かったけど、多分そうじゃないかな』

カザリの説明に納得し、魔理沙が昨日拾ったメダルがオーメダルである事が判明した。

カザリも魔理沙の体を支配出来なかったのは、自分の力がコアメダルが1枚のため力が衰えているのと、魔理沙自身の力が強いからだ、予想する。

そこで、アリスが、そういえば……、と呟き人形にある物を持ってきてもらう。

「昨日、家の近くに落ちてたんだけど……」

『それっ！　僕のコアメダルッ！！』

アリスは人形が持つてきた物をカザリに見せ、カザリは驚いた。

それはカザリのコアメダルである虎が描かれた黄色のメダル——
トラ・コアメダルだからだ。

カザリの反応を見て、アリスはコアメダルを差し出した。

「はい」

『え．．．．．いいの？』

「だって、貴方の方でしょ？　だったら持ち主に返すのが当然でしょう」

『．．．．．ありがとう』

カザリは、戸惑いながら礼を言い、コアメダルを受け取る。

アリスはそれを微笑みながら見た後、席から立ちキッチンに移動する。

「お昼まだだったんだけど、食べる？ 鯖の味噌煮だけど」

「『食べるっ！！』」

即答するパジャマ姿の魔法使いと腕。

——もう仲良くなってる。

そう微笑みながら、アリスは鯖の味噌煮を皿に装うのであった。

Count 3・『勢いと猫と魔法使い』（後書き）

勢い↓酔った勢いでメダルをバラ時く

猫↓カザリ

魔法使い↓魔理沙&アリス

な今回のお話。

先ずは、鍊矢何やってんのっ！？　と思われるかと思います。
ですがそれが鍊矢です。

カザリの性格が違うっ！！　と思われた方、おそらく正解です。カザリはボケが蔓延するこの小説での常識人・ツッコミ担当で、それを踏まえ本編のカザリの喋り方を真似たらこうなりました（笑）。カザリは基本、魔理沙・アリス・????と絡みます。魔法使い陣です。

因みに、魔理沙がシャウトするまでカザリの意識が無かったかと言うと……。

深夜カザリ復活

↓寝ている魔理沙の右腕にくっつく

↓でも支配出来ない

↓魔理沙「むにゃ……」

↓寝返りの勢いで壁に叩きつけられる

↓カザリ『がふっ！？』↓チーン

↓魔理沙がシャウトするまで気絶

という具合です。

では、また次回。

Count 4 『拝借と変態と強奪』（前書き）

東方欲望録、前回の三つの出来事。

一つ、霊夢は鍊矢をボコった。

二つ、グリード猫系幹部カザリが復活し、魔法使い魔理沙&アリスと出会った。

三つ、カザリはトラ・コアメダルを取り戻した。

Count The Medals・オーズとグリードが持っているメダルの数は？

オーズ

・タカ×1

・トラ×1

・バッタ×1

アंक

・タカ×1

カザリ

・ライオン×1

・トラ×1

Count 4『拝借と変態と強奪』

博麗神社境内。

そこに、“オーズとなった擬似グリード”の名無と、

“悪魔によつて右腕だけになったグリード鳥系幹部”のアンクが縁側に腰掛けていた。

鍊矢はいつの間にか居なくなっており、霊夢は人里へ——鍊矢から慰謝料と修理費を貰ったため——久々の——買い出しへ。萃香は仲間の鬼に用事と、地底へ向かったためいない。

なら、名無とアンクは留守番か、と思われるがそれは違う。二人はある人物を待っているのだ。

その時、二人の前に一陣の風が吹き、黒い翼を持つ一人の少女が降り立った。

「清く正しい新聞屋っ！ 毎度お馴染み射命丸ですっ！！」

清く正しい新聞屋、というのはともかく、現れたのは、『伝統の

幻想ブン屋』こと鴉天狗の『射命丸^{しゃめいまる}文^{あや}』である。

彼女を始めとする鴉天狗は新聞を発行しており、その中でも文が作る『文々。新聞』は幻想郷の住人によく読まれる割とポピュラーな新聞である。

名無とアंकが待っていた人物は、彼女であつた。

「射命丸 文」

「あやや、霊夢さんと姉妹でカップリング疑惑の名無さん。何かご用ですか？」

「それは君が流した噂だろう？ それより、君の力を借りたい」

そう言い、名無は縁側から立ち上がり文に近付く。そして、タカ・コアメダルを取り出し見せた。

因みにどうやって文を呼んだかと言うと、名無は鍊矢から渡された【カンドロイド】を使い、【バッタカンドロイド】を【タカカンドロイド】で運ばせ文の元まで行かせたのだ。

「あや？ これは？」

「コアメダル。…………君の新聞に、コアメダルを載せてもらいたい」

それが名無の目的だった。

文の『文々。新聞』は先に述べた通り、幻想郷ではポピュラーな新聞だ。使用用途はともあれ、必ず一度は目を通すだろう。そこにコアメダルの事を載せれば、情報が手に入る。そう考えたのだ。

文は常に新聞のネタを探しているので、コアメダルの事を新聞に載せる事事態が彼女への報酬になる。

「なるほど…………。あ、そう言えば」

と、文は何かを思い出したようでスカートのポケットに手を入れ、何かを取り出した。

それは、龍…………ではなく、鰻が画かれた青いコアメダル。水棲系のウナギ・コアメダルであった。

「ここに来る途中に拾いました」

『それを寄越せっ!!』

ウナギ・コアメダルを見た途端、今まで黙っていたアंकが飛び出しコアメダルを奪おうとする。

だが文はその場で回る事であっさりと回避。勿論、ウナギ・コアメダルはしっかりと持っている。

『それは仲間のコアメダルだっ！ 返せっ!!』

「あやや〜？ “仲間の”、という事はあなたのじゃありませんよね〜？ だったら返す義理はありませんね〜。

と言うかあなた、腕だけの妖怪なんて珍しい。メダルなんかより、あなたのような“珍”妖怪の事を新聞に載せた方が面白いかも知れませんね〜」

と、アंक（珍妖怪）を見ながら——鍊矢には負けるが——悪い笑みを浮かべるパパラッチ天狗。

彼女は人の頼みより、新聞のネタとして面白い方を優先する。と言うか、新聞のネタになればなんでもいいのだ。

だが、そんな文の性格を知っていて呼んだ人物が、何もしない訳がない……………。

《タカ！　トラ！　バツタ！　タ・ト・バ♪　タトバ♪　タ・ト・バ♪》

「あや？　何ですかこの串田。キラボイスは・・・・・・・・・・で、あなた誰なんですか？　何で剣を持っているので？」

「何、ちよつと威力を試したくてね。・・・・・・・・・・さて、射命丸文。――メダルを寄越せ」

「その声は名無さんっ！？　と言つか最後凄いドスの利いた声・・・・・・・・・・」

あぁっ！　何で剣にチャリンチャリンってメダルを――」

《トリプル！　スキヤニングチャージ！》

「――オースバツシュッ！！」

「ひぎゃあああああああああああぁっ！？」

――ブオオオオオオオオオッ！！――

神社から続く道を、幻想郷では聞きなれない音を上げながら疾走する鉄の塊があつた。

【ライドベンドー】。

河童の河城にとりが鍊矢がもたらした設計図を元に開発した高性能バイクである。

セルメダルを動力に動くバイクを運転しているのは、勿論名無。そして、ライドベンドーに乗って走る彼の上を並走……………いや並飛行している人影があつた。

その人影は射命丸 文に見える。だが髪は金髪で鴉天狗の黒い翼は赤く、色鮮やかな羽が生えておりさらにシャツを大きく開け、胸元が見えている。

その射命丸 文？の右腕は鳥の印象がある異形の右腕……………つまりアंकだ。

オーズバニツシュにより気絶した文を、アंकが仮の肉体として

使用しているのだ。

「……………で、一体どこに向かつてるんだ？」

文の体を使っているアंकが、名無に聞く。

因みに、タトバコンボ用の三枚のメダルと文から奪い返したウナギ・コアメダルは名無が持っている。……………コアメダルに興味を持った名無が、頑として渡さなかったからだ。

……………ダブったら渡す気らしい。

「魔法の森の近く、『香霖堂』という店だ。その店主が変わり者で、幻想郷の物だけでなく外の世界の物も扱っている」

「なるほど。もしかしたらコアメダルもあるかも知れない、という事か」

名無はアंकの言葉に頷く。

確かに香霖堂にも用はあるが、魔法の森に住む霧雨 魔理沙が蒐集癖があるので彼女の家にも寄るつもりだ。

暫く道を進むと、森が見えてくる。あれが魔法の森だ。

そして森の入り口に小さな建物、『香霖堂』が見えてきた。

「あ？」

「あれは………」

名無とアंकは、香霖堂の前に人影を見つけた。

最初は遠くて分からなかったが、その人影は黒い服にスカート。スカートの前部分のみに白いエプロンを装着し頭にトンガリ帽子——いわゆる魔女帽子——を乗せている。手には箒を持ち、肩に担いでいた。

人影もこちらに気づいたようで、こちらの方を見た。名無が訪ねようと思っていた人物だ。

名無はライドベンダーをその人物の前で止め、アंकも地面に降り立った。

「霧雨 魔理沙」

名無はその人物の名前を呼ぶ。

だが魔理沙？は名無に怪訝な表情を向ける。よく見れば、魔理沙の金色の髪がグレーになってる。

魔理沙？は名無の後ろにいるアंकにも目を向ける。そして、アंकの右腕（本体）を見て少し驚いた表情になった。

「もしかして……アंक？」

「あ？ お前、カザリか？」

名乗ってもいないのに名前を呼ばれ、今度はアंकが怪訝な表情になるりながら、相手の雰囲気で誰かと言い当てる。

どうやらグリード猫系幹部のカザリが、魔理沙の体を使っているようだ。

何故カザリが魔理沙の体を使っているかと言うと、それは少し前の事……。

名無とアंकが文と会っていた頃、昼食をアリスにご馳走になった魔理沙とカザリは、魔理沙の自宅兼店兼ゴミ屋敷の霧雨魔法店に戻っていた。

『香霖堂？』

「そつ。香霖^{こうりん}つて奴がやってる古道具屋だ。そこには色んな物が売っていて、中には外の世界の物まである。もしかしたら、香霖がコアメダルを拾って売ってるかもな」

そう言い、パジャマからいつもの格好に着替えた魔理沙は、トンガリ帽子を手でクルクル回しながら出かける準備をする。

『そつか。じゃあ、その古道具屋の場所を教えてください？　行ってくるから』

「まあ待て。私も行くぜ？　ミニ八卦炉の修理頼まねえと」

そう言つて、魔理沙は帽子から小さな八角形の物体——ミニ八卦炉を取り出し見せた。

魔理沙がライオン・コアメダルを拾う——鍊矢がオーメダルをバラ時くというアホをやる——前に、紅魔館の図書館で戦闘を行い、無理をさせて壊してしまつたらしい。

カザリと魔理沙は、波長が合うのか自分の事を話せる仲になつていた。

カザリは納得し、魔理沙と共に霧雨魔法店を出る。二階の窓から。

「なあカザリ」

『何？』

「ちょっと私に取り憑いてくれないか？　私つて取り憑かれた事ないから、どうなるか知らないんだよ」

『ふん。別にいいけど』

「つまり、霧雨 魔理沙の頼みで取り憑いたのはいいが、霧雨 魔理沙の意識がなくなった、と」

「そうそう。どうやら体の主導権以外の意識は眠るみたいでさ、香霖堂の場所が分からなくて焦ったよ」

と、ここまでの経緯を二人に語る魔理沙inカザリ。

グリードは取り憑いた体の意識の記憶を見れるので、それを頼りにここまで来たらしい。

「あれ………？ 君、もしかして僕のコア持ってる？」

カザリは名無の持つトラ・コアメダルに気づいたようで、名無は隠す必要もないのでコアメダルを取り出し見せた。

「僕のコアッ！」

そしてすぐに仕舞った。

「あっ！！！」

「悪いけどオーズに変身するために必要なんだ。それにトラは1枚しか持ってないから渡さない」

「何その横暴な理由っ！　て言うかオーズって何っ！？」

だが名無はカザリの叫びを無視し、香霖堂の出入口の引き戸に手を掛ける。

「ちよっ・・・・・・・・」

「カザリ、諦める。俺も同じ事言われた。・・・・・・・・それと、あいつが持つてるお前のコアはトラの1枚だが、別のコアをがあるなら絶対に言っな。盗られるぞ・・・・・・・・！」

「わ、分かった・・・・・・・・」

カザリはトラ・コアの他にライオン・コアを持っているので、ア
ンクの忠告通り言わない事にした。

アंकとカザリは聞こえなかったようで、名無は気にせず引き戸
を開ける。

そこには・・・・・・・・。

「ふっ、ハアッ！ アニキ、アニキ、アニキと私っ！ アニキと私
っ！！」

そこには、眼鏡を掛けた白髪の高い男が体の全身から汗を振
り絞り、真紅の禪一丁フントシで暑苦しいフレーズの歌を歌いながら、暑苦
しい踊りを踊っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

《タカ！ ウナギ！ バッタ！》

「はっ！」

「ギャアアアアアアアアアアアッ!?」

名無は無言でオーズ・タカウバに変身し、ウナギ・コアによって新たに得た武器【電気ウナギウィップ】のボルタームウィップで容赦なく変態を叩いた。

「——いやあ、ごめんごめん。新しく手に入った本に書いてあった事を試していてね、見苦しい所を見せた」

そう名無、アンク、カザリに謝罪するのは先程の変態——香霖堂の店主、『森近^{もりちか}霖之助^{りんのおすけ}』。魔理沙からは店名の『香霖』と呼ばれている。

彼は『道具の名前と用途が判る程度の能力』を持ち、その名の通り見ただけで道具の名前と用途が分かるのだが、“どう使うのか”が分からないためこうして試したりするのだ。……まあ、どう使うのかが分からないので、用途の解釈を間違えたりするが。

名無は霖之助、強いては幻想郷の住人に関しては検索済み。アンクとカザリはそれぞれの体の持ち主の記憶を見て、確認した。

因みにアンク（文）とカザリ（魔理沙）については説明済みだ。

「それより森近 霖之助、コアメダルは」

「おっと、そうだったね。確かに1枚あるよ、ちょっと待ってくれ」

そう言って、霖之助は店の奥に行く。

「何これ、ぶるま？」

「『ブルマ』。外の世界の少し昔まで使われていた、女子用の体操着だ。萌えアイテムの一つとされ、『スパッツ』派とブルマ派の争いがあつたりなかったり……」。

“シャツをブルマの内側に入れる”か、“ブルマの外に出す”かなど論争が一部であつたとか。今でもコアなファンが多い」

「これは何だ」

「『スク水』。正式名称は『旧型スクール水着』。女子用の水中服で、胸の部分に名札があるのが特徴」。

近年では見なくなったタイプだが、ブルマと同じく萌えアイテムの一つで今もファンが多い。なお、名札には“ひらがな”で名前を書くのが決まりだそうだ」

霖之助が戻るまで暇なアंकとカザリは店内にある物を物色し、手に取った物を名無が能力を使って検索——一部間違い・偏見有りを——説明していた。

霖之助の名誉のために言うが、これは外から流れてきた物を置いてあるだけであつて、彼の趣味ではない。先程のようにたまに、極たまーに禪姿になるが霖之助は幻想郷でも数少ない、常識人だ。

「やあ、待たせたね。一応能力で確認したけど、これで合ってるかな？」

暫くして戻ってきた霖之助は、カウンターの上にコアメダルを置く。

カウンターの上に置かれたのは、黄色の猫科の動物が画かれたコアメダル——カザリのチーター・コアメダルだった。

そこからは素早かった。

絵柄も色も確認しないうちに、“オーズ本編で他人のメダルをかつ攫うのに定評のある”アンクとカザリは手を素早く伸ばした。

勿論、メダルを得るためなら実力行使もいとわない、なんちゃって巫女擬似グリードから守るためだ。

だが、なんちゃって巫女擬似グリード——名無の方が上手だった。

アンクとカザリが手を伸ばした瞬間、名無は巫女服の袖から待機状態のカンドロイドを取り出し、左右に投げた。

カウンターを向かいに、左からカザリ・名無・アンクの順に立っていたため待機状態のカンドロイドは、アンクとカザリの横顔にクリーンヒット。その衝撃でカンドロイドが起動し、二体の【タコカンドロイド】に変形する。

《《タコ》》

「へぶっ!?」

変形を終えたタコカンドロイドは、アंकとカザリの顔面に墨を吹っ掛けた。

アंकとカザリは悲鳴を上げるが、名無はその隙に手を伸ばしチーター・コアメダルをゲットした。

「変身」

《タカ! トラ! チーター!》

そして、直ぐにオーズ・タカトラーターに変身し、クラウチングスタートの体制に入る。

チーター・コアによって変化したオーズの両足【チーターレッグ】から煙が上がり、いつでも走り出せる準備が整う。

「おい名無、ま——」

アंकが『待て』と言う前に、オーズはスタート。店の床と引き戸を破壊し、そのまま外へ走っていった。

「僕のメダルー！？ しかも2枚っ！！」

「ちっ、追っぞ力ザリッ！！」

「あ、うんっ！・・・・・・ってそうだ」

オーズを追うため、店を飛び出したアंकを追って行こうとしたカザリは一旦霖之助の前まで戻り、トンガリ帽子からミニ八卦炉を取り出しカウンターの上に置いた。

「それ、魔理沙が直しとってって言ってたから。じゃっ！！」

「ああ分かった。気をつけて、またのご来店を」

ミニ八卦炉を受け取り、霖之助は走っていった魔理沙・・・・・・・・の力ザリの後ろ姿を見て微笑んだ。

「これがチーターの力……！！　フハハハハッ！！」

「待てゴラアアアアアッ！！」

「僕のメダルー！！」

チーターレッグで疾走するオーズ（名無）。

赤い翼を羽ばたかせ、トップスピードで追う文。^{アング}

そんな二人を追って、箒にエ。レカセブンのリフボードの如く乗る魔理沙。^{カザリ}

三人が通った道には土煙が上がり、奇しくも幻想郷最速を決めるレースが繰り広げられていた。

「――夢想封印ッ!!」

「「「ギヤアアアアアアアアアアアッ!?!」」」

だがそれも、騒ぎを聞きつけた博麗の素敵な巫女によって中断させられたが。

因みに一番被害が大きかったのは、アंकとカザリに体を使われていた文と魔理沙であった。

「ああ………。酷い目にあつた」

夕方。夢想封印によってアंकから分離した文は、妖怪の山にある天狗の里に戻っていた。

やはり夢想封印で服の所々は焦げ、顔は汚れ髪は跳ねている。

「うう、面倒な事引き受けちゃつたなあ。止めよつかなあ……。止めたら止めたでまた斬られそうだから、やっぱりやるしかないか……。…」

結果を少し斬つた斬撃を思い出し、タメ息を吐く。

重い足取りで自宅に向かう。

途中、上司の大天狗や馴染みの白狼天狗、同僚の引きこもり鴉天狗がギョツとした目で見ていたがそれも目に入らない。

「はあ……。あれ？ あれは」

タメ息を吐きながら自宅の前まで来ると、玄関の前に、夕日の光りを浴びて光る何かを見つけた。

文はそれを拾い上げ、夕日に翳してみる。

それは、コンドルが画かれた赤いメダルであった。

朝は直ぐに飛び出したので、気づかなかったのだろう。

「・・・・・・・・・・はあ」

これはコアメダルであるのは明白。一瞬、届けた方がいいのかとも思ったが、今日は肉体的に疲れた。

文はスカートのポケットにコアメダルを仕舞い、自宅の中に入った。

今から、明日の朝刊を作らなければならないのだ、メダルは今度渡せばいい、そう思った。

C o u n t 5 に 続 く

オーズが新たに手にいれたメダル

チーター × 1

ウナギ × 1

Count 4『拝借と変態と強奪』（後書き）

拝借↓文の体を

変態↓こーりん

強奪↓ウナギ・チーターメダル

な今回のお話。

チルノ達をADVENT CIRNOにしようか迷ってます。

ギャグ中心だと話が直ぐに作れる。

こーりんにチーターメダルかと言うと、

本小説の白いカザリとオーズ本編の黒いカザリ、

原作の常識人霖之助と二次の変態こーりん

みたいな二面性の関係です。

ラトラーターとタジャドルフラグが立ちました。

一応、本小説では4枚のコアメダルと大量のセルメダルでグリード態になれます。名無がメダルを渡せば、カザリはグリード態になりますが渡しません。

次回、ガメルが出る予定です。

Count5『純粹と暴走と黄色のコンボ』（前書き）

東方欲望録、これまでの三つの出来事！

一つ！ 名無は射命丸文にコアメダルの記事を依頼し、ウナギ・コアメダルを強奪。

二つ！ 香霖堂へ行き、そこでチーター・コアメダルを強奪！

三つ！ 自宅へ帰宅した射命丸文は、コンドル・コアメダルを見つけた！

Count The Medals・オーズとグリードが持つてるメダルの数は？

オーズ

・タカ×1

・トラ×1

・チーター×1

・バッタ×1

・ウナギ×1

アंक

・タカ×1

カザリ

・ライオン×1

・
ト
フ
×
1

C o u n t 5 『純粹と暴走と黄色のコンボ』

『紅魔館』。

霧の湖の畔に建つ、窓が少ない紅い館。別名、『悪魔の棲む館』。

館の主である吸血鬼、『レミリア・スカーレット』を筆頭に幻想郷内でも指折りの実力者が棲む館である。

その紅魔館が今………大変な事になっていた。

「メズウウウウルウウウウウウウウツッ!!」

『……………』

本来金色である髪と、七色に光る歪んだ形状の翼を白、銀、グレイに変わり、叫ぶ悪魔の妹。

天井や壁に突き刺さったり、力なく倒れる妖精メイド達。

「フランツ!? どうしたのフランツ! フランツ!?」

「ゼエ…………ゼエ…………」

「あわわわわ……………」

妹の暴走に泣いて慌てふためくカリスマブレイクしたスカーレットデビル。

持病の喘息で息が切れ切れの動かない大図書館。運動不足。

どうすればいいかオロオロする小悪魔。

紅魔館の入り口に入ってすぐの大ホールで行われている光景に、
名無、霊夢、アンク（腕だけ）、魔理沙^{カザリ}は声を揃えた。

「…………何このカオス?」

何故こうなったか。それは数時間前に遡る…………。

「——うん。ちゃんと載っているな」

前日にチーター・コアとウナギ・コアを強奪した仮面ライダーオーズ——いつもの博麗の巫女服の名無は、博麗神社の居間で寛ぎつつ、今朝の『文々。新聞』を読んでいた。

『文々。新聞』の一面には、『情報求む、コアメダル』という見出しでコアメダルの写真と、『コアメダルを見つけたら博麗神社に連絡を——』と文章が書かれていた。

文は要望通りちゃんと書いたようで特に変な所はなく、これでもしコアメダルの記事を書かない・もしくは事実無根な部分があれば、妖怪の山に乗り込んでタトバキックをするつもりだった。

名無は新聞を折り畳むと、一度右手を閉じ、また開く。すると、手の平には数枚のコアメダルが乗せられていた。

名無は1枚の“ニンゲン・コアメダル”を核に残りをセルメダルで構成されている擬似グリード。そのため、メダルやオーズドライバーを体内に収納出来る。

「鳥と虫と水棲系のメダルが一種類ずつに、猫系のメダルが二種類・
．．．．ライオン・コアメダルが手に入れば“コンボ”が使える」
「“コンボ”？ 何よそれ」

メダルを見てブツブツ言っていた名無に、気になる単語があったので、同じく居間でお茶を飲んでいた霊夢は聞く。

鳥や虫、水棲系や猫系というのはコアメダルの絵柄を見れば分かる。だが、“コンボ”というのは今まで聞いた事がない。

「コンボというのは、同種族のコアメダルを三種類を揃える事で発動するオーズの特殊形態だ。
例えば、この黄色のメダル．．．．」

そう言い、名無はカザリのコアメダルであるトラとチーターのメダルを見せる。

「トラとチーターの絵が書かれているが、これにもう一枚ライオン

の絵が書かれたメダルが揃う事でコンボになる。
コンボは、同種族の3枚のメダルの力を最大限に発揮する事ができるんだ」

「ふーん」

霊夢はいまいち理解できていないのか、軽くそう返す。と言つても、説明している名無自身もいまいち分かっていない。

『全てのモノ事を検索する程度の能力』でコンボの種類・能力、コンボにより使用者に負担が掛かる事は分かっている。

だが、どれ程の負担が掛かるまでは分からなかった。

軽い疲れが掛かる程度なのか、それとも倒れてしまう程なのか。

オーズの最初の装着者を参考にしようと思ったが、その最初のオーズが錬矢だっただけに、参考になるはずがない。

それ故、実際に名無自身が試さないとどうなるか分からないのだ。

「……まあ、ライオン・コアがないから試しようがないんだけどね」

ライオン・コアがなければコンボはできないので、試す事が出来ない。

魔理沙の所に居候しているカザリがライオン・コアを持っているが、名無はその事を知らない。

「あ、そう言えばアंकは？ 朝から居ないんだけど」

「カザリの所に行ったよ。話す事が色々あるんだろう」

最近増えた腕だけの居候の姿が見えなかったので、霊夢は名無に聞くと名無はそう答えた。

アंकは今朝からカザリが居候する霧雨魔法店に行っている。

腕だけの現在のアंकでは妖精にも劣るので、護衛としてカンドロイドを数機付けている。

今日は特に用事がなく、コアメダルの搜索は情報が入りしだいに動くつもりだった。

お茶を啜りながらのんびりする名無と霊夢。端から見たら双子の姉妹にしか見えない。

霊夢が着けている赤いリボンの名無は着けていないが、その微妙な違いが余計姉妹に見える。

姉弟（兄妹）ではなく、あくまで姉妹だ。

「――相変わらず仲がいいわね」

と、突如声が聞こえた。

名無と霊夢は特に驚いた様子もなく――霊夢は面倒そうに――、視線を声のした方向、縁側の方に向ける。

縁側の向こう、庭に居たのは銀髪のメイド服姿の少女。

『十六夜咲夜』。

人間の身でありながら、紅魔館のメイド長をしている少女――霧困気、性格は立派な大人の女性――である。

彼女は『時間を操る程度の能力』を持ち、時間停止・時間加速・時間逆行が行える。今も時間停止をして移動し現れたのだろう。

……パットを使用した偽乳疑惑があ――ザクッ

「……あんだ、なんで急にナイフをあさってな方向に投げたわけ？」

「失礼な事を言われた気がしたからよ」

「どうでもいい。——十六夜咲夜、今日はこういった用件だい？」

名無がそう聞くと、咲夜はちゃぶ台の上に置いていた新聞を指差した。

「その新聞の一面。そのメダルに心当たりがあるから、教えに来たのよ」

「ほうっ！ 何のメダルだい！？ 色は！？ 絵柄は！？」

「落ち着きなさいっ！」

「ぐっ！？」

メダルと聞いた瞬間、咲夜に恋人の距離まで詰め寄る名無に、霊夢は陰陽玉を投げつける。

陰陽玉は名無の後頭部にヒットし、名無は前のめりに倒れる。咲夜は時間停止を使い名無の前から退避。

名無はそのまま、縁側から地面に顔面から落ちた。

「・・・・・・・・痛い」

「それはね。とりあえず、説明は移動しながらでいいかしら？」

「・・・・・・・・うん」

そんなこんなで空を移動し、咲夜から話を聞いた。

鍊矢がアホをやった夜の次の日に、ベランダでメダルを発見。

『動かない大図書館』と称されるほど動かず引き籠もって本を読んでいる、紅魔館の頭脳と言える魔法使い、『パチエリー・ノーレツジ』にメダルを見せたところ、興味を持ったため咲夜に他にもないか探すよう頼んだ。

咲夜はパチエリーの頼み通り、紅魔館の周辺を探すと、意外にも落ちていた。

種類と数は、黄色が1枚、緑が1枚……白が4枚。さらにセルメダルもかなりの量が落ちていた。

当然、パチエリーはメダルを調べようとしたが紅魔館の大図書館にはメダルに関する本が見つからない。

大図書館に保管されている本は大概が魔導書であり、メダル自体がそんなに知られていないのが中々見つからなかった。

そこで今朝の新聞の一面を見つけ、詳しい事を知る名無を連れてこようという事に。

霊夢も暇だからという理由で着いて来て、途中で紅魔館に向かうアंकと、また魔理沙の体を使用して箒リフボードで飛行するカザリと合流した。

何でも、紅魔館からメダルを感じたとか。

そして五人（魔理沙を入れると六人）で行く事になり、霧の湖を通り、門を潜って正面から紅魔館に入り……冒頭へ戻る。

「……何このカオス？」

「お嬢様っ！」

名無達が声を揃える中、咲夜はマジ泣きの主に駆け寄る。

レミリアも咲夜に気付き、顔から出る物全部出した顔を向けた。

「さぐやゝ あゝ あああつ！ フランがつ！ フランがあゝ ああああ
ああつ！ー！」

「落ち着いてくださいお嬢様。はい、チーンして」

「チーンっ！」

「いや、あんたは落ち着きすぎよ。

それにしても、フランは何で暴れてるのよ。最近じゃ全然なかった
じゃない」

霊夢は物影に隠れながら、落ち着きすぎな咲夜にツツコミを入れ、
改めて暴れているレミリアの妹——『フランドール・スカーレット』
に疑問を持つ。

フランドールは“気”がふれており暴れる事が多々あったが、最
近じゃストレスが少なくなったのか暴れる事はなかった。

だが、フランドールは現在進行形で叫び、その波動でシャンデリ
アや手摺、壁の一部などを破壊している。

「メズウウウルウウウウツ！ どこおおおおおおお
っ！！」

それに、先程から叫んでいる『メズール』とは誰なのかも検討も
つかない。

霊夢は詳しい話を聞くため、——使い物にならないレミリアとパ
チエリーを無視して——オロオロしている赤毛で頭と腰から悪魔の
羽を生やした少女、小悪魔に事情を聞く。

「ちょっとあんた！ 何でこうなったわけ？ 説明しなさいっ！」

「は、はいっ！ フランお嬢様、今朝は普通で本の整理を手伝って
くれたりしたんです。でも少し目を離したら、急に……..
パチエリー様とメイド達が止めようとしたんですけど、止まらな
くて」

霊夢は『そう……』と返し、今度はパチエリーを見る。

パチエリーはまだ喋れるほど回復していないようで、首を横に振る。
パチエリーにも、原因は分からないようだ。

「じゃあメイリンは？ フランの御守り役でしょ？」

「メイリンは今日は非番で、正義の味方と妖怪鬼と一緒にダンジョンに行ってるわ」

主を慰める咲夜からそれを聞き、霊夢はガツクリと項垂れる。御守り役である彼女がいないと、フランドールを止めるのは難しい。

「霊夢、メダルだ」

そんな時、同じく物影に隠れていた名無がそんな事を言った。

それを聞いた瞬間、霊夢はずっこける。

「って、あんたっ！ そんな事言ってる場合じゃ」

「違う。フランドール・スカーレットの中から、メダルを感じるんだ」

「はっ！？」

霊夢は驚きの声を上げる。

何故吸血鬼であるフランドールから、メダルを感じるのか。

『名無の言う通りだ。あのガキの中にメダルがある』

「この感じはガメルだね。でも、ウヴァや僕の気配もする」

アंकとカザリも同じように感じたようで、名無の言葉に同意する。

さらにカザリが言ったのは、重量系グリードのガメルだ。

ガメルはグリードの中で一番己の欲望に忠実であり、水棲系グリードのメズールに母親に甘える子どものように懐いている。

良く言えば純粹。悪く言えば子ども。それがガメルなのだ。

相手がガメルなら、メズールを求めて叫んでいるのも納得出来る。

しかし、目の前で暴れているのがグリードのガメルだとして、何故フランドールの姿なのか、何故別のグリードであるウヴァやカザリの気配がするのか。

名無は顎に手を当て、理由を考える。すると、一つの仮説が思い浮かんだ。

「……十六夜咲夜、確か、見つけたメダルは白が4枚に緑と黄色が1枚ずつ。それにセルメダル、銀色のメダルが数十枚と言っていたね。集めた後、パチエリー・ノーレッジに渡した？」

「ええ、そうよ。でも、その時はパチエリー様は忙しそうだったから、テーブルの上に纏めて置いたわ」

「これは憶測だが、先程小悪魔が言っていた、少し目を離れた間。その時に、フランドール・スカーレットは集められていたメダルを見つけて、何らかの理由で取り込んで……。いや、取り込まれた。」

フランドール・スカーレットを器に、グリードのガメルは復活したが、別のグリードのメダルも一緒に取り込んでしまったため不安定になり欲望が暴走、ということだろう」

グリードにとって、コアメダルは自分を構成する核であり、力の源だ。だが、自分以外のコアメダルも力の源になるが、同時に“毒”にもなる。

例えば、機械に規格外のパーツを付けると一時的には機能が向上するだろう。だが、それが原因で故障してしまう。

分かり難いかも知れないが、別のグリードに別のコアメダルを入

れるというのはそういう事なのだ。

「名無の予想通りだろうね。とにかく、ガメルを止めないと」

『だがどう止める』

「暴走の原因を取り除けばいい。何とか引き付けておいてくれ、僕に考えがある。」

霊夢と十六夜咲夜はこのまま残っていてくれ、大勢で刺激を与えないほうがいい」

「ええ、分かったわ」

「名無、しっかりやりなさいよ」

「了解」

算段を終え、名無とアंक、カザリは物影から飛び出す。

カザリは箒をリフボードのように乗り、アंकは腕だけなのを活かし素早い動きでガメル（フランドール）の注意を引く。

「変身」

《タカ！ トラ！ チーター！》

アंकとカザリが注意を引いてるうちに名無はオーズ・タカトラ
ーターに変身し、構えその時を待つ。

『ガメル、こつちだこつち』

「ガアアアアアアアッ！！」

『おつとつ！』

「ガメル、こつちだよ」

「ガアアアアアアアッ！！」

アंकがフランドール（ガメル）の前で手をヒラヒラさせ、ガメルは本来ウヴァの能力である緑色の電撃を放つが、アंकは素早く移動して電撃を避け、今度はガメルの上で箒に乗ったカザリが注意を引く。

カザリにはガメル本来の能力の重力操作により、カザリの頭上の天井を破壊し破片を落とす。

カザリは華麗なりフティングを見せ、破片をかわして行く。

(どこだ……どこにある……)

オーズはタカヘツドの複眼を赤く輝かせ、フランドール/ガメルを見る。

タカヘツドの複眼……鷹の目は獲物を逃がさぬ狩人の目。ガメルの中を透視し、目的の物を探す。

やはり言うべきか、見た目はフランドールでもガメルのためか、体内のほとんどがセルメダルで構成されている。

『カザリ、回れっ!』

「了解っ!」

「うわああ、目が回る」

アंकとカザリがガメルの周りを回り初め、ガメルは二人を目で追いかけようとしたため、自分も回り目を回し始めた。

「今だっ！！」

その隙を、オーズは見逃さない。

チーターレッグによって一気に加速。ガメルの直ぐそこまで近づく。トラクローを展開し、ガメルの体に突き刺す。

吸血鬼の姉が何か騒いでいるが、無視する。

「ッ！ これだっ！！」

トラクローを引き抜く。爪の間には1枚のメダルが挟まっていた。

ガメルが腕を振り回すがオーズは当たる前に飛び退く。

オーズが抜き取ったのは、獅子が描かれた黄色のメダル……
・ライオン・コアだ。

オーズドライバーからタカ・コアメダルを抜き、代わりにライオン・コアを嵌める。

ドライバーに収められた3枚の同属性のコアメダル。オーズはオースキャナーをドライバーを滑らせ、メダルを読み込ませた。

《ライオン！　トラ！　チーター！　ラタラター♪　ラトラーター♪》

「おおおおおおおおおつ！！」

コンボを知らせる不思議な歌。獅子の咆哮と共に、眩しいほどの光がエントランスホールを満たした。

カザリの3枚のメダルによって発動する猫系コンボ。『仮面ライダーオーズ・ラトラーターコンボ』だ。

ライオンヘッドの鬚、^{たてがみ}オーズの全身から放たれる強烈な光——『ライオディアス』が周りを焼き、溶かす。

『ギヤアアアアアアアッ！？』

「眩しい〜！」

「焼けるっ！　溶けるっ！！　蒸発するっううううっ！！！」

ライオディアスの熱線は半径数キロメートル……つまり

エントランスホール全体に及び、アंकはまともに受け、ガメルは眩しさのあまり目を擦り、レミリアは消滅の危機に陥っていた。

カザリは同属性のため対抗があり、レミリアを除いたメンバーは物影に完全に隠れてやり過ごしていた。

「はっ！」

オーズ・ラトラーターコンボはクラウチングスタートの姿勢から駆け出し、ガメルに肉薄する。

だがガメルは、肉薄したオーズに気付かず目を擦るばかりだ。

「ふっ、はあああああっ！！」

「うっ、うっううっ！？」

肉薄したオーズは、ガメル（フランドール）の両肩を掴み、チーターレグによるつま先蹴りの連続蹴りを浴びせる。

ガメルは苦悶の声を上げ、フランドールの体から大量のセルメダルが零れていく。

これがオース（名無）の狙いだった。

ライオディアス

熱線により目を封じ、チーターレッグの連続蹴りでフランドールの体内に入り込んだコア・セルメダルを排出させるのが狙いなのだ。

次々と飛び散るセルメダル。その中に、緑色と白に光るメダルも混じっていた。

「これで・・・・・・・・・・！」

連続蹴りを止め、右腕をフランドールの腹部に突き刺し、引き抜く。その手に握られていたのは・・・・・・・・・・白の、最後にフランドールの中に残っていたコアメダルだ。

最後のコアメダルを抜くと、フランドールは糸が切れた人形のようになり倒れる。ガメルのもダルの色に変わっていた髪と翼は、元の金髪と虹色に戻っていた。

「上手くいったみたいだね」

「ああ。最後にこれで・・・・・・・・・・」

隣に降りたカザリの言葉に応じた後、オースは持っていたコアメダルをセルメダルと、コアメダルが散らばった床に投げた。

床に落ちた4枚の重量系のコアメダルと大量のセルメダル。すると、コアメダルが浮かび上がり、コアメダルにセルメダルが集まっていく。メダルの塊は一つの形を形成し、サイの角にゾウの牙と鼻のある顔の怪人が復活した。

コアメダルが足りないため首から下が不完全状態だが、重量系グリード・ガメルの本当の姿である。

「完了だ。さて……………」

オースは1枚だけ落ちていたメダルを拾う。

緑色のコアメダルには、飛蝗の絵が書かれていた。

「ダブった。いない」

『名無テメエ……………って、ウヴァのメダルか』

ライオディアスで倒れてたアंकがわなわなと震えながら立ち上

がる（浮き上がる）と、そこにオーズが投げたバツタ・コアメダルが飛んできたためキャッチする。

「次いつてみよー」

「『って、何やろうとしてんだテメエエエエエエエツ！？』」

トラクローを展開し、目を回して倒れているガメルにギリギリ近づくラトラーターオーズにツッコむアंकとカザリ。

オーズは動けぬガメルからコアメダルを盗るつもりらしい。

「コアメダルが4枚という事は、最低でも二種類は手……………」
「……………」

「名無っ！？」

『おいどうしたっ！？』

「名無っ！」

すると、オーズは変身が解け、そのまま前のめりに倒れた。

カザリやアंक、霊夢達は慌てて駆け寄った。

「ふうん。それで名無はどうなったんだ？」

『体には特に異常はないってさ。ただ、セルメダルを大量に消費したみたい』

その日の夜。霧雨魔法店でカザリが、今日の事を魔理沙に話していた。

グリードにとり憑かれている間は、その体の持ち主の意識がなくなるので、魔理沙は今日何が起きたか知らないのだ。

『今は神社で横になってるよ。セルメダルは増えてるから、明日に

は動けると思うよ?。」

その後、倒れた名無を『迷いの竹林』の奥深くにある屋敷『永遠亭』に連れていき、診てもらったが体には特に異常はなく、代わりに名無の体を構成するセルメダルが大量に消費されていた。

原因は考えるまでもなく、コンボだ。

体に相当な負担を掛けるコンボ。擬似とは言えグリードである名無の場合、コンボの代償はセルメダルの消費らしい。

名無の今の欲望は『コアメダルを集める事』。グリードよりヤミに近い名無は、欲望が叶っているのでセルメダルは増えており、明日には回復する見込みだ。

「そついやフランと、ガメルだっけか? そつちはどうしたんだ?」

『ガメルは紅魔館に住む事になったよ。フランとかなり仲良くなつてたし』

重量系グリード・ガメルは紅魔館に住む事になった。理由は、フランドールが駄々をこねたからだ。

一度、ガメルがフランドールを器に復活出来たのはフランドール

と波長が合ったからだ。

それに、ガメルとフランドールはよく似ている。紅魔館の近くにガメルのコアメダルが4枚もあったのも、波長が似ているフランドールを求めてかも知れない。

そのためか、互いに面識はない筈の二人はすぐに仲良くなり意気投合している。

「そうか。フランドルの奴、中々友達出来なかったからなあ……………」
「……………」

『そうなの？ 能力関係で？』

「それもあるが……………レミリアがな、『妹を汚させないっ！』とか言っつてな。そのために外に出さないよう監禁してたし……………」

『うわぁ……………』

——そんな事やってたのかあの吸血鬼。

と、カザリは思った。

無論、紅魔館の面々もさすがに止めようとしたが、相手は紅魔館の主。強く言えなかった。

「で、あんまりだから、レミリアが異変起こした時に霊夢と一緒にボコったわけだよ。それ以来フラン、今は普通に歩いてだが未だにレミリアが過保護でな」

『あれ、過保護なの？』

「過保護なんだよ。そういう事にしていちゃれ」

レミリア・スカーレット。少々妹からウザがられている、過保護なシスコンである。

「——これでいいかしら？」

「ええ、ありがとう。これで5枚目ね」

「ごめんなさいね、本当は全部見つけてあげたいけど、今は春……私は、あまり動けないから」

「いいわよ、貴女は5枚も集めてくれたわそれに——“姿”も貸してくれたものだもの、寧ろお礼を言いたいわ」

「そう言ってくれると助かるわ、メズール」

C o u n t 6 に 続 く

オーズが新たに手に入れたメダル

ライオン・コア×1

(バッタ・コアはアंकが預かり)

Count5『純粹と暴走と黄色のコンボ』（後書き）

純粹↓ガメルとフラン

暴走↓別のコアメダルを取り込んだから

黄色のコンボ↓ラトラーターコンボ

な今回のお話。

今回、ラトラーターコンボを出しました！ 正直早かったかなとも
思いましたが、後悔はありません。

ガメルがちよつと暴走。

ガメル自身のコアメダルが4枚だけだったので、他のコアメダルが
2枚入ったので暴走しました。もっと自分のメダルがあれば、暴走
はしなかったかも知れません。

コンボの代償ですが、名無は擬似グリードなのでセルメダルの大量
消費にしました。只今回復中。

最後に皆のお姉さんが登場っ！ ADVENTしたあのキャラの所
にいます。誰かなー？

逆鬼の方がコラボに入りますので、暫く東方欲望録の更新を休みま
す。

ではまた。

Count 6 『偶然と虎バイクと水棲お姉さん』（前書き）

東方欲望録、前回までの三つの出来事。

一つ、パーフェクトメイド・咲夜に呼ばれ名無達は紅魔館に向かう。

二つ、紅魔館ではフランドール・スカーレットに取り憑いた重量系グリード・ガメルが暴れていた。

三つ、オーズはラトラーターコンボを発動した。

Count The Medal

オーズとグリードが持つメダルの数はいくつ？

オーズ

- ・タカ × 1
- ・バッタ × 1
- ・ライオン × 1
- ・トラ × 1
- ・チーター × 1
- ・ウナギ × 1

アंक

- ・タカ × 1

（バッタ・コア預かり）

カザリ
・ライオン×1
・トラ×1
ガメル
・サイ×2
・ゾウ×2

C o u n t 6 『偶然と虎バイクと水棲お姉さん』

紅魔館。

前回、フラン（ガメル）が暴れて黄色のコンボの余波で主が灰になりかけた場所である。

紅魔館の正面の門に、一人の女性がゆっくりまったりと、門の端に寄りかかっていた。

下から、モスグリーンの足首までのブーツに同色の半ズボン。腰の部分から同じ色のコートを付けている。

モスグリーンと白の半袖にヘソ出しルック。赤毛のロングストリートの上に、モスグリーンの帽子を乗せている。

メイリン・ロックハート。

本名は『紅 美鈴』と言うのだが、周りからは何故か本名で呼ばれずロックハートで通っている（名前の読みが一緒なのであまり気にしていない）。

「いい天気だな」

彼女はのんびり空を眺める。

そろそろ魔理沙が来る頃かな？ 等と思っていると、後ろの方——紅魔館の正面玄関から、乱暴に扉を開ける音と元気な声が聞こえた。

メイリンは、くすりと笑いのんびり——だが遅くわない動きで門を開ける。

「「メイリン、行って来ま——す」」

「はい、行ってらっしゃい」

悪魔の妹・フランドール・スカーレットと、フランを肩車した、数日前から紅魔館に住んでいる重量系グリードのガメルが、メイリンに元気に挨拶しながら走って行った。

メイリンも笑顔で二人を見送る。

日が高く、吸血鬼であるフランにはキツイ天気だが、日傘を持っていたので大丈夫だろう。

「今日も二人は元気ね」

「そうね。それは喜ばしい事だわ」

と、メイリンの隣にいつの間にかメイド長の咲夜が居た。

「あ、咲夜さん。今日はレミリアお嬢様は？」

「今日は天井に突き刺さったわ」

メイリンはそれを聞くと、再び空を見る。

咲夜も空を見る。

魔法の森の方角から何か黒白の物体が飛来し、二階の窓ガラスを破り館の中に侵入した。

メイリンはずっと眺めていた。

「……………止めなさいよ、門番」

「門番は門を守るのが仕事ですから。 ” 門以外 ” からは門番の仕事

「じゃありませんよ」

「はあ………。私はお嬢様を慰めるから、貴女はパチュリー様に紅茶を淹れて。」

「私より貴女が淹れた方が美味しいから」

「はい」

二人の女性は館に向かって歩き出す。

年齢はともなく、精神的に大人な二人は今日も平和だった。

紅魔館の二階の窓から侵入した黒白——魔理沙は、周囲に誰も居ないのを確認すると素早く動く。

今の魔理沙の格好は、昨日までの魔法使いの格好とは大きく変わっていた。

靴は動きやすいブーツに、スカートの代わりに太股が見える黒のショートホットパンツ。後ろからフリルの付いた白い布を巻き付けている。

上はヘソ丸出しのノースリーブの黒のトップスに、その上から袖のないトップスと同じ大きさのグレーのパーカー。

特徴の一つだった白い大きなリボンが付いたトンガリ帽子も、ひと回り小さい物に変わっていた。

彼女――霧雨魔理沙は、カザリと出会い、スタイルを変えた。

魔理沙は、否、マリサ・キリサメは普通の魔法使いから、”魔法忍者”へとジョブチェンジしたのだ。

「……………うん。前の格好よりは動きやすいかな」

と言っても、今の体の主導権はカザリだが。

とある電車の王を尊重し、今の彼（彼女）をKマリサと公称しよう。

Kマリサは持ち前の素早さを活かし、紅魔館の廊下を進んで行く。

目的地は館の地下、大図書館。

目的は大図書館にある魔導書を”借りる”事だ。

「おっ・・・・・・・・」

廊下の角から様子を見ると、数人の妖精メイドがマリサの搜索をしていたが、見つからない事に怪訝な表情を浮かべていた。

マリサは派手好きなので、移動する時は必ず爆発が起きる。今まではそうだった。

だが、今のマリサは魔法忍者。更にカザリが体を使う事で、隠密性が上がっているのだ。

ある時は、妖精メイドの視線が別の方向を向いた時に後ろを通り過ぎ。

またある時は、天井に張り付いてやり過ごし。

またある時は、妖精メイドの背後に回り意識を刈り取り空いてる部屋などに隠し、監視の目を減らすなど。

だがこれはカザリが主導権を持っている場合であり、マリサの場

合だと、『NARUTO』などの派手な忍術を使うタイプだろう。

Kマリサは大図書館の扉まで誰にも見つからずに到着すると、関門開きの大きな扉を開き中に入る。

大図書館と言っただけあって、中には見上げる程高い本棚が大量にあり、本がギッシリと隙間なく詰められていた。

”マリサ”は堂々と、一つの本棚の前に来ると帽子の中から大きな袋を取り出し本棚の本――魔導書を手当たり次第に放り込んでいく。

すると、何処からか魔力弾が飛来しマリサは跳んで避けた。

「危ないなパチュリー。本に当たったらどうするんだ？」

「心配ないわ。図書館の物には全部、傷つかない魔法を掛けてあるから」

マリサの視線の先には、大図書館の主・パチュリー・ノーレッジが空中に浮いていた。

「静かだったから気付くのに遅れたけど、魔理沙。本格的に魔法使いから盗賊にジョブチェンジしたのかしら」

「確かにジョブチェンジしたが、盗賊じゃなくて魔法忍者だぜ。
あと私はマリサ・キリサメだ」

パチュリーはマリサの格好を訝しく見てそう言うが、マリサは即座に否定する。ついでに、名前を微妙に改名した事を伝える。

確かにマリサの格好は、忍者と言うよりは女盗賊と言った方が近いかも知れない。

それとパチュリーの視線がマリサの腹や太股に視線が移ったりしたが、まあいいだろう。

パチュリーは自分の周囲に弾幕を展開する。

マリサは縮小魔法で小さくしていた箒を元の大きさに戻してサーフボードのように乗る。そして、新たな姿のミニ八卦炉——手の平から大きく変わり、巨大化・変形して十字手裏剣となったそれを右手に持ち、左手には投げナイフを指に挟んで持つ。

付き合いの長い彼女達には、この流れはいつもの事。

マリサは魔導書を”借りる”ため。

パチュリーは魔導書を守るため。

またいつものように、弾幕ごっこをするのだ。

『これとこれと．．．．．あとこれもかな？』

向こうで弾幕が飛び交う中、死角で見えない本棚で黒い獣のような右腕——カザリが、本棚の魔導書を適当に袋に放り込んでいた。

カザリは大図書館に入った時、マリサから離脱。マリサがパチュリィを引き付けている間、カザリが魔導書を”借りる”手筈にしていたのだ。

『これくらいかな？』

「あっ！」

最初にマリサが入れてたのを含め、取りすぎない程度に魔導書を入れると、誰かに見つかった。

赤毛のストレートヘアに頭と腰に一对の悪魔の羽根。黒のベストにロングスカートの少女。

パチユリーの助手の小悪魔だ。

魔導書の物色に集中していたため、小悪魔の気配に気づかなかつたようだ。

『見つかったっ！』

「ああっ！ 待ってくださいー！ パチユリー様ー！！」

カザリは本が入った袋を持って逃げようとする。

小悪魔は慌ててパチユリーを呼ぶと、幸い聞こえたようで、パチユリーはマリサの弾幕を避けながら袋を持って逃走しようとしている。
カザリ
右腕を発見。

マリサが「やばっ」と呟き十字手裏剣八卦炉を投げようとするが、先にパチユリーが動いた。

「火&土符『ラーヴァクロムレク』」

パチュリーは、マリサとカザリ両方を前方に居る場所に移動すると、スペルカードを発動した。

火属性と土属性の弾幕が二人を襲う。

「おっ、よつと」

『あ』

——ピチューン！——

マリサは慣れたもので、弾幕の間を通ってかわしていくが、弾幕に慣れておらず更に分厚い本がいくつも入った袋を持ったカザリは、最初こそ何とか避けていたが、本来の小回りが利いた動きが出来ず、弾幕の餌食となった。

袋を落とし、セルメダルを撒き散らしながら落下するカザリ。

丁度スペルカードの使用制限時間が終了し、マリサは急降下して

床に落ちる前に、カザリを回収した。

「カザリ、大丈夫か？」

『何とかって言いたいけど、無理……………』

「仕方ねえ。今日は諦めるか……………」

「……………待ちなさいマリサ。貸してあげるわ」

本を盗る（借りる）のを諦めカザリを抱えて飛び去ろうとしていたマリサは、降りてきていたパチュリーの予想外の言葉に驚き、疑いの目を向けた。

いつもなら『今まで持つて行った物全部返しなさいっ！』と言ってくるのだから、疑いたくなるのは当たり前だ。

「マ、マジかつ!？」

「た・だ・し、条件付きで貸すのは4冊まで。一週間で返して貰うわ。」

で、条件って言うのは、貴女が今脇に抱えてる腕。グリードを少し貸してくれば、本を貸してあげるわ」

「貸すぜっ!!」

即効だった。

脇に抱えていたカザリをパチュリーに渡し、言われた通り好きな本4冊を袋から取り出し縮小魔法で小さくして帽子の中に入れるマリサ。

カザリが叫ぶが、全く聞いちゃいない。

「それじゃ、借りてくぜ」

「明日には返すから」

「分かったZE」

パチュリーと短い挨拶をして、マリサは箒をリフボードのように乗って最高速度で図書館を出ていく。

あの速度だと、妖精メイドか妹にぞんざいに扱われ泣いているだろう紅魔館の主あたりを轢きそうだが、そんな事はどうでもいい。

せっかく気になっていた研究対象が手に入ったのだ。^{グリード}こっちを優先するのが当然だろう。

「こあ」

「はいつ！ パチュリー様っ！！」

カザリを小悪魔にパスし、パチュリーと小悪魔は早速移動する。

小悪魔の腕の中でカザリはもがくが、ヒッキーで喘息持ちの魔法使いより、その魔法使いの世話を毎日していて小悪魔だが魔族の彼女の方が力が強く脱出出来ない。

そもそも、人間の子どもにツチノコと言われ負ける状態なのだ。勝てるはずがない。

連れて行かれたのは、大図書館の奥にある所謂”実験室”・・・

カザリは台の上に固定され、完全に動きを封じられる。『ジャングルの王者ターちゃん』で見た事あるシーンだ。

そしてパチュリーは正面に立つ。右手にメスを持って。

「ガメルはガードが硬くて無理だったけど、漸く手に入ったわ。最初は解剖ね」

『いきなりっ!?!』

「大丈夫、出した物は戻すから安心して」

『何一つ安心出来ないっ!?!』

とりあえず、人間でいう手首にメスを入れる。すると、血、ではなく大量のセルメダルが噴き出す。

パチュリーは正面に立っていたためモロにセルメダルを顔に被ってしまう。

額に硬貨の投入口が現れ、1枚のセルメダルが入った。

博麗神社・境内。

縁側に霊夢が腰掛け、その隣にアंकが浮いている。

二人の視線の先には、庭で霊夢と同じ巫女服に身を包んだ名無が、瞳を閉じ、両腕を僅かに広げ、佇んでいた。

これは名無が自身の能力、『全てのモノ事を検索する程度の能力』を使用する際の癖のような物だ。

暫くして、名無は独特のポーズを解き、満足した表情で霊夢とアंकの方を向いた。

「メダルのコンボにおける全ての項目を閲覧した」

「で、どうだったの？」

「確かにコンボは強力だが、強力故に使用者に相当の負担が掛かる。負担は倒れる程、下手をしたら死ぬ可能性もある程。しかし、僕の場合は擬似グリードであるが故か、その負担を軽減・無くすために体内のセルメダルを消費した………と言う事のようにだ」

名無が検索していたのは、同属性のメダルによるコンボに関する項目。

コンボに関する項目は一度見たが、改めて見ると新しい内容が更

新されていた。

『しかし、コアメダルの情報が全く入ってこないな』

アंकがうんざりしたように言う。

文々。新聞にメダルの記事が載ってから、早一週間。アंकの言う通りメダルの情報は、紅魔館の後は一件もない。

拾った人物が新聞を見ていない・新聞を取っていないか、知能のない動物・妖怪に拾われたか。

はたまた新聞に載せた事が逆効果になったか。可能性は考えれば幾つもある。

『名無。お前の能力でメダルの在り処は分らないのか？』

「一度試したが、キーワードが不確定で絞り切れない」

名無は肩をすくませ答える。

幾らモノ事を検索し、全てを知る事の出来る名無でも、情報を絞

のためのキーワードが少なくて情報は多すぎて全てを閲覧するのに時間が掛かるし、何よりメダルのような小さい物は、簡単に持ち主が変わるため決定的に欠けるのだ。

(このままじゃ全てのコンボを揃えるのは何時になるか……)

不確定でも、検索で出た場所に行くべきか。

そう考えていた時だ。

☐ お助けええええええええええええええええつ！！ ☐

シャウト共に、何者かが突っ込んで来た。

何事かと見れば、突っ込んで来たのは喘息持ち魔法使いの補佐役の小悪魔。なのだが、格好はいつものベストとロングスカートだが、赤い髪はグレーに変わり右腕は鋭利な爪が生えた黒い獣のような……小悪魔に力ザリが憑依したようだ。

K小悪魔は、ボロボロの状態で肩を上下させ息をし目尻に涙を溜めていた。

「アंक名無霊夢ヘルプミー！ バラされるううううううう
！！」

「む、この反応はカザリか」

『何があつたカザリイイイイイイイイイイツ！？』

「騒がしいわね………」

泣きついて来るK小悪魔に、各々は思った事を口にする。

その直後、再び何者かが突っ込んで来た。

「来たあああああああああつ！！」

K小悪魔が悲鳴を上げる。

そこに居たのは、パチユリー・ノーレッジ……だが、目は血走つたように鋭く、右腕はカザリが憑依した訳ではないのに獣のような毛で覆われ、鋭い爪が生えている。

極めつけは、首に包帯のような物が巻かれていた。

霊夢はパチュリーの変貌に目を丸くし、名無は『へえ』と漏らす。

似たような光景を見た事のあるアंकは、K小悪魔に視線を向けて聞く。

『カザリ、お前ヤミー造ったのか？』

「違うのっ！ 手首切られて、セルメダルがドバツて出て、それが偶然入っちゃったのっ！！」

『どんな状況だっ！！』

アंकがツツコミを入れるが、その間にもパチュリーは襲い掛かって来る。

全員がその場から飛び退いて避けるが、鋭利な爪が縁側に傷を付けた。

「キヤアアアアアアアッ！ 神社があああああああつ！！」

「霊夢、行くよ」

悲鳴を上げる霊夢の腕を掴み名無は移動する。その後を、アंकとK小悪魔も続く。

——此処では狭い。広い所に移動しなくては……………。

名無は体内からオーズドライバーを取り出し装着。続けてタカ・トラ・バッタのコアメダルをオーズドライバーに入れ、博麗神社で広い場所……………。寶錢箱のある、神社の正面に来てオースキヤナーで読み込んだ。

《タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ！　タトバ！　タ・ト・バ！》

「はっ！」

「ううう……………研究……………実験……………あああああああつ！！」

オーズ・タトバコンボに変身した所で、パチュリーも追って来て所で何かを呟き大量のセルメダルに包まれた。

そして現れたのは、豹がモチーフのヒョウヤミー。パチュリーは、そのままヤミーの体内に取り込まれた。

「なるほど。これがカザリの寄生型ヤミーか。……………興味深い」

「そんな事言ってる場合かつ！！
と言うか、パチュリーが……………どうなってるのよっ！？」

『カザリのヤミーは寄生型。親になる奴の中で親の欲望を暴走させて育つ。』

セルメダルがある程度貯まったら、ああやって親を取り込んで外に出てくるんだ。

しかし、一体何の欲望だ？』

「あ……………うん……………」

ヤミーは親の欲望を暴走させて行動するため、親の欲望によって動きが予想出来る事があるのだが、K小悪魔は言い難そうに視線を泳がせている。

そして口を開いた。

「その、どうやら僕達グリードを研究・実験したいって思ってたらしくて、そんな時にセルメダルが入っちゃったから……………」

「『……………』」

グリード陣、戦慄。

「ヴォウツ!!」

「はっ!!」

「お願い勝ってっ!!」

『絶対負けるなよっ!!』

ヒョウヤミーの攻撃を弾き、反撃するオーズTC。

グリード達にとっては負けれない戦いである。

ヒョウヤミーの鋭い爪をかわし、裏拳、掌底突き、回し蹴り。更にトラクローを展開。右のクローで切り、左のクローで切り、両腕のクローを突き出す。

の連撃をまともに喰らったヒョウヤミーは、火花とセルメダルを散らし、後ろに吹き飛ぶ。

オーズTCは、ドライバーを水平に戻すとトラ・コアとバツタ・コアを抜き、代わりにウナギ・コアとチーター・コアを入れ再びド

ライバーを傾けてスキャナーで読み込ませる。

《タカ！ ウナギ！ チーター！》

「はっ、はあっ！」

「ヴオウッ！？ ヴオッ！？」

「まずはパチュリー・ノーレッジをヤミーの中から出そう」

タカウーターにメダルチェンジし、ウナギウィップで更に体力を削る。

そして、ウナギウィップでヒョウヤミーを拘束。接近し、チーターレッグによる連続蹴りでヤミーを構成するセルメダルを削っていく。

どんどん削られるセルメダル。そうして、連続蹴りに耐えきれなくなり、ヒョウヤミーの中からパチュリーが吐き出された。

「むきゅ・・・！？」

「さて、後は倒すだけだ」

「ヴオウウ………ヴオウツ!!」

顔から地面に落ち小さな悲鳴を上げるパチュリーを無視し、オース TUT はトドメを刺そうとメダジャリバーを取り出す。するとヒョウヤミーは、身の危険を感じたのか石段を下り逃走。

「ふむ。敵わないと判断しての撤退か。知性ではなく、本能で感じたか」

「何納得してんのよっ！ さっさと追いなさいっ!!」

「分かっている。博麗に居候する者として、狙った獲物は必ずズドンする」

「喧嘩売ってんのか」

博麗の巫女ズドン巫女説。

オース TUT はチーターレッグのスピードでヒョウヤミーを追う——事はせず、何故か神社の脇に置いている自販機型の待機状態のライドベンダーに近づき、セルメダルを1枚投入。ボタンを押して一つのカンドロイドを取り出した。

虎の絵が描かれたカンドロイドだ。

そして新たにセルメダルを投入し、ライドベンダーをバイクモードにする。

「せっかくの機会だ。”コレ”を試そう」

コレ、とは手に持つカンドロイドの事。

プルタブを開き、起動させると絵の通り虎型の、トラカンドロイドに変形する。

《——！》

トラカンドロイドはひと鳴きすると、オーズTUTの手から跳んでライドベンダーのフロント部分に着地。するとライドベンダーが反応する。

トラカンドロイドが缶形態に変形し転がり落ちると、ライドベンダーのフロントが左右にスライドし前輪部も左右に開き後輪部に接続される。

缶形態のトラカンドロイドは地面につくとドラム缶サイズまで巨

大化し、ライドベンダーに合体。前輪の代わりに、フロントの新たなパーツになる。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！』

全ての工程を終え、産声を上げる虎。

ライドベンダーが拡張強化カンドロイド・トラカンドロイドと合体した強化形態、『トライドベンダー』である。

『ガアアアッ！ ガアアアアアッ！！』

「きゃっ！？」

「うおっ！？」

トライドベンダーは暴れる本物の獣のように動き回り、ヤミーの匂い感じたのか、それともヤミーを追撃するようプログラムされているのか、ヒョウヤミーを追って石段を飛び降りた。

オーズTUTは、顎に手を当て『ふむ・・・』と呟く。

「やはりラトラーターコンボじゃないと制御が出来ないようだ」

「って、追いなさいよっ！」

「それもそうか。霊夢、パチュリー・ノーレッジを頼む。アंक、カザリ、追おう」

『ああ』

「分かった」

霊夢に叱咤され、オーズTUTはアंकと、小悪魔の体から抜けたカザリを連れヒョウヤミー、を追ったトライドベンダーを追った。

S i d e : ? ? ? ?

長いわねえ。この石段。

暫く飛んでいるけど、アंकやウヴァ、ウルみたいに”飛ぶ”と言う行為自体に慣れてないから、どうしても遅くて、フラフラした飛び方になってしまう。

あと、飛ぶって意外に疲れるのね。この姿・・・レティに擬態（少しアレンジした）して飛べるようになったけど、飛ぶ事を平然と出来るあの三人を尊敬する。

あ、ウヴァは”飛ぶ”より”跳ぶ”方が得意だし速いのか。虫だし。

「大丈夫ですか？ 疲れたのなら休みましょうか？」

「大丈夫よ。ありがとう」

実は飛んでいるのは私一人じゃない。

私の隣に、私の飛ぶ速さに合わせて飛んでいる女の子。

金髪に黒髪が混じった縞柄のショートカットの珍しい髪の、『寅丸星』。

私と同じで、この先の神社に用があるそうで、一緒に向かっている。

今みたいに、飛ぶ事に慣れてない私を気遣ってくれる。良い子だね。

・・・最初に見た時に、髪や名前でカザリを思い出したのは内緒。

「ヴォウツ!!」

「ん？」

「あら」

石段の上の方・・・・・・・・つまり私と星が向かっている所から、何が降りて来た。

カザリのヤミーね。

ヤミーは私達を無視して、そのまま石段を降りて行った。

何かから逃げてる？

『ガアアアアアアッ！！』

「また？」

「何かしら？」

次に、虎みたいな黒い物体が暴れながら石段を降りて・・・ヤミ
ーを追ってるのかしら？

巻き込まれないよう飛ぶ高さを上げましょうか。

虎みたいな黒い物体が通り過ぎた後、今度は赤・青・黄色の上下
三色の変なのが通り過ぎた・・・。。

けど、あら？ 私のコアメダルの気配が・・・。。

「今のは何だったんでしょうか・・・。。って、メズールさん？」

星が気づいた時には、私は先程の一団を追って下に飛んでいた。

どうやら私の目的は、神社から移動したらしい。

『ガアアアツ！ ガアアアアアアアツ！！』

「漸く追い付いた！」

神社から走り続けたオーズTUTは、トライドベンダーと並走する。

ヒョウヤミーにも、もう少しで追い付く距離だ。

『おいっ！ この後どうすんだっ！！』

「じじするっ……」

両肩にアंकとカザリを掴ませたまま、オーズTUTはトライドベンダーに飛び乗る。

何とかハンドルを掴むが、トライドベンダーはオーズTUTを振り落とそうと暴れ馬の如く動き回り、跳び跳ねる。

最早バイクの動きではない。

『ちよっ、マジこれっ!?!』

『早く何とかしろおおおおおおつ!!!』

腕だけでしがみつくのがやっとな鳥と猫グリードが叫ぶ中、オーズドライバーのタカとウナギのコアメダルを、ライオンとトラに変えオースキャナーで読み込んだ。

《ライオン! トラ! チーター! ラタラタ〜♪ ラトラ〜タ〜♪》

ラトラーターコンボに変身する。すると、今まで暴れていたのが嘘のようにトライドベンダーが大人しくなった。

オーズRCは、ハンドルから伝わる感触を確かめる。

「・・・・・・・・よし」

『ガアアアアアアアッ！！』

アクセルを全開に、トライドベンダーが咆哮を上げ発進。直ぐにヒョウヤミーに追い付く。

「ヴオウツ！？」

『ガアアアッ！！』

「はあっ！！！」

ヒョウヤミーの横につき、体当たりを喰らわせる。

重量差に負け、簡単に吹っ飛ぶヒョウヤミー。

オーズRCはメダジャリバーを取り出しセルメダルを3枚連続投入。メダジャリバーの側面にオースキャナーを滑らせる。

《トリプル！ スキャニングチャージ！》

「はあああああつ！！」

【オーズバツシュ】が炸裂し、ヒョウヤミーをセルメダルに変換した。

オーズRCはバツクルを水平に戻し変身を解いた。同時に、トライドベンドーからトラカンドロイドが外れライドベンドーに戻る。

「ふう。ん？ アンクとカザリは……………」

『おいっ！』

『振り落とされた……………』

そこへアンクとカザリが飛んで来る。

コンボを発動した時に振り落としてしまったようだ。

名無は謝罪し、ヤミーを変換したセルメダルをアンク達と回収し

ようとした、その時だ。

「やっぱり、アंकとカザリね」

『あ?』

声を掛けられた。

声に反応し三人が声の方向を見ると、一人の少女が空から降りてきていた。

白い変わった帽子に青と白の服とスカート。首には白いマフラーを巻いた10歳程の少女。

アंकとカザリは怪訝な表情（顔は無いが）を浮かべるが、気づき親しげに話し掛けた。

『はっ、お前か』

『随分変わった姿になったね。”メズール”』

「それ、貴方達には言われたくないわ。でも久しぶりね、アंक、カザリ。

それと初めまして、坊や。でいいのかしら?」

名無が”知識として知っている”人物によく似ている少女は、地面に足をつけると同時にメダルに包まれ、姿を変えた。

頭部はシャチ・足はタコの印象がある水棲系グリード・メズールがそこに居た。

「まあ二人共……随分と惨めな姿になったわね」

『惨めって言うなっ！ ウルのせいだウルのっ！！』

その後、セルメダルを全て回収した名無達は、再び少女——『レ

ティ・ホワイトロック』を少女にした姿になったメズールを加え、博麗神社に戻っていた。

パチュリーは、小悪魔が担いで紅魔館に戻っているため居ない。

話を聞くと、メズールはレティの元で復活し、彼女に協力してもらいコアメダルを集めていたそうだ。それで漸く動き回れる程——妖精や妖怪に負けない程——コアメダルが集まったので、新聞の記事を見て神社に来たと言う訳だ。

「で、そっちの話は分かったけど、あんたは何で居るのかしら」

霊夢がそう言って視線を向ける先には、星が座っていた。

星が住む『命蓮寺』^{みよつれんじ}は人里にあり、元々が宝船だったため縁起が良い・近いと言う事で、人々がそちらに流れてしまい霊夢にとっては商売敵なのだ。

言って置くと、博麗神社に参拝者が来ないのは命蓮寺のせいではない。

「私は新聞を見て拾った物を届けに来たんです」

と、生真面目が売りの星は袖の中から1枚のメダルを取り出す。

虎の絵が描かれた、黄色のコアメダルだ。

当然、本来の持ち主であるカザリはシャウトする。

『僕のコアアアアアアアッ!!』

「猫系統のコアメダルはいいや」

『これでコア3枚だから腕だけ生活からはお去らばだっ!!』

「あらそうなの？　じゃあセルメダルはさっきのヤミーのを使いましょう」

3枚あるためカザリのコアメダルには興味がない名無はさて置き、ヒョウヤミーから変換したセルメダルを一ヶ所に集める。

何をするのかと星が首を傾げていると、メズールが彼女の持っていたトラ・コアメダルを取った。

「ちよつとごめんね。カザリ」

メズールはトラ・コアメダルを投げカザリはキャッチする。すると一ヶ所に集めていたセルメダルが動き出しカザリを包む。そして一体の異形を形取った。

猫科の動物のような顔に鋭い爪が生えた腕。胴体と脚は不完全状態ながらも、猫系グリード・カザリの復活だ。

メズールの正体がグリードと知らず、初めてグリードを見た星は目を丸くする。

星を初めとした命蓮寺のメンバーは鍊矢と面識がないので、グリードを見るのはこれが初めてなのだ。

「ふう。漸く体が戻った。これで妖精に遊ばれずに済むよ・・・」

「貴方達も苦労してるのね」

『まったくだ。ウルの子・・・！』

「まあウルの子だから、

お酒に酔った勢いで私達を封印して酔いが覚めて封印を解こうとしたけど酔った勢いで封印だったから術式が無茶苦茶で解けなくて寂しくなっただけこの国を滅ぼして・・・
なんてしてそうよね」

まるで実際に見たような言い方のメズール。

寂しいから国を滅ぼすって・・・鍊^{ウル}矢だとやりそうである。

星はまさか、と思うが、名無と靈夢は苦笑、アंकとカザリに至ってはうんうんと頷くのであった。

C o u n t 7 に 続 く

Count 6 『偶然と虎バイクと水棲お姉さん』（後書き）

偶然↓偶然ヤミー誕生

虎バイク↓トライドベンドー

水棲お姉さん↓皆大好きメズールお姉さん

な今回のお話。最後がグダグダだしアंकが不幸じゃねえ…！

メイリンが咲夜と普通に会話してましたが、アレはADVENTメイリンだからです。原作美鈴よりカリスマが有ります。そしてADVENTマリサも出しちゃった（てへっ

星の喋り方ってアレでいいんですかね？ と不安があったり。

グリードの復活具合ですが少し変更し、

コアメダル1枚↓腕だけ復活

コアメダル2枚↓ヤミーが造れる。

コアメダル3枚↓体復活。

コアメダル5枚↓体の一部（鎧？）が復活。（カザリ・ウヴァなら上半身。メズール・ガメルなら下半身）

コアメダル9枚↓完全復活。

にしました。

まあ完全復活の出番は”ほぼ”無いかと思いますが。

言っときますがロストは出ません。タマシーコンボも無理かと…。

さーて、次回の東方欲望録は？

カザリ「カザリです。今回やっと体が復活しました。
ルンルン気分でスキップしながら霧雨魔法店に帰ったら、マリサに
妖怪と間違われてマスタースパークを喰らいました。でもめげませ
ん！

次回は、ガメルとフランの視点のお話。

ジャンケンポン！」↑チヨキ

Count 7 『地底と友達と意外な弱点』（前書き）

東方欲望録、前回までの三つの出来事！

一つ！ マリサと紅魔館の大図書館に侵入したカザリは、パチュリーに捕まってしまうやミーを造ってしまう。

二つ！ パチュリーを親としたヒョウヤミーを、トライドベンダーを操るオーズ・ラトラーターコンボが撃破。

そして三つ！ 水棲系グリッド・メズールが合流しカザリの体が復活した。

Count The Medals.

オーズとグリッドが持つメダル数は？

オーズ

- ・タカ×1
- ・ライオン×1
- ・トラ×1
- ・チーター×1
- ・バッタ×1
- ・ウナギ×1

アंक

- ・タカ×1
- ・バッタ×1

カザリ

・ライオン×1

・トラ×2

ガメル

・サイ×2

・ゾウ×2

メズール

・シャチ×2

・ウナギ×1

・タコ×2

Count7『地底と友達と意外な弱点』

朝。紅魔館・地下室フランドールの部屋。

「フランドール様、朝です。起きてください」

「……ふみゆ……？ ふあゝあ……」

呼ばれ眠りから覚めるとそこには咲夜が居た。

咲夜は目を覚ました少女——フランドールが起きやすいよう、布団を丁寧に畳んで退かした。

「みゆ……さくやあ、おはよう……」

「はい、おはようございます。フランドール様」

咲夜はまだ眠い目を擦るフランドールに笑顔で返し、今度は同じ部屋にあるもう一つのベッドに視線を移した。

そちらのベッドには布団ではなく、グレーの布が一枚敷かれているだけ。

そのベッドの上にはサイと象の印象の顔の、体が不完全状態の怪人——重量系グリード・ガメルが大の字になって寝ていた。

咲夜はガメルも起こす。

「う……ん……。さくやあ、おはよう……」

「ガメル、おはよう」

「ガメルう、おはよう……」

「フランう……おはよう……」

ガメルとフランは互いに目を擦りながら朝の挨拶をする。

ガメルとフランは仲が良い。

寝る時も、起きる時も、ご飯を食べる時も遊ぶ時も一緒だ。

これは、そんな仲の良いグリードと吸血鬼の1日である。

「「行つてきまーす」」

朝食を食べ終えたガメルとフランは、遊びに行くため玄関に向かう。

日傘を持ち、ガメルはフランを肩に乗せ自身の重力操作で僅かに体を浮かせ、ホバー移動していた。ド？の如く。

封印される前、ウルに教えて貰った移動方だ。

「待ちなさい！ 外に出たければ私を――」

「どーん！」

「うー！？」

「えい！」

前方におぜう様が現れるが、ガメルは構わずアップー。更にフランが追撃の弾幕を発射。

紅魔館に、天井に突き刺さったボロボロの吸血鬼の汚いオブジェが出来上がった。

『邪魔な奴はとりあえずブツ飛ばせ』…と、ウル／鋌矢（悪魔）の教えを素直に実行したガメルとフラン。

二人はレミリアなど最初から見てないように扱い、加速した勢いのまま玄関の扉を開け外へ。門に進む。

すると、二人行き着く前に門が開いた。

「メイリン、行って来ま〜〜す」

「はい、行ってらっしゃい」

門開けた門番——メイリン・ロックハートにそう言い、ガメルとフランはスピードを落とす事なく駆け抜ける。

「フラン、どこいく？」

「そうだなー」

ガメルの問い掛けに、フランは頭を捻る。

今日はどこに遊びに行こうか…。

昨日はアंकとカザリで遊んだ…。

直ぐにバラバラになったからあんまり面白くなかったね…。

普段二人がアंकとカザリで何をしてるか一目瞭然な会話をして
いると、二人の進行方向に人影が見えた。

二人のよく知る人物だ。

「あつ！ チルノだ！」

「ほんとだ〜」

「ん？」

向こうも仲良し二人の声に気づいたようで振り返る。

水色のワンピースに、左肩には某カエル侵略宇宙人の飾りを付けた黒い肩当て。そこからアームガードのように、黒い袖が伸びている。そして両手に黒いグローブ。

スカートの左側に黒い布を垂らし、後ろには大きなホルダー。

水色の肩まである髪に、青いリボン。水色の強い意志が宿る瞳の、人間で言う15〜20歳程の少女。

『正義の味方・氷の妖精チルノ』。

「おつ、誰かと思えばフランとガメルじゃん。おはよう」

「「おはよー」「」

チルノは霧の湖の水際にあるログハウスに住んでいる。そのためよくガメルとフランに会う。

更にガメルとフランが遊べる数少ない相手なので、二人は懐いている。

「二人は遊びに行くのか？」

「うん！」

「チルノは？」

「あたいは唯の散歩さ。世の中平和だから、正義の味方の仕事がないくてね」

「平和が一番だけどね」とチルノは笑う。

だが、平和過ぎて刺激不足になっているのも確かである。

「これじゃ最強のあたいの腕がな鈍っちゃうよ。」

……あ、そう言えば天狗の新聞に載ってたけど、博麗の巫女の妹が

オーズって言うのになったんだっけ？　ちょっと闘ってみようかな……」

名無がラトラーターコンボを発動した翌日、その日の文々。新聞にオーズの事が掲載されていた。…一体どこから仕入れたのか。

今から神社に行こうか考えるチルノに、ガメルの肩に乗ったままのフランは思った事を聞いた。

「でもチルノさ。よく”さいきょー”って言うけど、鍊矢に勝てるの？」

「……………ッ」

「れんや〜？」

フランの何気ない言葉に、チルノは硬直。ガメルは意味が分からず首を傾げる。

チルノは鍊矢に勝った事がない。と言うか、一部を除いた殆どが鍊矢に勝てない。あの超鬼畜……。

「…私のシマじゃチートとかバグとかはノーカンなのさ。私はそう言うの除いた最強なの。と言うか、悪魔じゃなくて邪神だって。鍊矢って」

「――誰が邪神だって？」

瞬間、チルノは誰かに頭を掴まれ首から下が地面に埋まった。

埋めたのは勿論、神出鬼没の悪魔…錬矢、グリードの姿のウルであつた。

「確かに、俺のメダルの一つのアモンは、悪魔で元天使で元々はエジプトの神だったりするけど。

あと一部じゃ悪魔王とか、破壊と再生の神とか……」

「あ、錬矢だ」

「ウルだ」

「よっ、フラン。久しぶりだなガメル」

ペチペチとチルノの頭を叩きながら、フランとガメルに軽く挨拶するウル。

再びチルノの頭を掴み地面から引っこ抜き、自分の前に立たせる。

「いいか、チルノ。俺はあくまで悪魔だ。神なんて面倒臭いだろ？
信仰集めたりとか。

だから俺は悪魔王なの。次言ったら…埋めるじゃ済まんぞ」

「イエス・ユア・マジョスティンツ!!」

「違うっ！ 返事はウォッチユウ！ またはラバーメン（ゴム人間）だっ!!」

「ウォッチユウッ！」

「ラバーメン（ゴム人間）」

ウルの”笑顔”によりチルノと、面白そうだからフランとガメルも敬礼する。

あとウルは正しくはグリードである。

ウルは鍊矢になりつつ、「そう言えば」と尋ねる。

「お前らどっか行くのか？ 三人揃って」

「いや、あたいは散歩の途中でフランとガメルに会っただけ」

「私とガメルは遊びに行くの」

「あそび、いく」

チルノは首を振って否定し、フランとガメルは笑顔で頷く。

フランとガメルを見て、鍊矢は「仲良いな」と思った。

性格も近いし、出会ったら仲良くなるだろうとは思っていたが、
良い意味で予想以上である。

「そうか……。で、どこに遊びに行くんだ？」

「うん。まだ決めてないんだよね」

「どこ、いこう？」

今日はどこに行こうか。幻想郷は隔離された土地とは言え広い。

ガメルは復活して日が浅いし、フランは495年近くニートに近い生活を（強制的に）送っていたのだ。二人共、幻想郷の地理がまだ理解できていないのだ。

腕を組み悩む二人に、鍊矢はある提案を出した。

「だったら、地底なんてどうだ？」

「ちてい？」

「鬼達が住む旧地獄。その中心にある”地霊殿”。
そこには心を読む妖怪が居て、多くのペットを飼ってる。……行つてみれば良い事があるかもなあ……」

「……？」

鍊矢の意味ありげな言い方にチルノは怪訝な顔で彼を見る。

顔に陰が入ってないし口も三日月状に歪んでいないので、何か企んでいる訳ではないだろうが……。

「フラン、どうする？」

「面白そうだし、行こっか」

「うん！」

フランとガメルは行く気のようにだ。

「んじゃ決まりだな。入口まで案内するから、チルノ、お前ついてけ」

「えっ！ あたいもっ！？」

「保護者だ保護者。俺は諸々の理由で地底の入口までしか案内しないから、その後の引率が必要だろうが。どうせ暇だろう？」

「うぐう……」

チルノは反論出来なかった。鍊矢の言葉には一理あり自分が暇な

のは認めている。

それに、心を読む妖怪の事は耳にした事があり興味もあった。

そんなチルノの心境を読み取ってか、鍊矢は「決まりだな」と言う。

チルノが”正義の味方”を志して早数十年。能力と剣の腕は上がったが、妖精としての力は落ちた。だが、妖精の好奇心はそのままであった。

「地底の入口は結構遠いからな。こっから飛んで行くぞ」

「はい」

「飛ぶのは疲れるんだけど……」

地底への入口はここからでは距離があるため、鍊矢は飛ぶ事を提案。

かなり歪^{いびつ}な形の翼だが飛行可能なフランは元気に返事をし、チルノはやや嫌^{いや}そうな顔する。

妖精としての力が落ち以前はあった氷の羽根がなくなったため、飛ぶのにも疲れる。

鍊矢はグリード時の翼を出し飛ぶ準備をする。すると、一人浮かない顔をしているのが居た。ガメルだ。

「どうしたガメル」

「……おれ、とべない……」

「ああそつか……」

幻想郷の能力持ちは殆ど飛行出来るため失念していたが、ガメルは飛べない。誰かが抱えて飛ばうとしても、その重量のため持ち上げる事すら困難だ。

歩いて行くにしても、場所が場所だけに時間が掛かる。

どうするか、とチルノとフランは悩む。

ガメルも、自分が迷惑を掛けているのを感じて頂垂れてしまう。

「ううう……」

「あー、そんな落ち込むなって。俺にいい考えがあるから」

「いい、かんがえ……?」

「おお。フラン、ちょっとガメル借りてくから降りてくれねえか?」

「? うん」

鍊矢に言われた通り、フランはガメルから降りると鍊矢はガメルを連れてどこかへ行ってしまった。

チルノとフランは木陰で待っていると、暫くして戻ってきた。但し、ガメルの姿はなく代わりに一人の少年が鍊矢の隣に立って居た。

やや褐色の肌に毛先が跳ねた白・銀・グレーが混じった髪の子の10歳程の少年だ。

「鍊矢、ガメルは？ それにそのチビツ子は？」

疑問に思い、チルノが質問する。

鍊矢の隣に居る少年は、先程まで戦場に居たようなボロボロで汚れた服を着ている。

と言うかこの少年が成長したら、『俺が、ガンダムだ』とか『俺達がガンダムだっ！』とか言って変革を起こしそうだ。

「こちらはガメルさんです」

「おれガメル」

「NANIッ!？」

チルノの質問に鍊矢は少年はガメルだと言い、少年も肯定する。ガメル

これにはチルノも驚いた。成人男性程あつた体が、暫く見ないうちに人間の子どもの姿になっているのだから誰でも驚く。

一方フランは…「ほおー」と上から下から、子どもの姿になつたガメルを見て感心していた。

「えーっと、何で子どもに？」

「簡単に言えば擬態だな。グリードの姿だと日常生活にやり辛い事があるし。」

子どもの姿なのは、ガメルの性格に合わせた結果だ。これなら抱えて飛べるしな」

「だからってこれは…」

「おれがガンダムだ」

「ガメルそのネタはストップ」

明らかに幻想郷の外に行つて擬態元を探した鍊矢にチルノは問い詰めようとするが、別に仕込んだ訳でもないのにネタを言うガメルに、鍊矢とチルノはツツコむ。

更に暇を持てあましたフランが見掛けた妖精に攻撃しようとしたため、ガメルを鍊矢が抱え地底への入口に向かう事にした。

そのせいで擬態元云々はうやむやになったが。

そんなこんなで、四人は地底の入口に飛んで移動。

地底への入口は博麗神社の近所の裏山……以前、間欠泉と怨霊が穴から吹き出した異変の時の穴である。今は間欠泉も怨霊も止められ、縦穴が広がり地底への入口として使われている、とか。

場所が博麗神社の近所の裏山だけあって、遠い上に妖怪のうろちろしているので一般の人間は近づかないし、「地底（旧地獄）の出入り楽になったんじゃない？」との事で塞がれもせず、そのまま放置されていた。

この場所以外にも、妖怪の山などにも旧地獄に続く穴があるとか無いとか。

「ここ（穴）から入って下に降りれば地底……旧地獄だ。ガメルは

チルノとフランが支えて貰えば降りれるし、覚えれば重力操作の要領で降りれるようになる。

んじゃ、俺はここでおいとまするわ」

「ウル、いかないの？」

早々に説明し、立ち去ろうとする鍊矢にガメルは首を傾げ聞いている。

鍊矢の様子が可笑しい。この男（悪魔）が異常なのはいつもの事だが、ここまで来る間も落ち着かない様子で、ガメル聞かれた今も、頬に大量の汗——冷や汗が流れている。

「あああ、ああ、俺たちは魔界に行く予定があるからして急がばならんのダラ、ダララ……！」

「鍊矢、ヨアヒ——」

「フラン止めいっ！ あのバカ名前言ったらどこからともかく現れるダラッ……！」

では去らばダラッ……！」

そのバカ——ニンニク料理と日光浴が大好きで激流を泳ぐ吸血鬼の語尾が移っているにも気付かず、ジユワツチダラと、掛け声と共にどこかに飛んで行く。

残された面々、純粹コンビは様子の可笑しかった鍊矢に首を傾げ

るしかなかった。

「????」

「ウル、へん……」

「ん？ 旧地獄って事は地獄の怨霊が……まさかあの事って本当なのか？」

「チルノ、何か知ってるの？」

フランとガメルが不思議に思っている中、チルノは何かを思い出したように呟いた。

チルノの呟きが聞こえ、フランは聞いてみる。

チルノは暫く言うかわらないか考え、言ってみる事にした。

「あー……いつか。前にレティから聞いたんだけど、鍊矢って幽霊とかお化けってダメら——」

チルノの言葉は最後まで続かなかった。

何故なら、チルノの顔の真横を、黒い槍——鍊矢のスペルである【魔槍『スピア・ザ・グングニル（黒）』】が殺る気で通り過ぎたからだ。

分かる通り、このスペルはレミリアの【神槍『スピア・ザ・グングニル』】の色を黒くしたパクった物だ。鍊矢オリジナルのスペルは超鬼畜弾幕で使用禁止されているので、他の人物のスペルを真似た物を使っている。

チルノは頬を引き吊らせ、ガメルとフランは「耳いいねー」と鍊矢の地獄耳に感心していた。

「……………そ、それじゃあ行こっか？」

「「はい」「」

また黒魔槍を投擲される前に、一行は地底に続く穴に潜って行った。

ここからはダイジエストにお送りしよう。

穴に潜ったチルノ・フラン・ガメルの三人は、縦穴を下っていき地底に到着すると早速旧地獄の中心にある地霊殿を目指す。

「今日から私達、友達だね♪」

「おれ、フラン、キスメ、ヤマメ、ともだち」

「「うん」」

その道中、釣瓶落としてのキスメ、土蜘蛛の黒谷ヤマメと出会い、友達となった。

「あんなに嬉しそうにして……妬ましい妬ましい……」

物陰で、パルパル言ってる妖怪が居たが誰も気づいていない。

「ううう……おおおおおおおっ!!」

「うおっ!?! この私が押されたっ!?!」

旧都で、鬼の星熊^{ほしぐま}勇儀^{ゆうぎ}と出会い、面白そうだからと闘う事になり、ガメルがグリードの姿になって勇儀と組み合い、持ち前のパワーで

勇儀を押してゆく。そして勝利した。

勝負内容は相撲だった。何故か。

そんなこんなで以前巫女や魔法使い（現・魔法忍者）が来た時とは違って変わって、ピクニック気分に進む一行は目的地である『地霊殿』に到着したのだった。

「——騒がしいわね……」

地霊殿の廊下を、ピンクのショートカットの髪に長袖の上着とスカート。左胸部前に眼があり、眼から伸びたコードを身体のおちこちに繋げた少女——地霊殿の主の古明地さとりが歩いていた。

と言うのも、自室でのんびりしていたら何か騒いでいるような大音が聞こえ、何事かとうして様子を見に向かっていている所なのだ。

最初は勇儀が来たのかと思ったが、どうも違うようだ。

大音は妹の部屋からのもうで、さとりはやれやれと息を吐いて部屋の扉を開けた。

「こいし、遊ぶのはいいけどもう少し静かに……」

さとの言葉は途中で途切れた。何故なら……。

「「おおー！」」

「わー！」

「もっと！ もっと！」

「ちよつ、部屋の中じゃ危ないってっ！？」

「アイスうめー」

部屋の中を、ガ？ラの如く何か（多分亀）が飛び回り、フランとペットの二匹である八咫鳥の力を持った地獄鴉——れいうじ霊鳥路空——うつほ通称お空——、さとりと同様にさとの妹の古明地こいしが歓楽の声を上げている。

更に上記三人の隣で人間態のガメルが両手を叩き合わせてはしゃ

いでおり、もう一匹のペット——火車の火焰猫燐——通称お燐——
が一人、止めようと奔走しており、ツツコミを放棄した正義の味方
はアイスに興じていた。

まさに力オス。

さとりはあまりにも予想外の状況に、頭の中が真っ白になった。

「……………今日は疲れてて幻覚が見えるからもう休みましょうか…
…」

「さとり様っ！ 幻覚違う現実っ！！
と言っか止めるの手伝ってえええええええええっ！！」

混沌から立ち去ろう（逃げよう）としたさとりをお燐が止め、現
実に引きずり戻す。

少女に逃げ場なし！

とりあえず、飛び回るガ？ラっぽいのから止める事にした。

く少女二人、奔走中く

何とかガ？ラっぽく飛び回っていたリクガメヤミーを止めたさとりとお隣は、はしゃいでいた全員を一行に正座させていた。

「まったく、遊ぶのは構いまないけど、部屋の中で遊ぶなら室内で出来る物にしないさい。
こんなに滅茶苦茶にしちゃって……」

「「「「ごめんなさい……」「」「」

「……………」

さとりは注意され、はしゃいでいた四人はしゅんとなり謝る。

チルノは沈黙、と言うか気絶中。さとりとお隣がリクガメヤミーを止める際、高速回転中だったリクガメヤミーを二人の弾幕で落下させたのはいいが、その先にいたチルノに直撃していた。

まったく思いつつ、さとりは顔を俯かせる四人を一瞥する。

（この子達、片方は確か吸血鬼の妹の方よね。こいしが地上に出た時に友達になったのかしら？

でもこっちの子は見た事ない子ね……。ちょっと覗いてみましょう）

こいしは『無意識を操る程度の能力』を持つ。この能力でこいしは誰にも気付かれずフラフラと地上に行ったりしているため、その時に吸血鬼の館に入り、知り合ったのだろうと考えた。

実際は今日初めて会ったのだが、それを知らずさとりはガメルに視線を向ける。幻想郷では珍しい褐色肌の人間の子どもの見た目だが、いくらチルノとフランと一緒にとは言えここまで来たのだから人間ではないのだろう。

さとりは『心を読む程度の能力』を持つ。左胸部にある、眼――第三の眼による力だ。それにより、さとりはガメルが何を思っているか見る事が出来る。

（ううう…あそびたい、けど、わるいことした……だからあやまる…）

「（悪い子ではなさそうね。まだ子どもで、自分の欲求を優先してしまうだけ）……ちゃんと謝ったから許してあげる。次は気を付けなさい」

「……はい！」「」「」

許しを得て、ガメル・フラン・こいし・お空は片手を上げ元気良く返事する。

その中、こいしは直ぐに立ち上がるとガメル達に次はどうする尋ねた。

「ねえ、次は何して遊ぼうか？」

「その前に、部屋を片付けが先よ」

「ええー」

が、さとりに止められ、更に部屋を掃除と聞いて嫌そうな声を出す。

だが結局、全員でリクガメヤミーがガ？ラになった際に散らかった部屋の片付けとなった。

少年少女達、部屋掃除中

「うーん、困ったわね……」

「そうだねえ……」

さとりとチルノは、目の前で倒れてる大きな衣類ダンスを見て困

っていた。

大きい故に重い。妖怪とは言え、ここにいる女手では無理な重さだ。

さとりは勇儀に頼もつかと思ったが、わざわざ呼び出し掃除を手伝えるのは気が引ける。

すると、ガメルが近づいて来た。

「おれ、やる！」

「え？ でも……」

「おれ、ちからもち」

ガメルは意気込むと、倒れたタンスに近付いて行く。

さとりは危ないと、見た目子どもなガメルを止めようとし……グリード態になったガメルを見て固まった。

「え……ええ……？」

「うううううう！」

さとりが驚いているが、気付かずガメルはタンスの端を持ち、持

ち上げ、タンスを立たせた。

すーいと、お空達がガメルに集まり喜んでいるが、さとりだけ事態を処理仕切れず口をパクパクさせている。

そんな姉に気が付き、こいし尋ねた。グリコのポーズで。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「こいし。そのポーズは無意識なの？
そうじゃなくて、あの子、ガメルって…」

「あ、お姉ちゃんにはまだ言ってなかったっけ。
ガメルは錬矢と同じグリードだよ」

「れん、や……あく…悪魔……悪魔……！
——嫌、嫌あああああああああああああつ！！」

「うおっ！ どうしたっ！？」

「「さとり様っ！？」」

ガメルがグリードと知り、そこから黒い悪魔のグリードを連想したさとりは、突然、絶叫。

チルノは驚き、お空とお燐は主に駆け寄る。しかしさとりは「嫌あ…」と繰り返すばかり。

疑問に思ったフランは、グリコのポーズをした状態で、同じくグリコのポーズをしているこいしに聞いてみる。

「ねえ、こいしのお姉さんどうしたの？」

「ん？　そう言えば……。ねえ二人共、鍊矢は知ってるよね？」

「「うん」」

ガメルとフランは頷く。

鍊矢の特徴の一つは無駄に顔が広い事。幻想郷に置いて、鍊矢を知らないモノはまず居ない。

「お姉ちゃん、昔鍊矢の心を読んだんだけど……急に今みたいに叫んで、それ以来鍊矢がトラウマになったみたい。
あ、そうだ！」

まるで『何時もの事』と、姉のトラウマ原因の話を持ち捨て、こいしは何か思い出したように、ベッドに移動する。そしてベッドの下から小物入れを取り出し、小物入れの中身を出しそれを持って戻って来た。

「これ、集めてただけど、ガメルがグリードならもしかして思ってた」

そう言ってこいしが見せたのは、サイが1枚、ゴリラが2枚、ゾウが1枚の4枚のコアメダル。

ガメルはその4枚を見て、歓喜の声を上げた。

「それ、おれのコアメダルだ！」

「はい」

「…いいの？」

「だってガメルでしょ？」 友達”の物を渡すのは当然だよ」

「…うん！」

こいしにコアメダルを手渡され、ガメルは受け取ると体内に吸収する。

これでガメルのコアメダルは8枚。よって力が回復し下半身の装甲が復活する。

完全復活まで、残り1枚となった。

もう時間も遅いので、また遊ぶ事を約束しガメル（人間態）・フラン・チルノは地霊殿を後にした。

因みにさとりは、暫くの絶叫の後、気絶した。

友達が増え、更にコアメダルも増えたガメルはほくほく顔。フアンも笑顔である。

一行は一度チルノの自宅に行く事を決めており、チルノの自宅であるログハウスに向かい徒歩で移動中だった。

「……ん？」

最初に気付いたのはチルノだった。

自宅のログハウスが見えてきた所で、ログハウスの玄関前に誰かが立っていた。

その人物は、チルノ達に気付いたようで振り返る、と、チルノは

驚きの声を上げた。

「レ、レティっ！？ …… じゃない？」

その人物は、チルノの正義の味方の師匠であり友達、レティ・ホワイトロックを10歳程に幼くした背丈・顔立ちをしていた。

チルノはその人物がレティに似ているため驚いたが、その背丈・顔立ち故に別人と判断した。

その人物——レティに酷似した少女は、チルノ達の前にやってくる。

「…… 貴女がチルノね？ 私はレティの友人の……。 あら？」

少女は自己紹介しようとして、チルノの後ろに居たガメルに気が付く。

しかし視線を向けられたガメルは、少女と面識がなく首を傾げる。

「もしかして貴方、ガメル？」

「…… だれ？」

「ふふ、わ・た・し・よ」

と、少女は全身をセルメダルに包まれ、グリッド……メズールに変化する。

ガメルは、目を大きく見開き自身もグリッドの姿に戻る。

「メズール…！」

「はぁーいガメル。元気だった？」

「メズールー！」

「えっ、ちょっとガメル…きゃああああああっ…！」

ガメルは嬉しさのあまり、メズールに飛び抱き着いた。…自身の重量を忘れて。

「えっ！ こいし様あのメダルあげちゃったんですか？」

「うん。だって元々ガメルのだし」

「うにゅう…それだったら、これもガメルに渡した方がいいのかな？ 綺麗だから宝物にしようと思ってたのに…」

「お空が持つてるそれと同じのだと思うけど、でもガメルのは白だよ？ お空の赤だし。孔雀だし」

「多分、鍊矢やガメル以外にも赤いメダルのグリードが居るんじゃないですか？」

「言うか、ガメルが置いてった亀どうしょ…」

C o u n t 8 に続く

ガメルの現在のメダルの数は？

ゾ
ウ
×
3

ゴ
リ
ラ
×
2

サ
イ
×
3

Count 7 『地底と友達と意外な弱点』（後書き）

地底↓地霊殿

友達↓ガメルとフランの新しい友達

意外な弱点↓鍊矢の

な今回のお話。

ガメルとフランはレミリアが嫌いじゃありません。遊びに行くのに邪魔だっただけです。

そして今回登場アドベントチルノ！

このチルノは？ではなく、頭はいいのですがノリと勢いで行動しているだけです。

ADVENT CIRNOは東方projectのキャラクターを、
『FINAL FANTASY？・ADVENT CHILDREN』のキャラクターに当て嵌めた物で、

チルノ↓クラウド

メイリン
美鈴↓ティファ

鈴仙↓ヴィンセント

マリサ
魔理沙↓ユフイ

レティ↓ザックス

と言う感じ。妹紅もいますが、何のキャラに当て嵌めるかわかりません（セフィロス、かな…？）。

今回判明した鍊矢の弱点、と言っか苦手なモノ。銀魂の銀さんと同じですね（笑）。

さとりは過去に鍊矢の心を読んで、トラウマになりました…一体何を見たのか…。

クジャク・コアはお空が所持。でも鳥頭なので、渡すのを忘れます。

では、また次回。

Count 8『新装備と手掛かりとUSC』（誤字修正）（前書き）

東方欲望録、前回までの三つの出来事！

一つ！ 鍊矢の計らいで、ガメルとフランドール・スカーレットは、チルノを連れ“地霊殿”に遊びに行く。

二つ！ 地底で、ガメルとフランは多く友達を作る。

三つ！ 鍊矢の意外な弱点が発覚した。

Count The Medals.

オーズとグリードの持つメダルのは数は？

オーズ

- ・タカ×1
- ・ライオン×1
- ・トラ×1
- ・チーター×1
- ・バッタ×1
- ・ウナギ×1

アंक

- ・タカ×1
- ・バッタ×1

カザリ

・ライオン×1

・トラ×2

ガメル

・サイ×3

・ゴリラ×2

・ゾウ×3

メズール

・シャチ×2

・ウナギ×1

・タコ×2

— ドン！ ドン！ドン！ —

博麗神社に、轟音が響く。

現在、博麗神社では二人の戦士が闘っていた。

片や、仮面ライダーオーズ・タトバコンボ。

そして正義の味方チルノ。

オーズTCは右手にメダジャリバー、左手に初めて見る銃を持ち、銃口をチルノに向け立て続け様に連射する。

対してチルノは右手に当たり棒がそのまま大きくなったような剣——当たり剣と、左手に西瓜柄の片刃剣——スイカソードを持ち、飛んで来る弾丸を跳び、または剣で弾いたりを防ぐ。

《タカ！ トラ！ チーター！》

オーズはタカトラーターに変わり、チーターレッグのスピードでチルノに急接近。メダジャリバーと、銃を鈍器として使い接近戦を仕掛ける。

チルノも正面から受ける。

剣と剣がぶつかり、鈍器（銃）をしゃがんでかわして切り上げるが、体を反らされかわされ、弾丸が発射され、蹴りまで入り交じりの攻防。

チルノは跳び、空中で一回転して二つ剣を上段から振り下ろす、が、カウンターでメダジャリバーの一閃が入る。

メダジャリバーが当たったのは剣だったためチルノ自身は無傷。しかし後方に飛ばされた。だが、カウンターされたのも後ろに飛ばされたのも、全て計算の内だった。

チルノは空中で体勢を立て直すと当たり剣とスイカソードを合体させ一本の剣にする。合体剣を造ると、更に空中一回転、そのまま落下し地面に合体剣を叩きつけた。

「――氷符『アイシクルフォール・easy』!」

合体剣を叩きつけると同時にスペルカードを発動。“左右前に向かって”氷の弾幕が飛び、オーズTTTを襲い爆発。メダジャリバーが飛び、チルノの後ろの地面に突き刺さる。

しかし、その時には、オーズTTTがチルノの額に銃口を突き付けていた。

更に、合体剣を踏み上がらないようにしている。

実は先程のスペルカード『アイシクルフォール - e a s y - 』は、左右前方に飛ぶため真っ正面がガラ空き（安全地帯）のため、オーズTTTは正面からチルノに近づけたのだ。

銃口を向けられ、チルノの負けかと思われた、が、チルノは笑っていた。

オーズTTTも、仮面の下で「フツ……」と笑い、銃をチルノから放した。銃の銃口、銃身は氷つき、幾ら引き金を引いても反応がなかった。

先程の『アイシクルフォール - e a s y - 』でやられたのだ。

「やるね名無。久々に楽しめたよ」

「君こそ流石だねチルノ。“e a s y”と言っておきながらあの弾速……かわし切れずに“メダジャガン”が氷ついてしまった」

と、氷漬けになった銃——メダジャガンを見せ変身を解く名無。

このメダジャガン（メダジャリバーが横向きになり銃口・銃身が

付いた物）は、にとりから届いたばかりに新装備だ。メダジャリバーと同様にセルメダルを投入（最大3枚）し、オースキャナーで読み込む事で【オースブラスト】使用出来る。更に弾のエネルギーは、オーズドライバー内のコアメダルから受けているため弾切れを起こす事はまずない。

裏を返せば、変身してないと使えないと言う事だが……。

互いを誉め、先程の動きを確認し合う名無とチルノ。しかしその背後に、紅白が迫っていた…。

「――神霊『夢想封印』！」

――ピチューン！――

「まったくコイツらは境内で暴れて…」

気絶した名無とチルノを見下ろし、霊夢は神社の中戻って行く。
…かなり怒っている。

『…相変わらず恐ろしい女だな』

「まあ、神社でドンパチやれば、ねえ？」

去る霊夢の後ろ姿を見ながら、そう呟いたのはアंक。そしてアंकに相槌を打ったのは、黒のニット帽を被ったグレーの髪的青年。前回体が復活し、人間に擬態したカザリだ。

その後ろでは、人間態のガメルとメズールがお茶をしている。

グリードが四人も集まっているのは他でもない。まだ見つからない仲間、昆虫系グリードのウヴァの事だ。

「それにしても、ウヴァどこに居るんだろうね」

「こうして私達は揃ったけど、ウヴァだけはまだ……ヤミーを造ってセルメダルを稼いでる様子もない。

考えられるのは、周りを警戒して潜伏してるか、あるいは復活出来てないか……」

『それはないだろ。俺がこんな状態（腕だけ）でも復活したんだ、しぶといウヴァが復活してない筈がない』

「あらアंक。貴方だってしぶといじゃない」

「アंक、ゴ——」

『誰がゴキブリ並みにしぶといだああああああっ!？』

腕だけでも元気のいいアंक。

それは放つといて、問題はウヴァだ。最初はその内合流するだろうと思っていたが、こうも音沙汰ないと心配にもなる。

「あー、酷い目にあつた」

すると、気絶していたチルノと名無が目を覚ました。

二人は、立ち上がり服に付いた埃を払う。と、チルノが「そう言えば」と語り始めた。

「この前人里に行った時に聞いた噂なんだけど、最近“太陽の畑”に虫っぽい妖怪が出入りしてるんだってさ。それで――」

『太陽の畑』。夏の間には一面向日葵が咲く事からそう呼ばれる

ようになった。また夏以外でも、四季折々の花が咲く。

『ほお、あれがそうか』

「ああ、あれが太陽の畑さ」

チルノから話を聞いた名無とグリード達は、太陽の畑に向かっていた。

その虫っぽい妖怪が、花の蜜を求めたウヴァである可能性があるからだ。

腕だけのアंकと、人間（妖怪）に擬態しメダルのエネルギーで翔べるカザリとメズールは飛び、飛ぶのが苦手なガメルは、名無と一緒にライドベンダーに乗っており太陽の畑はもう目の前まで近付いていた。

その時、アंकが気付いた。

『ッ！ ……おい』

「ええ」

「ヤミーだ」

メズールとカザリが短く返し、全員が進むスピードを上げる。ヤミーの気配は前方……目的地である、太陽の畑から感じる。

おそらく、ウヴァのヤミーだろう。

そして、太陽の畑で見たモノは――

――クワを振るい畑を耕すカブトヤミー、
花の手入れをするクワガタヤミー、
上空からジョウロで花や畑に水を与えるクロアゲハヤミーであった。

「『ドンツ！ズルズルー！』」

「メズールー！」

アंक・カザリ・メズールの三人は顔面でヘッドスライディングを決め、名無は普通にライドベンダーを停車。ガメルはライドベンダーから降りてメズールに駆け寄る。

カザリはガバツと顔を上げ、叫び（ツッコミ）始めた。

「いやいやいやっ！これは予想外すぎるんだけどっ！」

『ウヴァの奴ヤミーに何をやらせて……いやヤミーの親の欲望かつ！？』

「いたた…どうやらここ（太陽の畑）から出ないで動いてたから、ヤミーに気付けなかったようね」

更にアंकまでツツコミに加わりメズールが冷静に、今までヤミーに気付かなかった理由を分析する。

猫と鳥の大声にヤミー達も気付き……臨戦体制に入る。

「むっ、何奴」

「さては花や作物を荒らしに来たな」

「絶対にさせない」

カプト・クワガタ・クロアゲハヤミーは一行に並び名無達と対峙する。

知能はあるようだが、問答無用のようだ。

名無はオーズドライバーと黄・青・緑のコアメダルを。更にメズールとガメルが前が出る。

「昆虫系のヤミーか。このメダル行こう」

「アंकとカザリは下がって。アंकはそんな形だし、カザリは体

が復活したばかりでしょ。私達がやるわ」

「おれ、頑張る！」

「そうだね」

『任せたぞ』

メズールの忠告通り、カザリとアंकは下がる。カザリは体が復活したばかりで本調子ではないし、アंकはそもそも戦力にならない。

「変身」

《ライオン！ ウナギ！ バッター！》

名無はオーズ・ラウバに変身。メズールとガメルもグリードの姿となる。

今、オーズとグリード、ヤミーの異色の対決が始まった。

「フッ！」

「はっ！」

オーズとUBの相手はクワガタヤミー。クワガタヤミーはオーズ

ＬＵＢに飛び掛かる。

オーズＬＵＢはクワガタヤミーの攻撃を受け流し掌底突き、続いてバッタレッグの力込みの回し蹴りを放つ。

「ぐっ……！　でああっ！！」

クワガタヤミーは数歩後退し、直ぐさま反撃と拳を振るうがオーズＬＵＢは跳躍、一回転。クワガタヤミーの背中に蹴りを入れた。

「ハッ！」

「ぐあっ！？　コノオオオオオオオオッ！」

クワガタヤミーは角から緑色の電撃を放つ。対しオーズＬＵＢは避けようとせず両手にウナギウィップを装備、ウナギウィップを振り電撃を全て弾き防いだ。

更に追撃に、メダジャガンを装備して撃ちまくる。

「何っ！？　ぐああああああああっ！？」

（よく叫ぶヤミーだな）

電撃をムチで防がれた事に驚き黄色の弾丸——チルノ戦では赤だった——でセルメダルを出しながら吹っ飛ぶクワガタヤミー。

オーズLUBは“叫ぶのに違和感の無い声”のヤミーに首を傾げつつ、メダジャガンの銃口をメズールと戦っているクロアゲハヤミーに向けた。

「メズール、下がれっ！」

「っ！」

オーズLUBの声が聞こえメズールは飛び退く。同時に、強烈なライオネルフラッシャー光と弾丸がクロアゲハヤミーを襲う。

光で目を潰され、黄色の弾丸をモロに受けてしまうクロアゲハヤミー。

そしてメズールは、いつの間にかオーズLUBの隣に移動していた。

「うふふふ、ありがとうね坊、やっ！」

笑った後、オーズLUB……の後ろに向け手から放水する。オーズLUBの後ろには、クワガタヤミーが背後から襲い掛かろうとしており、メズールの放水を受け動きを中断させられた。

それをオーズLUBは一瞥し、改めてメズールに向き直る。

「どうやら助けられたのは僕のようなね」

「あら、ならこれでお相子ね」

「そうだね。はっ！」

「はあっ！」

オーズとUBとメズールは腕を突きだし水流を発射。水流はガメルの頭突きで後退したカブトヤミーを巻き込む。

吹き飛ばされ…もとい押し流されるカブトヤミー。カブトヤミーの横に、体の一部を抑えながらクワガタヤミー、クロアゲハヤミーが並ぶ。

同じく、オーズ側にガメルが合流し……オーズとUBは顎に手を当てた。

「……おかしい」

「どうしたの坊や？」

「幾ら何でも、ヤミーに攻撃が当たり過ぎてる。まるで周囲に被害が行かないように戦っているみたいだ」

オーズLUBの疑問に、メズールも「そう言えば……」と思い返す。

例えばクワガタヤミーが電撃を放った時。もっと広範囲に放電出来たのに、あえて範囲を狭めていた。

クロアゲハヤミーも、メズールの手の届かない上空に逃げ、上から鱗粉攻撃をすれば下手な反撃を喰らう事もなく立ち回れたものを地上戦で戦ったりと、納得行かない事が幾つかあった。

「言われてみれば……確かに変だね」

「……???」

『ヤミーは親となった奴の欲望で動く……。ヤミーの親の欲望に係してるのかもな』

話を聞いていたカザリも考え、ガメルは頭を掻き首を傾げる。

するとアंकが、核心部分を突いた事を言った。

——ヤミーは親となった人物の欲望を叶えるため動く……。

目の前に居る三体のヤミーが同じ親から生まれたと仮定した場合、ヤミーの行動——周囲に被害が及ばないようにするのが欲望を叶える、または叶えるのに必要な事だとする……。

被害が及ばないよう、つまり周囲を守りながら……。

周囲には畑と、夏の花。ここが“太陽の畑”なのだから花があるのは当たり前――

（そうか！　だとするとヤミーの親は……マズイツー！）

オーズLUBが気付いた瞬間……何処からか飛来した極太の砲撃が、オーズLUB達の足下に着弾、爆発。オーズLUB達を吹き飛ばした。

あまりにも強い衝撃にアंक達は倒れ体からセルメダルを溢し、オーズは変身が解けドライバーからコアメダルが弾き出される。

ライオンとウナギは、名無の手元に落ちたがバツタ・コアは空中で弧を描き……。

――パシッ――

「あら、落とし物かしら」

等と、白々しい事を言う――極太砲撃レーザーを撃った――女性がキヤッチした。

チェック柄の日傘をくるくる回し、掴んだバツタ・コアメダルを弄びながら空から、名無達を前、ヤミーを後ろにするように降りてくる。

「…風見、幽香……！」

名無は女性の名前を口にする。

風見幽香。
かざみ ゆうか

『四季のフラワーマスター』、
『USC（アルティメット・サドスティック・クリーチャー』。

幻想郷最古参の妖怪の一人で、太陽の焔を縄張りとし戦闘能力なら右に出るモノは一握りしかいない最凶クラスの实力者。

そして、三体の昆虫ヤミの親。

名無は、チルノが言っていた“噂”を思い出す。

『この前人里に行った時に聞いた噂なんだけど、最近太陽の焔に虫っぽい妖怪が出入りしてるんだってさ。

それで、幽香が“メダル”を集めてるんだってさ』

「さ……貴方達が持つてるメダルを渡して貰おうかしら」

幽香は、閉じた日傘の先を向け“微笑んだ”。

C
o
u
n
t
9
に
続
く

Count 8『新装備と手掛かりとUSC』（誤字修正）（後書き）

新装備↓メダジャガン

手掛かり↓ウヴァさんの

USC↓アルティメット・サドスティック・クリーチャー（幽香）

な今回のお話。ちょっと手抜き感が否めない…。

やっとウヴァさん、でも出番まだ（笑）。きつと次回に…。

ぶっちゃけ、幽香さんはヤミーを従てます。だって幽香さん（USC）ですし（笑）。

では次回。

Count 9 『重力コンボと真っ向勝負と乱入者』（前書き）

東方欲望録、前回までの三つの出来事！

一つ！ オーズの新しい装備・メダジャガンが登場

二つ！ チルノから情報を得た名無達は太陽の畑に向かい、昆虫ヤミーと戦闘する

三つ！ USC・風見幽香が現れた！

Count The Medals.

オーズとグリードが持つメダルの数は？

オーズ

- ・ニンゲン（擬似コアメダル）× 1
- ・タカ × 1
- ・ライオン × 1
- ・トラ × 1
- ・チーター × 1
- ・ウナギ × 1

アंक

- ・タカ × 1
- ・バッタ × 1

カザリ

・ライオン×1

・トラ×2

ガメル

・サイ×3

・ゴリラ×2

・ゾウ×3

メズール

・シャチ×2

・ウナギ×1

・タコ×2

Count 9『重力コンボと真っ向勝負と乱入者』

「――さ……貴方達が持つてるメダルを渡して貰おうかしら」

名無達に閉じた日傘の先を向け、微笑む風見幽香。

その微笑みから放たれる圧倒的なプレッシャー。並みの妖怪や妖精、人間だったら一瞬で気を失うかも知れない。

しかし名無達はプレッシャーに耐えた。これが幸か不幸か……。

幽香の能力は『花を操る程度の能力』。花を咲かせたり、向日葵の向きを太陽に向けたり、枯れた花を元通りに咲かせたりと戦闘向きの能力ではない。しかし、幽香は能力など必要としない高い妖力・身体能力を持つ。

完全復活していないアंक達ではまず勝てない。…オーズ本編のロストアंकのような最期になるのが容易に想像出来る。

交渉で戦闘を避けると言うのも考えた。幽香程の妖怪になれば、同じ力を持つモノか特別な能力を持つモノしか相手にしない…。

「貴方達、オーズとグリードでしょ？ フフツ、天狗の新聞を見て興味があったのよ」

退路は絶たれた。

逃れられない、そう判断した名無は手元に落ちたメダルを拾いア
ンクに言う。

「……アंक、以前“渡した” バッタ・コアを持ってるはずだ。出
してくれ」

『“渡した”じゃなくて“捨てた”の間違いだろ……』

と、アंकはツツコミつつも言われた通りバッタ・コアを取り出
す。

名無はバッタ・コアをアंकから素早く奪い取ると、ドライバー
へ入れ続けてタカとトラ・コアをドライバーに入れる。

『おいっ！』

「変身っ」

《タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ ♪ タトバ ♪ タ・ト・
バ ♪》

アंकの文句を聞かず、名無はタトバコンボに変身。メダジャリバーを取り出し構えた。

「貴方達は下がちなさい……手出し無用よ」

「ハッ!」「」

オースTCを微笑んだまま見据えながら、幽香は自分の後ろに居るヤミー達に言う。

昆虫ヤミー三体は返事し一歩下がった。……完全に幽香が上のようだ。

いつでも飛び出せるよう構えるオースTCに対し、幽香は日傘を開いて肩に軽く担ぎくるくる回し余裕の表情。

暫くの静寂……。最初に動いたのは、オースTCであった。

「——はっ!」

オースTCは接近し、メダジャリバーを振るう。しかし、いつの間にか閉じた日傘で遮られる。

続けてメダジャリバーを振るうが、ことごとく日傘で防がれてしまふ。

「くっ……！」

「あら、もう終わりかしら？」

「……ッ！」

オーズTCはメダジャリバーを捨て、トラクローを展開。トラクロー・蹴りを織り交ぜた手数 of 攻撃に切り替える。

「ふっ、はっ、ハアッ！」

「フッフ……ッ！」

だがそれでも、彼女（幽香）には届かない。

トラクローは防がれ、受け流され、蹴りは軽く避けられる。

ここに来て、実力の差が露見した。

そもそも名無は、能力も身体能力も戦闘向きではない。擬似グリードと言っても、少し頑丈なだけで他は一般と変わらない。オーズに変身する事で、漸くヤミーや妖怪と渡り合う事が出来るようになる。

った。

しかし名無は誕生して数週間。オーズになって数日だ。戦闘経験が乏しい。オーズの能力でカバーしていても、幽香程の妖怪になるとそれも意味を成さない。

それに、幽香程の力を持つモノとなると、オーズの亜種形態では力不足だ。余程相性の良い亜種形態か、コンボでなければ互角に戦う事が出来ない。

ラトラーターコンボは、場所が花に囲まれ障害となりチーターの力が半減し、ライオディアスを発せば周りの花を根こそぎ枯らすだろう。そうなれば、幽香の怒りを買って死に繋がる。

となるとタトバコンボなのだが……。

「そろそろ私も攻撃しようかしら」

「グアッ!？」

日傘での鋭い突きが、オーズTCの胸部を捉えた。

オーズTCは軽々と飛ばされ地面を転ぶ。

変身していなければ胸を貫かれていたであろう一撃だった。そのため、オーズTCは胸を抑えながらよろよろと立ち上がる。

そのオーズTCに、幽香は更に一撃加えようと笑いながら近付く。

「フッフ……ッ」

「名無ッ！」

マズイと判断したカザリはグリードに変化し、両腕の爪を伸ばし幽香に切り掛かる。

だがカザリの現在のコアメダルを数は3枚。戦闘力も、コアメダルの数に比例する。

そのため、今のカザリでは幽香に届かない。

「それッ」

「うわぁッ!？」

「ハアッ！」

ダメージが幾らか回復したオーズTCが加わるも、二人掛かりでも、フลาวーマスターには掠りもしない。

かわされ、防がれ、受け流され。

ずっと攻めているにも係わらず、当たりもせず、相手に疲労の色が見えない事に、カザリは焦り、オーズTCは焦りと疲労が見え始

めた。

「はぁ……はぁ……。カザリ、右から」

「分かった」

短いやり取りをし、オーズTCは左、カザリは右。幽香を挟むように立つ。

「ハアッ！」

オーズTCのトラクローと、カザリの両腕の爪が同時に幽香に突き出される。

即興ながら息の合った同時攻撃。普通なら当たっただろう攻撃。

——即興のコンビネーションで倒せる程、二人の前にある壁は低くない。

「フ……」

幽香はしゃがみ、同時攻撃を避けると左足を伸ばしその場で右足を軸に一回転。左足はオーズTCとカザリの足を捉え、足払い。そ

れにより、オーズTCとカザリはバランスを崩し僅かに地面から浮き上がった。

浮き上がった瞬間には、幽香は更に一回転し、日傘で二人の胴を一閃した。

『マズイな』

「マズイわね……」

戦況を見て、アंकとメズールは呟く。

戦況は明らかにオーズ・カザリが不利だ。二人が幾ら攻撃しても、いいようにあしらわれている。

経験・技術・戦闘センス・身体能力、それら全てが負けている。

この場合、どれか一点、例えばスピードで攪乱したり、圧倒的パワーで防御事潰すなど相手を圧倒出来る点があれば勝機があるのだが……。

『（やっぱりコンボじゃないと無理か。ラトラーターを使わないって事は、使えない理由があるんだろう。となると……）……ガメル、お前今メダル何枚ある？』

「うゝ？ 8枚」

『よし、3枚寄越せ。絵が別なのな』

ガメルは言われた通り、サイ・ゴリラ・ゾウのコアメダルを渡す。

メズールは、アंकの意図が分からず質問した。

「ちょっとアंक。何をするつもり？」

『ああ、そう言えばメズールは知らなかったな。まあ見てろ。……名無っ！ ガメルのメダルのコンボだっ！！』

アंकはガメルから受け取った3枚のメダルを投げ渡した。

オーズTCは、膝を付き肩を上下させ呼吸を繰り返す。体力が限界に近づいていた。

今はカザリが戦っているが、また直ぐ一撃入れられるだろう。

打開策が思い浮かばなかった。

『——名無っ！ ガメルのメダルのコンボだっ！！』

「ッ！」

その時、アंकの声が響き白いメダルが3枚、此方に飛んで来るのが見えた。

それに気付いたオーズTCは、オーズドライバーに装填されているコアメダル3枚を引き抜く。すると白いメダル3枚が引き寄せられるようにドライバーに自動装填される。

オーズTCは立ち上がり、オースキャナーでドライバーのメダルを読み込んだ。

《サイ！ ゴリラ！ ゾウ！ サゴーズ……サゴーズ！》

「——はあっ！」

サイの頭・ゴリラの腕・ゾウの脚。

重量系のコアメダルで変身するオーズ・サゴーズコンボ。

オーズSCは、雄叫びを上げ胸を激しく叩く。ゴリラの威嚇行為の一つ、ドラミングだ。

「——おおおおおおおっ！！」

「っ！？」

「うわああああああっ！？」

すると幽香の立っていた地面が砕け、地面の破片と一緒に幽香の体も浮き上がる。…カザリが巻き込まれるのはご愛嬌である。

サゴーズコンボの能力、重力操作。地面が砕け、幽香とカザリが浮いているのもこの能力によるものだ。

「おおっ！ おおっ！ おおおおおっ！！」

ドラミングを繰り返しながら、さっきのお返しとばかりに重力操作で幽香を振り回す。

ただ初使用のコンボのため、力の加減が利かずやはりカザリも巻き込まれる。

オーズSCは重力操作を止める。すると本来の重力に従い幽香は落下。カザリはアंक達の方に飛んでいった。

「ぐっ……！」

「ギャー！？」

《スキヤニングチャージ！》

そしてオースキャナーで再び読み込み、両足を揃えて跳ぶ。

両足の底に白いエネルギーを溜め着地すると、足下から白い輪が三つ連続で射出され幽香を捉える。すると幽香は脚を地面に“沈め

られた”状態で引き寄せられる。

幽香は脱け出そうと抵抗するも、脱出出来ない。

そうこうしている間にも、オーズSCは体を反らし頭の角と両腕にエネルギーを貯めている。

そして幽香が眼前に来た時、頭突きと両拳を同時に叩き込んだ。

「はあああ……！ はあああああああつ！！」

オーズSCの必殺技【サゴーズインパクト】。

必殺技が炸裂し、幽香は衝撃に従い後方に大きく飛ばされた。そのまま地面に落ちた時、大きな砂埃が起こり幽香の姿を隠す。

控えていたヤミー達に衝撃が走り、アंक達は「やったか」と思った。

オーズSCは、ジッと砂埃の中を見据える。

——その時、砂埃が弾けた。

「——やってくれるじゃない……!!」

姿を見せた幽香。サゴーズインパクトを受けたため、“若干服が破けている”。

先程までの余裕の笑みから、“久々に楽しめる相手に出会えた笑み”に変わっていた。

『なっ……!! アイツ化け物かつ……!!』

「アंक、私もだけどグリードである貴方がそれを言う？ 気持ちは分かるけど」

「オロロロロ……!!」

「カザリ、大丈夫？」

オーズSCは姿勢を低くし構える。サゴーズは重量系のコンボの為パワー・防御力は申し分ない。幽香とも、正面から打ち合える。

しかし体力の限界、コンボによる体内のセルメダルの消費があるためそう長くは戦えない。

しかしそれは幽香も同じ事。見た目は無事でも、ダメージは入っているはずだ。

だったら……。

「——叩き潰すっ！！」

相手より先に、必殺の一撃を叩き込む。

幽香は踏み込み、オーズSCとの距離を0とし左手を添えた日傘の突きを繰り出す。

オーズSCは反時計回りに体を回転させ突きを避け、左腕での裏拳を叩き込んだ。

幽香はしゃがんで裏拳を回避するが、オーズSCが右足を振り上げ踏みつけようとしていたため服が汚れるのも構わず横に転がり避ける。

オーズSCは追撃するため踏み込み、拳を振り上げる。

幽香も、反撃に日傘、更に脚も使って攻撃する。

幽香がサマーソルトキックをすれば両腕のゴリバコーンを盾に防ぎ、オーズSCがちやぶ台返しならぬ地面返しをすれば地面を穿ち砕く。

「はあああああああつ！！」

そして、両者が相手に得物を振ろうとした時だ。

空から、物凄いスピードで黒い槍が降って来た。

オーズSCと幽香は、咄嗟にバックステップする事で回避。黒い槍――魔槍『スピア・ザ・グングニル（黒）』は二人の間の地面に突き刺さった。

「――お前ら、何ガチでやりやっतेの？ もう別のマンガじゃん」

上空から、そんな事を言いながらグリード時の翼を出した鍊矢が降りて来た。

一方、太陽の畑にある一軒の家の中では…。

「——ほづら、水の時間だぞー」

等と、家の中の観葉植物に如雨露^{じゅうる}で水を与える虫の怪人——虫頭が居た。

C o u n t 1 0 に続く

オーズが新たに手に入れたメダル

サイ× 1

ゴリラ× 1

ゾウ× 1

Count10『停戦と理由とメダル譲渡』（前書き）

東方欲望録、これまでの三つの出来事！

一つ！ オーズは幽香と戦うも、力の差の前に苦戦する。

二つ！ アンクの気転によりサゴーズコンボを発動する。

三つ！ サゴーズと幽香が激突しようとした時、鍊矢が乱入した。

Count The Medals.

オーズとグリードが持つメダルの数は？

オーズ

・ニンゲン×1（擬似コアメダル）

・タカ×1

・バッタ×1

・ライオン×1

・トラ×1

・チーター×1

・サイ×1

・ゴリラ×1

・ゾウ×1

・ウナギ×1

アンク

・タカ×1

カザリ

・ライオン×1

・トラ×2

ガメル

・サイ×2

・ゴリラ×1

・ゾウ×2

メズール

・シャチ×2

・ウナギ×1

・タコ×2

Count10『停戦と理由とメダル譲渡』

「――お前ら、何ガチでやりやつの？　もう別のマンガじゃん」

オーズSCと幽香の戦いを中断させ、鍊矢は空から降りて来る。

しかし鍊矢の登場で、緊張状態が解かれた。その証拠に、幽香は服に付いた埃を払い日傘を開いて再び余裕そうな笑みを浮かべていた。

「鍊…矢、か……」

オーズSCは、鍊矢の登場で幽香が臨戦体勢を解いたので変身を解く。やはり疲労とコンボによるセルメダルの消費で、足取りはふらついていた。正直あのまま続けていたら、名無が殺られていた。

その事を考え内心鍊矢に感謝する名無。それはアंक達も同じで、名無が殺られていたら次は自分達の番だったからだ。

『チツ、体さえ戻れば……』

「アंक、体が戻っても無理だと思うわよ？」

『……………言っな』

完全復活しても、幽香に勝てる自信がない。アंकとメズールの、共通見解であった。

唯一例外規格外の鍊矢は、おどけた態度で幽香に話掛ける。

「おいおいゆうかりん、大人気ないぞ。何マジになってんだよ」

「別に本気になってないわよ。ただ興味が出て試したくなっただけよ」

——いやさっきの本気^{マジ}だったろ…。と鍊矢は思った。

「ま、いいか。」

それより全員疲労してるし、お前の家に連れてって休ませるか。いいだろ?」

「ええ、いいわよ」

鍊矢の提案に幽香はすぐに了承した。

まるで最初からそのつもりだったように……。

名無達は疲労を癒すと言う名目で、強制的に幽香の家に行く事となった。

サゴーズ重力操作により地割れした場所の修復をヤミー達に任じ、鍊矢・幽香、名無達は幽香の家の前まで来ていた。カザリ・メズール・ガメルは擬態姿である。

幽香の家は大きくなく、あくまで数人で住むのが目的の一階建の洋式の家である。

まず家の主である幽香が、ドアノブに手を伸ばした。

「ただいま。今帰ったわよ」

「おお、帰ったか幽香」

（（あれ…？ この声…））

幽香がドアを開け、帰りの挨拶を言くと家の中から幽香を迎える男の声が。

アंक・カザリ・メズールは、その男の声に聞き覚えがあった。

そうして、幽香を出迎えるため男…いや、“虫”が姿を現した。

クワガタ虫の角（顎）に昆虫の触角。右手の甲からは、鋭い鉤爪が生えている。黒と緑色の虫の印象の体をしているが、下半身は茶と黒の不完全状態^{セルメン}。

そして何より気になるのが、片手に如雨露を持っている事か。

とにかくその“虫”を知る鳥猫水棲グリードは叫んだ。

『「何やってんのウヴァっ！？」』

「ウヴァだ」

「新しいメダル…」

純粹にウヴァの登場に笑うガメルはいいとして、ボソツと欲望を漏らしたバカははっ倒された。

「はっはっはっ、アंकにカザリ、メズールにガメルだったか。見た目が随分変わってたから分からなかった」

（（誰コレ……………？））

家上がりテーブルを囲んで椅子に座って居るのだが……陽気に笑うウヴァに、アंकとカザリはそう思った。

言ってる意味は分かる。グリードが擬態した人間の姿は、グリー

ドの（正しくはメダルの）気配を完全に隠せる上、能力は使えると言う便利な物……他のグリードが見ても、その擬態は完璧。ウヴァが気付かないのも納得だ。

だがそれよりも……。

「そうだ、これ食べるか？ 俺が育てたプチトマトだ」

（（コレほんと誰だよおおおおおおおっ！？））

800年前、封印される前のウヴァはプライドがあり、けれども周りに流されやすく単純……アंकからは“虫頭”なんて言われていた。

だがしかし、今日の前でプチトマトを乗せた皿を笑顔で出すような奴でなかったのは確かだった……等。

「はい、どうぞ」

「ありがとー♪ メズールー！ お菓子貰ったあー♪」

「良かったわねー、ガメル」

（（メズールー！ お願いだからこのウヴァに疑問持て（持って）っ！！））

メズール、ツツコミ放棄。幽香からお菓子を貰ったガメルを撫でていた。

「うん、まあ気持ちは分かる。俺も最初見た時は思わず全身メダルに変換しちゃったし。
さて、まず言っておく事がある」

椅子に座りながらブレイクダンスする鳥と猫（アंकは空中で暴れている）を見て察した鍊矢は、同意する。

鍊矢は既に、ウヴァと接触していたらしい。

そして鍊矢が言っておきたい事とは、幽香に名無が太陽の焔に来た時、死なない程度に叩いて欲しいと頼んだと言っものだ。

「ぶっちゃけ、最近の名無の行動は目に余ったからな。コアメダルをウヴァ…奪おうとしたりな。

だからここらでお灸を据えようと思って、幽香に頼んだんだよ。ウヴァが幽香のところに居た時はかーなり、驚いたけどな」

「ふーん」

「いや、お前の話だよっ!？」

まるで他人事のように流す名無にツツコむ鍊矢。

もういいや、と諦め次の議題に移る。

「しゃーね、どうせ何枚かのメダルはオーズに集めるつもりだったしな」

『は？　おい、どう言つつもりだ』

「そのまんまの意味だ。オーズに、お前らのコアメダルを何枚か預ける。……完全復活しないようにな」

グリードにとって、コアメダルは命。それに完全復活は今のアンクの欲望でもある。

それを鍊矢は、諦めろと言っているのだ。当然、アンクは掴み掛かろうとするが…何処からか出したハエ叩きで落とされた。

『おいっ！　どう言っつー——』

「うつさい」

『たじゃすぴなー！？』

「てーかうつさい。今説明してやるから……アンクとカザリは土下座して俺を敬え」

『「何でっ！？」』

「俺達グリードはコアメダル9枚揃えれば、完全復活出来る。完全復活したら、自分の“満たされない欲望”を満たすために人間にを、妖怪も妖精も食っちまう……。」

ま、この小説じゃ死に設定だけだな」

『「ぶつちやけ発言したあああああつー!!」』

今日もアंकとカザリのツツコミが冴え渡る。

鍊矢曰く、死に設定でも設定なので完全復活したら面倒。と言うか、完全復活グリードはほぼ暴走状態とか。

なので、各2枚ずつオースに預けようと考えたらしい。

アंकは反論しようとするが再びハエ叩きの餌食に……。カザリとメズールは既に諦めており、自分のコアメダルに対する欲望の低いガメルは、お菓子をくれるならと了承した。

「つー訳で名無、持ってる猫系と重量系のメダル……どれか1枚ずつカザリとガメルに返せ」

「I Y A D A」

鬼畜オース、拒否。

鍊矢は額に血管を浮かばせるが、名無はオーズドライバーを着る前に走り出す。し赤・黄・黄のメダルを装填。スキャナーで読み込み変身が完了す

「……………待てやコラアアアアアアアッ!？」

…暫くして、遠くから強烈な光や虎の咆哮が聞こえ、更には地面がひっくり返り、最終的には博麗大結界を揺るがす大きな衝撃が走り…。

ボロボロになった名無の首根っこを掴み、無傷の鍊矢が戻つて来た。

276

そして没収したコアメダルをテーブルの上に並べた。

「それじゃ、コアメダルの配分決めるか。鳥、昆虫、水棲のメダルは1枚ずつしかないから現状維持でいいとしてだ」

「そうだな」

「3枚ずつある猫系と重量系のメダルは1枚ずつカザリとガメルに戻す。

どれ戻してどれ残すかはお前が決める。使っのお前だしな」

そう鍊矢は名無に言う。

名無は椅子に固定されたまま少し考える。……3枚所持は諦めたようだ。

「そうだな……猫系メダルはライオンとチーターで、トラを返さ
や……」

「『待て待て待てっ！』」

トラをディスプレイとした鍊矢・アंक・カザリが即座に待ったを掛けた。

「名無おまつ、何トラディスプレイとしてんだよっ！　トラは残せよ

オーズとしてっ！！」

「だって、トラはあんまり役に立たないし」

「トラをバカにするなー！！」

『落ち着けカザリっ！ 孔…名無の罨だっ！！』

「あと鳥系メダルならクジャクとコンドルがいい」

『タカはいらないってかつ！？ タカは能力微妙だからいらなんてかつ！？』

「つーか名無っ！ お前タトバデイスる気かつ！？ あれ一応でもコンボだぞっ！？」

「バツタは使うから残す。タカ・トラに比べてバツタは使える……」

「いやあ」

『「照れるなウヴァっ！ ム力つくからっ！！」』

タカ・トラをデイスろうとした名無を何とか止め、辛うじてタトバを残し、猫系メダルはライオン・コアを返却する事で落ち着いた。

重量系メダルはゾウ・コアを返却し、サイ・ゴリラを手元を残す事に。

名無は残ったメダルを見て、呟く。

「ああ、これだとクワガタ・コアが欲しいな……」

『お前また……』

「なんだ、クワガタが欲しいのか？ ほら」

と、体内からクワガタ・コアを取り出し名無の手持ちのメダルに
加える虫頭。^{ウヴァ}

アंकとカザリは直ぐ様ツツコミを入れる。

『「お前何簡単に渡してるのっ!？」』

「はっはっはっ、俺のコアメダルはさっき幽香がくれたバツタを入れて6枚だったからな。1枚減った所でどうと言う事はない」

「ああもうそうじゃなくて……ウヴァ、ホントにどうしちゃったの？ 800年前だったらこんな簡単にコアメダルを渡すなんて……」

「そうだな……—」

あまりの変わり様に、困惑し尋ねるカザリ。

ウヴァはお茶を啜りつつ思い当たる原因を思い出す。それは、ウ

ヴァが幻想郷で復活したばかりの時……。

——あの日、コアメダル1枚で何とか復活した俺は、他のコアを探すために仮の体を探していた。その時、俺と似たような感じの子ども見つけて取り憑いた。

『うわっ！？ 何コレ、メダル？ ううー！ 取れないー！！』

——だが取り憑いたのはいいが、何故か支配できなくな……正直、コアメダル1枚だったから何も出来なかった……。

『幽香さーんっ！ 幽香さーんっ！！』

『あら、どうしたのリグル。そんなに慌てて』

——それが、幽香との出会いだった……。

「——幽香は一瞬で取り憑いて（張り付いて）いた俺を剥コアメタルがしてな、弾幕で何度も撃たれた。今思えば、グリードとしての俺の心は完全に折れたのかも知れないな」

いい思い出だとばかりに笑いながら、簡潔に言うウヴァ。幽香もその時の事を思い出し笑っている。

アंकもカザリもメズールも鍊矢も、「うわぁ……」と漏らすしかなかった。

ガメルはお菓子を頬張り、名無は体の一部をセルメダルに崩して拘束から脱出しクワガタ・コアを眺めていたため、話を聞いていない。

「さて……」

名無はコアメダルとオーズドライバーを仕舞い、全員の注意が逸れている内に行動に出る。

「ガメル、ものは相談なんだが……ゾウ・コアメダルを渡してくれないかな？」

「え？ でも……」

「代わりにお菓子をあげよう」

「うーう……フランとこいし達に分もくれるなら……」

「……いいだろう。（今月の小遣いで足りるかな……？）」

名無、ガメルの純粋さを利用し返却したゾウ・コアメダルを再び手に。

代償：今月のお小遣い。

太陽の畑で虫頭とUSCが出会いのノロケ話？をしている頃、河城にとりの工房では……。

「うふふ　　ウフフフフ」

パソコンの画面に視線を固定したまま、キーボードを打ち、怪しく笑うにとりが居た。

「いやー、鍊矢は毎回面白い物を持ってくるよ。」

カンドロイド、ライドベンダー、メダジャリバー。そして“コレ”。
外の世界には私達が思い付かないような物が沢山あるねー」

笑いながらも、手は止まらない。

パソコンから伸びるコードの先には、作業用テーブルの上にある

——バックル部にガシャポンのカプセルのような物が付いてる——
ベルトがある。その隣には、にとりが開発したメダジャガンとは別の銃。

にとりが見るパソコンの画面には、U字型のバイザーの仮面の戦士、その設計図が映されており、画面の上部分には、

『K A M E N R I D E R B I R T H
』

と、戦士の名が書かれていた。

C o u n t 1 1 に続く

名無が新しく手に入れたメダルは？

クワガタ×1

尺が余ったのでおまけ・『レッツゴー変身オーズ!』

鍊矢

「はい見切り発車で始まった今回のおまけ。
ウルトラの父のような存在、グレートダイこと悪魔系グリード・
ウル。荒木鍊矢」

サカキ

「東方欲望録には全く一切出ないのに、何故かおまけに出る事になった八神サカキだ。最近、UNIQUEをユニクロンと間違えた。
……マジ何で俺出たのっ!？」

鍊矢

「いや今回の企画、名無じゃ駄目なんだよ。俺だけでも駄目だし、

だからお前呼んだの。

あ、サカキの事を知りたかったら同じフロストの小説の『仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と』を読んでくれ」

サカキ

「宣伝すんなよ……。」

で、企画つてのは？ タイトル見れば大体分かるが」

鍊矢

「その前にゲストの紹介だ。

仮面3さんの作品より、変態の中の変態、キング・オブ・ヘンタイ、
××魅空っ！ おまけコーナーから本編に出現したランブルガール、
米倉赤音ことセキハンっ！」

セキハン

「どもー」

魅空

「どもー、つてっ！ 名前の前の××つて何っ！？ 何か卑猥な感じになつてゐるぞっ！ 美女or美少女に言われるならともかくっ！
！」

サカセキ

「「うっわー」」

鍊矢

「だって魅空つて、龍騎の方と翠鬼音響じゃ名字違うしー。龍騎の方で呼んだら怒るし」

魅空

「当たり前だっ！」

セキハン

「まあそんな事より、サカキおひさー」

サカキ

「おうセキハン。久しぶりだな」

（サカキとセキハンは、仮面3さんの『東方翠鬼音響』のおまけで会った事があります）

魅空

「それだったら俺もだよね？ 逆鬼の方のコラボで出たし」

鍊矢↓ウル

「ア？ 我が娘に危害を加えようとした害虫が何を言う」↑悪魔王
オーラ全開

サカキ

「ん？」↑牛鬼とサイ・ゴリラ・ゾウとドラグレッダーのキメラオ
ーラ

魅空

「Σえっ！ 何この空気っ!？」

セキハン

「うわ、鍊矢のグリード姿初めて見たけどマジ悪魔じゃん」

魅空

「ちよつ、のんびりしてないでセキハン助けてっ！ 同じ作者のキヤラのよしみでっ！」

セキハン

「だって、自業自得でしょ？ てかあたしでも無理」↑徐々に距離を取る

魅空

「そうだと思っただけどっ！！」

ウル↓鍊矢

「冗談はここまでにして」

魅セキ

「「Σ冗談だったのっ！？」」

サカキ

「ッ！！？」↑龍騎デッキとSURVIVE - 烈火 - 装備

魅空

「Σちよつ、あそこの鬼ガチに殺る準備してたんだけどっ！？」

鍊矢

「これ以上脱線すると收拾つかなくなるし、そろそろ本題行くか」

鍊矢

「はい今回の企画は、『レッツゴー変身オーズ!』。つまり仮面ライダーオーズに変身しようと言う企画だ」

魅空

「いやいや無理でしょ。オーズには封印を解いた奴しかなれないんだし」

鍊矢

「それはそつちと、オーズ本編の設定。フロストのこのオーズは違うんだよ」

サカキ

「と言うと?」

鍊矢

「オーズドライバー自体は、誰でも装着出来る……しかし、コアメダルの方に適性がないと変身出来ないっ!!」

サカキ

「『な、なんだってえー!?!?』↑大袈裟に驚いてみる」

鍊矢

「つまり、極端に言えばコアメダル全部に適性があれば全コラボ・亜種形態になれるが、逆に適性が一切なければ変身出来ないっつー訳だ。」

適性するコアメダルは人によって違う」

サカキ

「うわ面倒」

鍊矢

「因みに俺と名無は特別で全コアメダル適性だ。普通は全コアメダル適性なんていないが」

セキハン

「つまり欲望録に関係ないサカキが居るのは…」

鍊矢

「察しがいいなセキハン。その通り、サカキに実つけ…ゲフンゲフン。……試して貰おうと思ったわけよん」

サカキ

「おいコラ今実験って言おうとしたろっ!」

鍊矢

「そんな事はどうでもいいっ! セキハンっ!」

セキハン

「よし来たっ!」

サカキ

「セキハンてめっ! Σうお抜けらんねっ!?」 ↑セキハンに後ろから羽交い締めされてる

鍊矢

「レッツメダルチェーンジ」

(サゴゾ♪……サゴゾ！)

Sサゴゾ

「ホントになつたよ……」

セキハン

「サカキの適性つてサゴゾなんだ」

錬矢

「ガメルのメダル一色だな。因みに、『仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と』、略してサヤマのレギュラーオリキャラだところなる」

サカキ↓サゴゾ

ソラ↓タジャドル

香里↓ガタキリバ・シャウタ・タジャドル

香流↓ラトラーター

淳一↓ブラカワニ

Sサゴゾ

「香里多っ！ ガタキリバは何となく分かる（バツタ的な意味で）が何故シャウタ・タジャドル？」

魅空

「……そういやさ、何で俺とセキハン呼ばれたわけ？ ただ変身するだけじゃないじゃん」

セキハン

「さう言えば……」

鍊矢

「それはな……」 ↑パチンと指を鳴らす

魅セキ

「「え？」」 ↑自分の影が伸び体を拘束

鍊矢

「俺or名無が変身したオース何が違うか、能力を測る的にするためじゃああああああああつ!!」 ↑目がビコーンと光る

魅セキ

「「はいいいいいいいつ!?!」」

Sサゴーズ

「ヒヤッハアアアアアアアツ!!」

鍊矢

「さあ、大人しく的になれ♪」

Sサゴーズ

「♪」 ↑鼻歌歌いながらゴリバゴーンを打ち合わせる

魅空

「クソっ、そう言う事が。セキハンっ!!」

セキハン

「はいよっ!」 ↑影を引きちぎり、脱出

Sサゴーズ

「逃がすかつ！」↑バゴーンプレッシャー

セキハン

「ガードベントっ！」

魅空

「ぐぼっ!？」↑盾にされた

Sサゴーズ

「やるな、だがもう一発……」

セキハン

「あつ! 桜が巫女服(not博麗・守矢)、若葉がメイド服着てクロックアップしてるっ!」

Sサゴーズ

「えっ、マジでっ!？」

鍊矢

「ぐんぼー!？」↑誤射

セキハン

「よし今のうちに」

魅空

「セキハン後で覚えてろ……」

Sサゴーズ

「どこっ！？ 犬耳尻尾の巫女さんとメイドさんどこっ！？」↑実は犬派

鍊矢

「おいコラ…… テメエは何やってんだっ！！」↑OOO本編でウヴァをバラバラにした四属性攻撃

Sサゴーズ

「ギャフンツ！！」

鍊矢

「チッ、あの二人山に逃げたな？ しょうがねえ……、
——山狩りだああああああっ！！」↑目が光る

—————

セキハン

「振り切ったみたいだね」

魅空

「痛い…ゴリバゴーンが頭に当たった…」↑首が90度に曲がってる

セキハン

「……はっ！」↑跳ぶ

魅空

「え？ ギャー！？」 ↑燃える

セキハン

「今の火炎弾は……まさかつ！」

タジャドル（ソラ）

「——どうも」

ガタキリバ（香里）

「事情は聞いたから同情するけど、諦めて」

セキハン

「やつぱりかつ！ て言うかドライバー幾つあるのっ！？」

（ギャグだから気にしない）

セキハン

「うおいつ！」

魅空（上手に焼けました♪）

「フフフ……鬼サゴーズとか悪魔の相手は嫌だが……相手が美少女と分かれば話は別だっ！」

——変身解かしてカザリ（仮面3の）にやってるあんな事やこんな事を、S I C H A R U ゼエエエエエエエツッ！」 ↑ルパンダイブ

S r タジャドル

「——はっ！」

変態という名の魅空

「ギヤアアアアアッ!? タジャスピナーの火炎弾と孔雀オーラの追尾弾が刺さる焼けるううううううっ!」

セキハン

「あの火炎弾と追尾弾、飛針や棒手裏剣みたいな刃の形状だったぞっ!」

もしかして錬矢の言ってた普通のオーズの違いってコレっ!」

（ソラの変身するタジャドルは火炎弾・追尾弾の形状が刃状。コンドルレグの切れ味上昇）

魅空という名の変態

「フッフ……! 確かに凄いが美少女の攻撃は寧ろご褒美っ! 興奮すれぜ!

そっちのガタキリバの娘はどんな攻撃（ご褒美）をしてくれるのかなあー!!」 ↑ 再びルパンダイブ

Kガタキリバ

「ひっ! ……来るなああああっ!」 『 ↑ 分身カウンターキック

ホシモノ
変態

「よっしやああああああっ!」

（香里の変身するガタキリバ（シャウタ・タジャドルも同様）は

キック力強化・キック速度上昇)

ボコボコ
魅空

「やるなあ……もつとご褒美をくれえええええつ!!」

セキハン

「分かってたけどダメだコイツ……」

S r タジャKガタ

「……ヒツ!?!」

魅空?

「U R I I I I I I I I I I I I I I I I ツ!!」

S サゴーズ

「——ア—ア—」↑ターザンで登場

セキハン

「変なの来たああああああつ!!」

S サゴーズ

「おりゃ!」↑踏みつける

魅空

「ぐぼっ!!」

ソラ(涙目)

「サカキ様——!!」

香里

「サカキ！ その変態殺っちゃってっ！！」

Sサゴーズ

「OK」——焼却処分」

魅空

「ギャアアッ！！ 相手が男だから純粹に大ダメージっ！！！」

セキハン

「Σて言うかサゴーズが火吹いたっ！？」

（サカキのサゴーズの場合、攻撃に炎属性追加。鬼火も吹ける）

炭（魅空）

「」

セキハン

「完全に炭になった。」

ま、これで能力測るのも終わっただろうし、あー助かった」

鍊矢（影から出現）

「——ところがギッチョン」

セキハン

「うわビックリしたっ！？」

鍊矢

「確かに能力を測るのは終わった。淳一と香流のは考えてないし。だがしかし、『セキハンに女の子らしい服を着せよう!』が残っている」

セキハン

「……………はい?」

鍊矢

「面白半分に思い付いた企画だ。てか、ソラと香里はそのため呼籲だ訳だし」

セキハン

「……………!」

セキハン はにげだした!

しかし まわりこまれた!

鍊矢

「んじゃ宜しくな」

ソラ

「はい」

セキハン

「むー! むー!」 ↑縛られて口も塞がれた

香里

「さっきも言ったけど、諦めなさい」

Sサゴーズ

「巫女orメイド希望」↑荒らぶるマツチヨのポーズ

錬矢

「お前はブレないな」

——数時間後

香里

「待たせたわね」

ソラ

「出来ました♪」

セキハン（黒のゴスロリ）

「……」↑顔真っ赤

サカキ

「おー」

錬矢

「中々だな」

魅空（復活）

「あ、守備範囲内だコレ」

セキハン（ゴスロリ）

「……むう」

ソラ

「そう剥れないください赤音様。とってもカワイイですよ」

赤音という名のセキハン（ゴスロリ）

「ちよっ！ いきなり本名で呼ばないでよっ！ ……名前で呼ばれるの、慣れてないんだから……」 ↑ もじもじ

サカキ

「あー、セキハンって基本ボケだけど、一度受けになると男勝りから女の子になるんだっけか？ カワイイとこあんじゃん」 ↑ ニヤニヤ

ゴスロリ
赤音

「いきなり何言つのよっ！？ 名称表示も本名になってるしっ！」
↑ 真っ赤

魅空

「まあまあ、ここは俺のケフィアでも飲んで落ち着けて」 ↑ 危ない目で赤音に近付く

サカキ

「また燃やすぞ…？」

魅空

「燃やされてもいいっ！ 今のセキハンに何としても俺のケフィア、またはカルピスを飲ますっ！！」

鍊矢

「その事なんだが魅空。お前にどうしても会いたい女ヒトが居るんだ」

鍊矢

「あ、收拾つかなかったからここで終わりな？」

魅空

「ライツ！」

ルナドーパント

「そおいつ！」 ↑ 跳躍

魅空

「ギアアアアアアアッ!？」

（今回の企画のオーズ設定は大体マジです。サヤマ本編でサカキ達オーズに変身する………かも知れない（未定）。

追加能力は無くなるかもですが。

オーズ設定の元ネタはハルルさんから。ハルルさん、ありがとうございました）

ゴスロリ
赤音

「……………私いつまでこのまま……………?」

おまけ、終わり。

Count 11 『家出と山犬と鳥暴走』（前書き）

東方欲望録、これまでの三つの出来事！

一つ！ オーズ・サゴゾコンボと風見幽香の戦いに鍊矢が乱入し止める。

二つ！ 幽香の家で昆虫系グリード・ウヴァと再会、名無の持つライオン・コアメダルが移動しクワガタ・コアメダルが入った。

そして三つ！ 新たなライダーの誕生が近付いた。

Count The Medals.

オーズとグリードの持つメダルの数は？

オーズ

- ・ニンゲン（擬似コアメダル）× 1
- ・タカ × 1
- ・クワガタ × 1
- ・バッタ × 1
- ・トラ × 1
- ・チーター × 1
- ・サイ × 1
- ・ゴリラ × 1
- ・ゾウ × 1

・ウナギ×1

アंक

・タカ×1

カザリ

・ライオン×2

・トラ×2

ガメル

・サイ×2

・ゴリラ×1

ゾウ×2

メズール

・シャチ×2

・ウナギ×1

・タコ×2

ウヴァ

・クワガタ×1

・カマキリ×2

・バッタ×2

C o u n t 1 1 『家出と山犬と鳥暴走』

——ドガシヤアアアアアンツ！——

『——ちくしよおおおおおおつ！ バカにしやがつてえええええええええつ！——』

その日、博麗神社から飛び出す赤い右腕が境内の大樹に住む妖精に目撃された……。

「——それで、アंकさんは出て行ったと……？」

「「うん」」

文の言葉に、名無と霊夢は頷く。

今日はアंकに用があつて訪ねた文だったが、アंकは出て行つたと言われたのだ。

好奇心が翼生やして飛んでいるような存在の射命丸文は、当然理由を聞く。すると、

「ちょっと高い所にある物を取って貰おうとしたんだけど…」

「背中が痒くて孫の手代わりに」

「また寝惚けて噛みついた」

と言う霊夢・名無、それに萃香。

…… オーズ本編最終回でいくらカッコよくしようが、不幸、と言うか扱いが雑なのは平常運行らしい。

短い言葉で全てを理解した文は、一言礼を言って神社を出る。そして鳥居の上に立ち、そこから見える景色を一瞥した。

「あやや、アंकさんどこに行ったんでしょう？　せっかくコレを持って来たのに……」

そう呟き、文がスカートのポケットから取り出したのはコンドル・コアメダル……。

同じ鳥だからだろうか、文は律儀に、アंक本人にコアメダルを渡しに来たのだ。

文は暫く「うーん」と考えた後、黒い翼を広げ飛び立った。

「他のグリードさん達に取材がてら、探してみますか」

博麗神社を飛び出したアंक（腕）は、手首から先をぐったり垂らし、空を飛んでいた。

晴天の空とは逆に、アंकの心情は暗かった。

と言うのも、愚痴を聞いて貰うため、同じく不憫な力ザリの所に行っただが――

「「革醒『トランザムライ――』」

「させるかあああああああつ！！」

紅魔館の外で、フランとガメル人間態がチルノとの遊びで危険なネタを使用しようとしたため、カザリのカザリサイクロン（仮）が吹き荒れる。

今日のツツコミ（カザリ）も平常運行のようだ。

門前では、「騒がしいわね」と呟くパチュリーと笑うマリサと呆れるアリス、微笑むメズール人間態がパラソルの下でティータイム中。

ぶっちゃけドンパчыってそばでのお茶会はカオス（混沌）だ。巻き込まれたくないので近付くのを止めた。

……別に技を邪魔されフランとガメルに落とされたカザリが、魔

法使い達やその従者の小悪魔と人形（蓬莱と上海）に、なんやかんやで心配されてるのを見て、「リア充爆発しろっ！！」と思った訳ではない。

次にウヴァの所に向かったが……。

「——夏ももう少しで終わりだな、親父」

「そうだなあ、あともう少しで秋……あ、冬になる前にビニール掛けてくれよ旦那」

「まだ先の話だろ？ それに今年はまだ日が強いからな」

……麦わら帽子を被り手拭いを首に巻いたウヴァ（グリード態）が畑の手入れをしながら、くわえタバコに髭の生えた人面大根と話していた……。

——何アレ……？

——大根。大根なのか……？

——タバコ吸ってるし……髭生えてるし……あと顔濃いし……。

アंकの頭の中（腕だけだけど）を思った事が駆け巡ったが……
関わりたくないのですそのまま帰った……。

と、言う風に長い付き合いの仲間は当てに出来ず、項垂れながら飛んでいた。

そんなアंकを、姿を隠し見ているモノがいた。

サニーミルク、スターサファイア、ルナチャイルドの悪戯三妖精である。以前から腕だけの存在であるアंकに悪戯しようと、今日決行するつもりなのだ。

三妖精は能力で姿を隠し、声も消しているため、アंकは気付いていない。

三妖精が持っているバケツには一杯の石が入っていた。

（準備はいい？）

（いつでもいいわよ）

（それじゃ、せーので）

（（（せーの！）））

掛け声を合わせアंकの上で石の入ったバケツをひっくり返す。当然、重力に従い石はアंकに降り注いだ。

『なっ！？ 急に石が……だああああああっ！？』

「「「やっ たー！」「」」

降り注ぐ石の雨に抗えず、アंकは耐えきれず落ちていく……。

あとには、悪戯三妖精の喜びの声だけが残った。

――

『――う……うう……。ここは……？』

アंकが目を覚めたのは、どこかの洞窟。本来なら暗い洞窟内を、焚き火の光りが灯していた。

「――お、気が付いたか」

『あ？』

声を掛けられ、アंकはその方向を向く。

そこに居たのは、灰色の犬耳と尻尾、紺色の袴に袖のない灰色の胴着を着た男。焚き火を挟んだ向こう側にあくらをかいて座っていた。

男はアंकが聞く前に、語り始めた。

「いやー、森の中歩いてたら空から急に腕が降って来た時は驚いたぜ。しかも腕が動くんだから更に驚きだ。
にしても、腕だけなのに生きてるってスゲーな。不死系の能力持ちなのか？」

『ほつとけっ！！』

男は、ドンパチ殺り合った結果、右腕だけになったと思っているらしい。

腕だけしか復活していない事を、何気に気にしているアंकは男に怒鳴る。そして、男の素性を聞きただす。

『と言うか……お前は誰だっ!』

「俺か? 俺は……見た通りコレ」

男は少し考え、頭の耳と尻尾を動かす。

おそらく自身の種族を言っているのだろうが、アंकにしたらふざけているようにしか見えない。なので、再び怒鳴った。

『ふざけるなっ! そんなんで分かるかっ!』

「それもそうか。ワリイワリイ。——俺は犬達イヌタチコジユウロウ小十郎、山犬の妖獣だ」

と、改めて名乗る男——小十郎。

「それで、ここは俺が居座ってる洞窟だ」

『そんな事は聞いてない。で、何で俺を助けた……?』

「うん。何となく?」

『はあっ!?!』

いくら目の前に落ちてきたとは言え、助ける理由はない。メダル目当てかとも思ったが……目の前の男（妖獣）は何の裏もない顔でそう言ったのだ。

予想外の返答にアंकは驚くが、小十郎はそんなアंकを気にせず……尻尾の中から鍋を取り出した。

「ま、いいじゃねえか。それよりおでん食おうぜおでん」

『おいちよつと待てっ！ そのおでん鍋、尻尾のどこに仕舞ってたっ！？ 明らかに尻尾より鍋の方がデカいだろうっ！？ あと何人分だコレエエエエエエエッ！？』

「え？ １０人分だけど」

『サラッと言うなああああああつ！！』

そんなこんなで翌日。

結局、アंकは小十郎の家（洞窟）で一夜を過ごした。

そして今は……。

『——何で俺がキノコ狩りをしなきゃならないんだ!?!』

「ほらアंक、喋ってないで手を動かせ。あ、腕は動いてるか」

『うるせえっ！ それに俺はアंकだっ!!!』

そう、小十郎の用事で、森（not魔法の森）にキノコ狩りを手伝わされていた。

『たくっ、何で俺が……』

「世の中ギブ&テイクだ。俺はタダじゃ晩飯と寝床を提供しないぜ……?」

『クソっ……!』

と言う風に、アंकが文句を言えば理論武装と威圧で潰され、手伝わざるおえない状況だった。

アंकは近くの木の根本にあったキノコをむしり、それを小十郎の下に持って行く。

『おい！　コレでいいか！？』

「あ、コレ毒キノコ」

『なっ！　ならコレはっ！？』

「コレも毒キノコだなあ」

『コレはどうだああーっ！！』

「ドクツルタケ、シロタマゴテングタケ、フクロツルタケ、ニセクロハツ……。致命的な毒キノコだな、全部」

しかし、テキトーにむしったキノコは毒キノコ……。次々とその辺のキノコをむしっては、小十郎に見せるも全てが毒キノコと言う、ある意味お約束的な展開。

これには最初やる気の無かったアंकも意地になり、『うがああっ！！』と叫んで森の奥へと飛んで行く。

『クソっ！　毒のないキノコはどこだあああああああっ！！』

「あ、おいっ！ ……行っちゃった。大丈夫かな、こちら辺、熊が出るのに……」

そして、勢いよく飛び出したアंकであつたが……。

『だあああああああつ！！』

「グガアアアアアアアツ！！」

小十郎が呟いた言葉通り、熊——巨大ツキノワグマに追いかけられていた。

と言つのも、

勢いよく飛び出したのはいいが、毒キノコとそうでないキノコの見分け方が分からない。

←
『うがー！』とヤケ起こして石を投げる。

←
「グマ？」と近くにいたツキノワグマに当たる。顔面に。

←
現在に至る。

と言っわけだ。

アंकは逃走を確実の物とするため、石を拾いツキノワグマに向け石を投げる。

石は真っ直ぐ進み巨大ツキノワグマの額の真ん中に命中……怒りと言っ火に、更に油を注いだ。

『食らえっ！』

「グッ！？ ……グマアアアアアアッ！！」

『余計に怒ったああっ！！』

物を投げると刺激して余計に追いかけて来ますので、物を投げるのは止めましょう。

『くっ！ アレはっ！』

アंकは逃走先に背の高いガメルが登っても大丈夫そうな太い木を発見。大急ぎで登る（そもそも飛んでいるが）。

『ふう、ここまで来れば……』

「グマガアアアアアアアツ！！」

『登って来たー！？』

熊は木登りも得意です。

アंकは木を飛び降り、逃走を再開する。

当然、ツキノワグマも木を降り追いかける。

『どうすれば……は！ 所謂言えば、熊が相手の時を聞いたな……。死んだフリッ！』

と、地面に落ち死んだフリを結構するアंक。しかし――

熊から逃げるために死んだフリをする、は迷信です。熊は死ん

だ動物も食べますので止めましょう。

「グマグマグマアアアアッ!!」

『あほうどりっ!?!』

ツキノワグマに殴られ、セルメダルを溢しながら吹き飛ばすアンク。木にぶつかり、セルメダルを溢して地面に落ちた。

そんなアンクにトドメを刺そうと、ツキノワグマがゆっくり近づく。

——ここまでか……。

アンクは来る衝撃を覚悟し、ツキノワグマが右前足を振り下ろした、その時だ。

「——よう、大丈夫かアンコ」

その声が聞こえ、アンクは見た。

小十郎が、アンクの盾となりツキノワグマの一撃を受けていた。ツキノワグマの前足の爪が当たったのか、額からは血が流れている。

『お前……！』

「下がってなアンコ。……巻き込まれるぞ……！」

アंकの言葉を遮りそう言うと、小十郎の雰囲気は一転、“殺気”を含んだ物へと変わる。

ツキノワグマはその殺気を感じてか、後ろ足二本で立ち上がり、吠え、前足を振るった。

本能で感じたのだろう、殺らなきゃ殺られる、と……。

しかし、先に攻撃を受けたのは、ツキノワグマの方だった。

「——数え貫手っ！ 四、三、二、一つ……！」

小十郎の貫手、最初は四本の指で放ち、続いて左手で二本、右手で二本と左右の手で交互に、数を減らして放つ。

左右合計四回の貫手は、全てツキノワグマの体を貫く。しかし、攻撃は終わらない。

息も絶え絶えなツキノワグマを、小十郎は担ぎ上げ、地面に向かって叩きつけるようにし、その脳天に蹴りを叩き込んだ。

「脳天地獄蹴りっ!!」

トゴオツ! と鈍い音が響く。

その一撃がトドメとなり、ツキノワグマは息を引き取る……。

だが、小十郎は地面に倒れた息のないツキノワグマに馬乗りになると、貫手で再び攻撃し始めた。

これには呆然としていたアंकも驚き、止めようとする。

『……お、おい! もう死んでるぞっ!』

「……ッ!」

小十郎はアंकの声に反応し、その方向を見る、と、今度はアंकに殺気が向けられた。

アंकは身を強張らせる。すると、相手がアंकと気付いたのか、小十郎は一定間隔で息を吐き、最後に深く息を吐いた。

「フツ、フツ、フツ、フツ。フー……。……おうアंक、ケガはねえか?」

呼吸が終わった時には、最初の小十郎に戻っていた。……顔や体、

両手には返り血がベツトリ付いていたが。

「うーん、“また”殺っちまったなあ。俺とアンコだけじゃ食い切れねえし、人里には前に入れたばかりだし……そうだ、女将さんの所に持っていくか！」

おいアンコ！ 今晚は俺の奢りで飲みに行こうぜ！」

と、返り血ベツトリな笑顔で言う小十郎。

アンクは“アンコ”と呼ばれているのにもシッコまず、こう思った――

――グリードって、何てちっばけな存在なんだろう……。

その夜、アंकと小十郎（返り血は洗い落とした）が熊肉を持って来たのは【夜雀食堂】。

女将のミスティア・ローレライと、朱鷺子の二人が営業している店である。

その夜雀食堂のカウンター席で、アंकと小十郎、射命丸 文と姫海堂 はたて、犬走 椋と。夜雀食堂は鳥妖怪（＋山犬と白狼天狗）で貸し切り状態であった。

既に酒が入り、酔っぱらったアंकは、今まで溜めていた愚痴を漏らす…。

『畜生っ！ 人が腕だけなのをバカにしゃがって……。しかも飯に鳥肉料理出すとかどういう了見だゴラアッ！？』

「そうですよねっ！ 私も山の方の神社に取材に行った時、私の目の前で狩った鳥捌こうなんて会話するんですよっ！？ あのニート神二人っ！！」

「うっわ、それキツッ」

「うう…。幽々子さん、来る度に私達を見て鳥肉を注文するんですよ…。うちが鳥を扱ってないのを知ってて……」

「…………（コクコク）」

更には酒の入った文まで愚痴りだし、はたては同意。アंकと文の愚痴（魂の叫び）に感化され、ミスティアも呟くように愚痴り、朱鷺子が震えながら頷く。

そんな鳥妖怪の会話を尻目に、白狼天狗と山犬の妖獣は熊肉料理を食べながら、それぞれ飲んでいた。

「大変ですねえ、鳥型の方々は……」

「知ってるか、椀。犬って食えるだぞ？」

「きゃいんっ！？　ってっ、私は犬じゃなくて白狼天狗ですっ！！」

「何で怒ってんだ？　……結構クセあったなあー」

「コジュ兄い食べたのっ！？　……じゃなくて、小十郎さん食べたんですかっ！？」

小十郎のブラックトークに、椀は思わず昔の呼び方が出てしまう。

余談だが、小十郎は昔から妖怪の山に出入りしており、椀との関係はギャルゲーよろしくな“近所に住む兄妹のような幼馴染み”である。

このような関係の場合、妹の方が兄の方に好意を持っているものだが……。こうして会話している間にも、椀の尻尾は思いつきり振られていた。

そんな中、文が「あ！」と言いスカートのポケットからある物を取り出した。

コンドル・コア、アंकのコアメダルだ。

「忘れてました。アंकさん、コレどうぞ」

『こ、コレは……！ 遂に見付けた、俺のコアだっ……！』

文からコンドル・コアメダルを受け取り、オーズ本編のタ。。ドル回の時のように喜ぶアंक。……腕だけが。

小十郎達も、何だかよく分からないが「おー！」と言って合わせ
ておく。

コンドル・コアを取り込む。するとアंकは、不気味な笑いをし
始めた。

『イへへへ……。コアメダルが二枚あれば……。今までバカにされ
た借りを返してやるぜえっ……！』

「おお、それは何だか面白そうな。アंकさん、是非取材させてく
ださい！」

「あ、あたしも！」

「あらはたて。引き籠もりのあんたが取材を申し出るなんて珍しい」
「うっさいわねっ！ 目の前に面白そうなネタがあるのよ？ 取材
しない手はないでしょ！」

「いいぜえいいぜえ、好きなだけ取材しろっ！ 明日、鳥肉を食っ
た奴らに天罰が下るんだからなあっ！！ アッハッハッハッハッ！
」！」

アंक、酒の力もあり大暴走。文とはたても、新聞のネタにと一
枚噛む様子。

ミスティアと朱鷺子は、古傷に触れたのかガクガク震えながら泣
いている……。

そんな、一種の混沌空間カオスワールドを見ながら、

——あ、面白そう♪

——明日は家で大人しくしよう…。

暇だから見に行こうとする山犬と、巻き込まれたくないから近付
くのは止めようと思う白狼天狗が居たそうな……。

C
o
u
n
t
1
2
に
続
く

Count 11『家出と山犬と鳥暴走』（後書き）

家出↓アंकが

山犬↓犬達 小十郎

鳥暴走↓酒の勢いで

な今回。

ガメルとフランがやろうとしたスペルカードは、革醒『トランザムライザー』。元ネタはガメルの擬態元です。

フランの禁忌『レーヴァンティン』にガメルの重力操作を加えた物……。アレ？ 危険？

ウヴァさんは…色々と変わりました（笑）

新キャラ、犬達 小十郎。今回彼が使った技は少年サンデー連載の『史上最強の弟子 ケンイチ』のあるキャラの技。分かる人いるかな？

では次回。

C o u n t 1 2 『 脅かしと鳥ヤミーと無計画』（前書き）

東方欲望録、前回までの三つの出来事！

一つ！ あまりの雑な扱いに耐えかねたアंकは、博麗神社を飛び出す。

二つ！ アंकは山犬の妖獣、犬達小十狼と出会う。

三つ！ アंकはコンドル・コアメダルを取り戻し、何かを企み始めた。

C o u n t T h e M e d a l s .

オーズとグリードが持つメダルの数は？

オーズ

- ・ ニンゲン（擬似コアメダル）× 1
- ・ タカ × 1
- ・ クワガタ × 1
- ・ バッタ × 1
- ・ トラ × 1
- ・ チーター × 1
- ・ サイ × 1
- ・ ゴリラ × 1
- ・ ゾウ × 1
- ・ ウナギ × 1

アंक

・タカ×1

・コンドル×1

ウヴァ

・クワガタ×1

・カマキリ×2

・バッタ×2

カザリ

・ライオン×2

・トラ×2

ガメル

・サイ×2

・ゴリラ×1

・ゾウ×2

メズール

・シャチ×2

・ウナギ×1

・タコ×2

「変な妖怪？」

「ああ」

アंकが家出してから四日が経った日、博麗神社に人里で寺子屋を開いている上白沢 慧音が訪ねて来た。

霊夢は茶を飲みながら聞き返す。

「何よ変な妖怪って。妖怪に変じゃないのなんているかしら」

「言いたい事は分かるんだが……。とにかく、見た目も行動も変な妖怪なんだ」

霊夢のある意味その通りな言葉に若干同意しつつ、慧音は説明を始める。

その妖怪が出たのは昨日の事。近くに山菜採りをしに行った人里の人間がその帰りの途中、突然現れたそうだ。

突然現れた妖怪に人里の人間は大声を上げて驚いた。するとその

妖怪は、人里の人間の反応に満足したのか去って行ったそうだ……。

それを聞いて、霊夢は首を傾けた。

「……………それだけ？」

「だから言っただろ、変な妖怪だと」

確かに、驚かすだけなどなんのメリットがあるのか。

そんな事するのは、悪戯好きの妖精くらいなものだ。

「それに見た目も変わっていて……。全身包帯のような物で覆ったような姿で、動きは遅い。“最初はそうだった”」

慧音の意味深げな言い方に、霊夢は眉を顰^{ひそ}めた。

「“最初はそうだった”？　どう言う意味よ」

「そのままの意味だ。最初の目撃の後も、手当たり次第にその妖怪は驚かしてな。さすがに見過ごせなくて妹紅と二人で話をつけに行っただ……。」

人里周辺で焼き鳥を営んでいる、藤原 妹紅と共に道を歩いていると、人里から少し離れた所でその妖怪は出たそうだった。

慧音は話し合いをしようとしたが、その妖怪は知性がないらしく話が通じなく慧音と妹紅を驚かそうとするばかり。

痺れを切らした妹紅が、実力行使で退かせようと炎を放った。

しかし、妖怪は妹紅の攻撃を受けて一度は倒れるが直ぐに立ち上がる。

本気ではないとは言え、まったくの無傷である事に慧音も妹紅も“驚いた”。

すると妖怪は、強烈な光りを発すると赤い体毛の鳥のような人型の妖怪に変わった。

更に驚く慧音と妹紅。鳥のような妖怪は、二人の反応を見て……。

『驚いた？ 驚いた！？ ハッハー！！』

そう言って飛び去ったそうだった……。

慧音の話を聞いた霊夢は一言。

「本当に変わった妖怪ね。口ぶりからして、人を脅かすのが目的みたいだけど」

「だろ？ 私と妹紅では、何とも出来そうになさそうなくてな。それで君“達”博麗の巫女“姉妹”に相談しに来たんだ」

「なるほどね…… っては？ 姉妹って誰よ」

慧音の言葉に納得しかけた所で、聞き捨て出来ない単語があったので霊夢は聞き返す。

博麗神社に来る前はとうだったかもう忘れたが、少なくとも博麗神社に来た以降は自分は一人っ子の筈……。勝手に住み着いてる萃香は見た目完全に鬼なので姉妹に見間違える筈がない。と言う事は後一人……。

「何を言っているんだ。君（霊夢）と、彼女（名無）だろ」

案の定、名無の事であった。

しかも、名無の事を完全に女性だと思っている。

確かに名無の見た目は完全に霊夢と同じなため、間違えるかも知れないが……。

「……あのさ、私と霊夢は姉妹じゃないし、それに名無は一応男よ？」

「はっはっはっ、霊夢も面白い冗談を言うな。あんなに瓜二つなのに姉妹じゃない上男な訳ないだろ」

一応、訂正する霊夢であつたが冗談と取り笑う慧音。

まあ、女と思われている本人が気にしてないので放置しておく事にする。

「はあ……。ま、分かったわ。でも妖怪退治の依頼って事で受けるから」

「ああ、構わない。報酬もしつかり用意する。
では頼んだぞ」

慧音はそのまま、居間から裏庭に出て人里に向け飛び立つ。

それを見送った霊夢は、ジトーっと目だけ動かし居間の隅に向ける。

そこでは、霊夢と同じ巫女服だが上半身下半身が黄色・緑で色分けられた巫女服を着て、以前は着けていなかった赤いリボンを着けた——所謂タトバカラーの名無が何やらブツブツ呟いていた。

「——プチモン…コロモン…アグモン…グレイモン…メタルグレイモン…ウォーグレイモン……」

「アンタ、何やってんのよ……」

霊夢はジトーっとした目のまま、タトバ色の名無に声を掛けた。
巫女服にはもうツツコまない。

慧音がいた時から、名無はずっとこんな調子で居間の隅にいたのだ。

霊夢の声に反応し、名無は笑顔で振り返った。

「霊夢！ 君は知っているかい？ デジタルモンスター、縮めてデジモンと言う生き物の事を！

彼らは六段階に進化し、更にはアーマー進化、ジョグレス進化、カードスラッシュ、スピリットエヴォリション、デジソウル、デジクロスなどの方法によっても」

「あーはいはい。ちゃっちゃと行くわよー」

デジモンのうんちくを言う名無の首根っこを掴み、霊夢は浮き上がり人里を目指す。

どこで仕入れたか知らないが、未知な物を見つけて名無の悪い癖が出たようだ。

霊夢はデジモン情報を右から左に聞き流しながら、タメ息を吐くのであった……。

霊夢（と名無）が人里の近くまで来ると、人里の入口の前に見知った顔を見つけたので降りる。

人間態の、カザリとメズールである。

「今日は二人なのね、珍しい」

「あ、霊夢。……名無はどうしたの？」

「気にしない。いつもの病気よ」

霊夢が声を掛けると、最初にカザリが反応した。

カザリは霊夢が片手に掴む名無を見るが、霊夢はシレッと返す。

「で、あんた達は どうして人里に？」

「僕は買い出し。マリサ、全然日用品買わないから……。あと気になる事があつたからかな」

「私はチルノが居なくて、ガメルは地底に遊びに行つて暇だから力ザリをからかうために」

「そうそう。……つてメズール今聞き捨てならない事言つたよねっ！？」

「それで貴女……とオーズの娘は？」

「娘つてあんたは知ってるでしょ。」

私は慧音……つて知ってるかしら。人里で寺子屋やってる奴に、妖怪退治の依頼を受けてね」

「お願いだから無視しないでっ！？」

しかし力ザリの叫びも虚しく、霊夢とメズールは無視して会話をしながら人里に入つて行く。

力ザリはorzな状態になりながら後を着いて行つた。

なお、名無は引きずられたままである。

人里——正式名称・人間の里。幻想郷に住む殆どの人間が集まっている場所だ。

博麗大結界で外と切り離されて以来、明治時代の前後の状態が残っている……わけでもなく、独自の発展をしており住民達の服装は和服が中心だが建物は和式洋式の物が混じって建っている。

人間が中心に住んでいるが、妖怪（獣人）も住んでおり幽香も買い物に來たり妖怪用の店があったりと、仲良くと言う程ではないが、妖怪との付き合いもそれなりにある。

住民達が（タトバ色の巫女のせいで）注目する中、霊夢達が歩いていると、声を掛けられた。

「何だ、お前達も来ていたのか」

声を掛けてきたのは、幽香の所に居候しているウヴァだ。

怪人態の。

大事な事なのでもう一度言うが、

人里の中で、怪人態のウヴァが、声を掛けてきたのだ。

その瞬間、カザリのフライングクロスチョップが飛んだ。

「トウッ！ー！」

「ぐお！ カザリ、何をする」

「カザリ、何をする、じゃないよっ！ 何で普通に怪人態？ 里の人達ビツクリしてるよ！？ 穏便に暮らしたいから出来る限り人の姿で暮らそうって話したじゃんっ！！」

「そうなのか？」

「覚えてろよ虫頭っ！！」

ああもう、こっち来い！」

と、カザリ（人間態）はウヴァ（怪人態）を引っ張って何処かに連れて行く。

それを霊夢とメズールは傍観していた。

数分後、カザリが見慣れない人間の男を連れて戻って来た。

茶髪のオールバックと言う変わった髪型に、凛々しい顔立ち。服装は緑の繋ぎ着ているが上半身部分は袖を腰に結んでおり、上はラニンングシャツ。

シャツの上からでも分かる鍛えられ引き締まった肉体に、程よく焼けた小麦色の肌。しかし汗臭くはなく、健康的で力強い印象を受ける。

「……やっぱり元に戻っていいか？ 落ち着かん」

「駄目に決まってるだろうが虫頭っ!!」

と、グリード態になろうとした男をカザリがド突く。

そう、この男はウヴァが人間に擬態した姿だ。

「むう……」と唸るウヴァ人間態。

人間の姿が落ち着かないようで、それをメズールは「あらあら」と笑う。

その時だ、

――うわあああああああつ!!――

悲鳴が聞こえてきた。

それを聞いた霊夢はいの一番に駆け出した。

“何か”を感じたカザリ、メズール、ウヴァも続く。

なお名無は……霊夢に掴まれ、引きずられたままである。

悲鳴が聞こえたのは人里の入口。

霊夢達が来た時、そこでは籠を背負った男が尻餅を付き、その男の前で燥ぐ鳥のような妖怪——オウムヤミー（赤）がいた。

『驚いた？ 驚いた！？』

「赤い鳥の妖怪……。慧音が言っていたのはアレね」

「妖怪って言うか、ヤミーだけどね」

オウムヤミーの言動と容姿から、慧音の言っていた妖怪だと確信する霊夢。

対し、カザリはボソッと、相手の正体を呟く。

それを霊夢が聞き逃す筈もなく……。

「……ヤミーって、アレよね。鍊矢やあんた達が作る」

「ええそうよ。アレはアंकのヤミーね……。ヤミー作れたのね」

「セルメダル、結構溜まっているみたいだな」

メズールはアंकがヤミーを作れた事に軽く驚き、ウヴァはセルメダルの溜まり具合を見る。

オウムヤミーは本当に驚かせるのが目的（親の欲望）なのか、男の反応に満足して飛び去ろうとする。

それを霊夢が見過ごす筈がない。

「逃がすか久々の依頼金っ！！」

「金目的っ！？」

カザリのツツコミを他所に、霊夢は数枚の札と針を投擲する。

飛ばうとしていたオウムヤミーはそれに反応し、口から炎を吹き出しそれらを焼き払う。

「あ！ なーんかやっぱり、普通の妖怪と違うのよね……。
名無！ グリッドとかヤミーとかはあんたの担当なんだから何とかしなさい！」

「待ってくれ。あともう少しでデジモンの閲覧が……」

「さっさと行きなさいっ!!」

ヤミーが相手と言う事で、霊夢はまだ閲覧中の名無の尻を叩く。

まあ、名無はオーズなのであなたがち間違いではないが。

名無はオーズドライバーを装着、メダルを3枚バツクルに入れオースキヤナーで読み込んだ。

「変身！」

《サイ！　ウナギ！　バツタ！》

オーズ・サウバに変身、オウムヤミーと対峙する。

サウバとなったオーズを見て、カザリは吠えた。

「サイ、ウナギ、バツタ……？　タカとトラ本気でデイスる気かあああああああっ!!」

「嫌いわよカザリ」

嫌いカザリはメズールが黙らせ、オーズSUBはオウムヤミーに

接近、^{バタレック}足を使い攻撃する。

「フツ、ハアツ！」

『ぐえ！？…………カアアツ！！』

蹴り上げ、ミドルキックを胸の真ん中に喰らい下がるオウムヤミーだが、火球を吐き出し反撃する。

オーズSUBは軽快なフットワークで火球を避け、距離を取る。そして、再び放たれた火球をバタレックの力を使い、跳躍して避け、オウムヤミーを飛び越す。

オウムヤミーを飛び越し逆さまになったオーズSUBは、ウナギウィップでオウムヤミーを背後から打ち付けた。

「ハアツ！！！」

『ギアアアツ！？く、クソおつ！！』

背後から電撃ムチを喰らい、セルメダルを散らして前のめりに倒れたオウムヤミーは、自分が得意とする空に飛び上がる。

しかし、能力で既に鳥系ヤミーの項目を閲覧しているオーズSUBに通じる筈もなく、

「ハッ！」

両手に持ったウナギウィップを振るい、空に飛んだオウムヤミーを拘束。バツタレッグの能力で高々と跳び上がり……サイヘッドによる頭突きを叩き込んだ。

強烈な一撃を喰らい、セルメダルを散らして落下するオウムヤミー。

オーズSUBは着地すると、ウナギ・コアとバツタ・コアを抜き取り代わりにゴリラ・コアとゾウ・コアを入れ、スキャナーで読み込む。

《サイ！ ゴリラ！ ゾウ！ サゴゾ♪……サゴゾ！》

「——ハアッ！」

「ってゾオオオオオオオウツ！？」

サゴゾコンボに変身したオーズに対し、カザリは絶叫……。

ゾウ・コアメダルは一度ガメルに返却したが、大量のお菓子で買収していたなど知る筈もない。

最初から知らない霊夢と気に留めていなかったウヴァはともかく、メズールも「いつの間に……」と呟く中、カザリの叫びをスルーしてオーズSCはドラミングを始める。

すると、サゴーズコンボの固有能力・重力操作で地面に落下したオウムヤミーは、上に上げられては落とされ、上げられては落とされを繰り返しやられ、相当数のセルメダルを削られる。

「オオオ！ オオオ！ オオオオオオオオツ！！」

『ギャツ！ グギャツ！ ギャアアアアアツ！？』

「フンツ！！」

更に、上に上げた所でゴリラアームに装備されたゴリバゴーンを発射して攻撃する【バゴーンプレッシャー】を使い、更に上に撃ち上げた。

「よし、これなら人里に被害は出ない」

と、オーズSCはメダジャガンを持ち、メダジャガンの上部後ろのメダル投入口に3枚——サイ・ゴリラ・ゾウ——のセルメダルを入れ、投入口の少し前にあるレバーを押し込む。

投入された3枚のセルメダルが銃身（クリアパーツで見える部分）に移動し、オーズSCはオースキヤナーに銃身部を滑らせセルメダル3枚を読み込み、空に撃ち上がったオウムヤミーに銃口を向けた。

《トリプル！ スキャニングチャージ》

そして、オーズSCは引き金を引く。

撃ち出された白いエネルギー弾は一直線にオウムヤミーに飛び、貫通。それだけに止まらず、エネルギー弾はオウムヤミーの向こうの空に“当たり”、当たった部分は螺旋状に凹みそこを中心に周りの空にヒビが走った。

【オーズブラスト】が直撃し、オウムヤミーは爆発、大量のセルメダルに還元され地面に降り注ぐ。その後に、凹みヒビが走った空は何事もなかったように元の状態に戻った。

「フム……。オーズブラスト、威力はあるが一直線にしか飛ばないのが難点だな。命中範囲はオーズバッシュが上か」

「あんた……。何危ない攻撃してんのよ。前の剣と言い、結界に影響出るんだけど」

「問題ない。そのためにヤミーを安全な空中に上げてから使ったんだ」

「そう言う意味じゃ……。もういいわ……」

メダジャガンを眺め、オーズブラストの感想を漏らすオーズSC。オーズブラスト・バッシュは結界に僅かながら影響を出すため咎める霊夢だが、^{ぬか}糠に釘なので諦めた。

事実、オーズSC（名無）はオーズブラストで被害が人里に出ないよう体内のセルメダルを消費するコンボを使ってヤミーを空中に上げたのだ。人里に被害はない。

「さて…」とオーズSCは散らばったセルメダルを拾おうとする。

——その時、オーズSCに目掛け巨大な岩が降ってきた。

「ッ！？ フッ！！」

予想外の事に一瞬たじろぐオーズSCだが、今のサゴゾコンボは力に特化した重量コンボ。力を込めたパンチで、巨大な岩でも容易に破壊出来る。

しかしオーズSC、霊夢、カザリ達の視線が逸れた所で、複数の赤い影がセルメダルをかつさらって行った。

赤い影の正体は、タカカンドロイドだ。

《タカー》

《タカー》

《タカー》

「あっ！」

一体1枚のセルメダルをくわえ、飛び去るタカカンドロイド。かなりの数を持って行かれ、残ったセルメダルでは、コンボに消費した分を回復させる程度しかない。

今から追おうにも、タカカンドロイドはもう見えないため無理だ。

「ちょっと、メダル持ってたわよ!?」

「分かってる。誰がやったかは、検討が付いている」

霊夢にそう返し、オーズSCはドライバーからサイ・コアを取り別のメダルを入れる。

そう、検討は付いている。ヤミーが倒された時にタイミングよく現れたカンドロイド。

つまり戦いの一部始終を見ていたか、ヤミーの消失が分かるモノ。

そしてカンドロイドが使えるモノ。ライドベンダーは河童脅威の技術で量産が完了しており、既に幻想郷のあちこちにあるが、自販機を知らない、セルメダルを持たないモノには使えない。

以上から、相手は一人に絞られる。

「それは後でいい。今は、ヤミーの親を捕まえるか」

《クワガタ！ ゴリラ！ ゾウ！》

「ハアッ！」

ガタゴリゾに変わったオーズは、クワガタヘッドのクワガタホーンから緑色の雷撃を放ち近くの草むらに落とす。

「——ひぎゃっ!？」

すると草むらから悲鳴が聞こえ、オーズGGZは草むらに近付き、悲鳴の正体を引っ張り出した。

悲鳴の正体は、一つ目と長い舌がある古傘を持った水色髪の少女
……忘れられた傘の妖怪（付喪神）の多々良小傘^{タタラコガサ}であった。

雷撃は弱設定で放ったため、軽く感電した程度だが所々焦げ、目を回して気絶している。

「……確かにヤミーの親だね。でもよくいるのが分かったね」

「鳥系ヤミーの特性上、近くにいるのは分かっていた。それで戦闘中、草むらで何かがいるのが分かったからもしかしてと思ってね」

カザリに説明しながら、オーズGGZは変身を解く。

鳥系ヤミーは、親を巣となる特定の場所（思い入れのある場所）に閉じ込め、エサ（欲望）を届けると言う親鳥のような行動をする。だが今回のオウムヤミーは、人を驚かすだけで何かを運ぶ様子はなかった。

つまり、驚かした証拠となる驚いた表情か悲鳴が見える・聞こえる範囲に親がいると言う事だ。

そしてサイヘッド、ゾウレグは組み合わせる事でソナーのような働きをし、地上・地中にある物体を察知出来るため、草むらに隠れる小傘を発見出来たのだ。

おそらく巣となったのは小傘が持ち歩いている傘の下範囲。これなら、小傘が自由に動いても巣から出た事にならない。

「多々良 小傘は人間が妖怪を見ても驚かない事を気にしている。だから――」

「人間を驚かしたい欲望」になった。と言う訳ね」

メズールが名無の言葉を先読みし、予想していた言葉を言う。

名無はその通りだ、と頷く。

しかし何であれ、人間を驚かしていた実行犯のヤミーをセルメダルに還元し、ヤミーの親の少女を捕まえた事で、霊夢・名無が受け

た依頼は完了した事になる。

——後は上白沢 慧音に任せるか……。

と、騒ぎを聞きつけてこちらに来る慧音を遠目に見ながら、名無は思っていた。

所変わって、まだ日が高いのでまだ閉まっている夜雀食堂前。

一体1枚のセルメダルをくわえた複数のタカカンドロイドが飛来し、地面にセルメダルを置いて夜雀食堂の前にあるライドベンダーの中に缶モードで自動収納される。

そうして出来上がったセルメダルの山の前には、二人のモノがいた。

その内の一人、犬達 小十狼がもう一人に話し掛ける。

「結構集まったなあ。そうだろ？」

「——ああ」

そしてもう一人。赤いド派手な服——1000回記念時に別世界のアンクが着ていた大首領の服——を着た金髪となり、右腕がアンクになった朱鷺子……アンクが憑依した^{アンク}A朱鷺子が右腕でセルメダルを鷲掴みする。

「聞いた通り、ここ（幻想郷）の連中は命の危険がなければ特に騒ごうとしない。

それにここに来てから、カザリ達はヤミーを察知するのが鈍くなつたみたいだしなあ……。フフ、セルメダルが稼ぎやすい。フハハハハハハッ……！」

「楽しそうだなアンコ。でもよ、コレ（セルメダル）を集めて何をするつもりなんだよ？」

「ハハッ……」

高笑いするA朱鷺子だが、小十狼の質問に笑いが止まり固まる。

すると夜雀食堂の扉が開いて、ミスティア、文とはたてが顔を出した。

「アंकさん小十郎さん、お茶でもどうですか？ お菓子にどら焼きもありますよ」

「「お先頂いてまーす」「」

「「食べるっ！」「」

と、セルメダルの山を放置して、A朱鷺子と小十狼は夜雀食堂の中に入って行くのであった。

C o u n t 1 3 に 続 く

C o u n t 1 2 『 脅かしと鳥ヤミーと無計画』（後書き）

C o u n t 1 2、如何だったでしょうか？

> 男な訳ないだろb y 慧音 オーズの娘b y メズール

名無は霊夢や錬矢以外には、霊夢の双子の妹だと思われてます。見た目完全に霊夢ですし、男なら巫女服は着ませんから（笑）。メズールは男だと知っていますが、一緒に住むチルノが完全に女だと思っっているため自信が持てなくなってます。

まあ、名無本人が否定しないので誤解が解ける日は来ないかと……。

> デジモンについて検索中

鳴神 ソラさんの小説でうちのフリーダムグリード達が出た際であった言葉が原因（笑）。鳴神 ソラさん、遅くなりましたがありがとうございました。

> 漸く登場ウヴァさん人間態

漸く出せました。畑弄りをしているため服装は繋ぎです。

> 暴走、しかし無計画なアंकちゃん

ぶっちゃけ酒に酔ったの行動のため、セルメダルを集めてからの事を考えてません。

アंकが暴走してボケに回っているためツツコミはカザリ一人。…
…死んだかなこれ……。…。

それでは次回。

Count 13 『誕生ライダーと分身昆虫と完全姉妹化』

「――よっ」

地面を蹴り、自分に向かって飛んで来た火球を跳んで避ける。

そして空中で体を捻り、横に一回転。回転の勢いを利用し、右手に持った当たり剣、スイカソードを合体させた剣を振り下ろし、敵――青い体毛のオウムヤミーを斬る、が、袈裟に振り下ろした合体剣は肩の所で止まった。

しかししっかりダメージは通ったようで、オウムヤミーは少し怯む。その間に、ヤミーから離れ地面に着地する。

「くう」。やっぱり普通の妖怪と違って硬いなあ」

と、合体剣を肩に担ぎ、片目を閉じ、正義の味方・チルノは言う。

『クッ………！』

自分の得意な空に飛びオウムヤミー。だがしかし、飛来した弾丸により直ぐに得意ステージから撃ち落とされた。

オウムやミィを撃ち落とした、民家の屋根の上にいる少女——ブレザーの制服にミニスカート、特徴的なウサ耳、赤いバンダナ、赤い目、赤いマントの幻想郷一のガンナーの鈴仙・優曇華院・イナバは、苦笑を含めた笑みを浮かべ、下にいるチルノに言う。

「チルノ、手応えのある相手で楽しいのは分かるけど、遊びは終わり。また姐さんにドヤされるわよ？」

「あー、そりゃ勘弁」

鈴仙に言われ、チルノは苦笑する。姐さん——メイリンの拳骨はかなり痛い。

それは嫌なため、チルノは苦笑を浮かべながら左手に持った一本の剣——チョコエッジと、腰のホルダーにある三本の剣——チョコエッジとウエハースブレイドを合体剣に合体させ、一本の大剣【バスタードチルノソード】にする。

そして、両目を閉じ集中……。

「——ブレイクッ!!」

声と共に瞳を開くと、チルノの背中に六枚の氷の羽が生まれる。それは、チルノがまだ普通の妖精だった時にあった羽だ。

大剣を振る。すると当たり剣を中心に合体していた五本の剣が分離、オウムヤミーの周囲に展開浮遊する。

「奥義っ！」

チルノは飛び、当たり剣でオウムヤミーを一閃。更に先にあるスイカソードを持ち、再びオウムヤミーを一閃。

「超・？・武・神・覇・斬ッ！」

“別のチルノ達”が、チョコエッジとウエハースブレイドを一本ずつ持ち、次々とオウムヤミーを斬り、

「おお、当たりっ！！」

最後に当たり剣を持ったチルノが、真上からオウムヤミーを切り裂いた。同時に別のチルノ達——高速で動いて生まれた残像は消える。

直後、オウムヤミーは爆散、セルメダルに変換されメダルが降り注ぐ。

チルノが地面に着地すると、チルノの周囲に五本の剣が刺さり、最後に当たり剣が落ちて来る。

「フツ、あたいたら最強ね……。あだっ!？」

カッコよく決め、当たり剣をキャッチしようとしたチルノだが…
…当たり剣はチルノの頭に落ちた。

鈴仙は苦笑しながら、散らばったセルメダルを拾うのであった。

所時間が変わって夜雀食堂。

営業時間終了間際の店内で、赤いメッシュが混じった金髪を横に流し赤いド派手な大首領衣装を纏った青年は、ジョッキの中に入ったビールを仰ぎ、空になったジョッキを乱暴にカウンターに置く。

それを、隣に座っていた小十狼は軽く注意した。

「クソッ!!」

「おいおいアंक、そんな乱暴にしたら壊れるだろ？」

「煩いっ！ それに俺はアंकだっ!!」

そう、このガラの悪い青年はアंकだ。アंकが人間に擬態した姿なのだ。

前回稼いだセルメダルと、朱鷺子がもう1枚、店の外に落ちていたコンドル・コアメダルを拾いアंकに渡したため、体を構成出来るようになったのだ。

朱鷺子は空のジョッキを回収、新しいジョッキをアंकの前に置き、小十狼は女将ミスティアに酒のつまみを注文する。

アंकが苛立っている理由は今日の事、再びヤミーを作り人里に放った。しかし、人里に居合わせていたチルノと鈴仙の二人に撃破され、セルメダルも1枚も回収出来なかったからだ。

文から聞いた話だと、香霖堂で現金、又は好きな品物と交換出来たそうだが……。

「……」

「どうした？」

「……」

「何？ 前に外で本を読んで、ちょっと休憩に本を置いたら香霖堂の店主に本を持ってかれて、返して欲しいと伝えたら『コレはうちの商品だ。欲しいなら買え』と言われただ？」

「……（コク）」

「霖之助さん、拾った物は何でもお店で売るから……。でもアंकさん、よく朱鷺子ちゃんの言いたい事分かりましたね。今まで私しか分からなかったのに」

「俺、ただアankoをジッと見てるようにしか見えなかったわ……」

鳥同士のためか、意志疎通が出来るようになって二人はさて置き。

なお後日、香霖堂で“謎の”火災が起きたそうな……。

店の引き戸が開き、来客が来た。にとりだ。

「こんばんはー、コジユ居るー？」

「おう、にとり」

「お、居た。女将さん、私日本酒ね」

小十狼の存在を確認すると、にとりはミスティアに飲み物を注文して小十狼の隣に座る。

因みに、小十狼の昔馴染み達は小十狼を『コジュ』と愛称で呼ぶ。にとりは座ると、背負っていたリュックサックを下ろし中からある物を取り出し、カウンターの上に乗せる。

小十狼はそれを見て、首を傾げた。

「にとり、コレは？」

「フーン♪ 設計図を貰って漸く出来たんだよ。コレを、コジュに試して貰おうと思ってさ♪

あと、こっちも拾ったから届けにね。アンコ、パース」

「俺はアンクだっ！ …… あだっ！？」

小十狼と同じくアンコと呼ぶにとりにアンクは抗議の声を上げるが、弧を描いて投げられた物が頭に当たる。

投げられた物は、青い3枚のコアメダル……。

アンクはコアメダル3枚を見ると、次に瓶の生け簀に入れた八つ目鰻が目に入った。

すると、何かを思い付いたのか笑みを浮かべ笑い始める。

「そうだなア……。アレをやってみるか……」

「んでにとり、コレはどう使っんだ？」

「うん、コレはね——」

しかし、周りはそんなアंकをスルー。

小十狼は、にとりから渡された、バックルに透明と緑のガシャポンが付いたベルトを眺めた。

その翌日、紅魔館が一望出来る湖の岸。

そこには、名無に霊夢、普段は酒を飲んで寝ている筈の萃香。カザリ（人間態）にマリサにアリス、ウヴァ（怪人態）に幽香、メズール（人間態）とチルノと鈴仙、慧音と妹紅、勇儀とヤマメとキスメとパルスィ、さとりとこいしとお空とお燐等々、他にも今までに出たり出てなかったりする幻想郷の多くの住人達が集まっていた。

その場に居る全員が見る先、紅魔館では、ここまでの人（妖怪や妖精含む）が集まる理由が現在進行形で起こっていた。

そこでは……。

『——ギヤアオオオオオオオオッ！！』

鯨のような頭、蛇か何かの長い胴体、その胴体の左右から伸びる吸盤付きの、先が鎌になった触手……。

よく分からない、謎の生物が紅魔館に巻き付き、雄叫びを上げていた。

「……何、あれ……？」

霊夢が、漸く口を開き、この場に居る殆どが思っている事を代弁する。

そして、全員がこの場で唯一の紅魔館メンバー、メイリン・ロツクハートを見た。

視線を受けたメイリンは、濡れた体を拭きながら語り始める。

「……それが、急に湖から現れてあんな感じに……。何であんなったのかはサッパリで」

今朝、いつも通りメイリンが門番（という名の門前の掃除）をしていると、湖から急にあの生物が現れ紅魔館に巻き付いたそうだ。

メイリンは外に居たため無事だったが、あの生物が紅魔館の出入口を全て封じてしまったためレミリア達は室内に閉じ込められた状態らしい。

それで、大急ぎで助けを呼ぶべく、湖を泳いで渡って来たそう。

「あら、だったら風穴でも開けて出口を作ればいいじゃない」

と、幽香が邪悪な笑みを浮かべながら言う。

殆どが引くが、普通にスルーしているのがウヴァとリグルのダブル虫。

幽香の笑みはアレだが、言っている事は幻想郷らしい。しかし、その意見はあっさり否定された。

「それが、最初は私もブチ破ろうとしたんですけど……」

((((したんだ……)))

「柔らかそうな皮膚のわりに意外と硬くて、皮膚を破っても直ぐに再生して。どうも私じゃ無理そうで……」

と、メイリンは巨大生物に巻き付かれた紅魔館を見る。時たま、巨大生物の体の一部がビクツと震えている所を見る限り、パチュリィが魔法をブチ込んでるか、フランがスペルを放ったか、ガメルが突進をしているのか、脱出を図っているようだが突破出来ていない。

因みにレミリアは連日のストレスのため、数日前から寝込んでいる。

それでマリサが「再生出来ない威力の攻撃を撃ち込めばいい」と言えば、カザリが「紅魔館まで消し飛ぶわっ!!」とツツコミを入れる。

「……なあ、あの生物、メズールに似てないか？」

と、幽香の隣、リグルを肩車しているウヴァ（怪人態）が言う。

直後、メズールがグリードの姿になってハイヒールの一撃を顔面に浴びせるが、ウヴァは微動だにしない。

「……どういう意味かしらウヴァ？」

「そのままの意味だ。メズールに似てるだろ」

「いやそれは流石にないってウヴァ。メズールとアレを見て似てるって……」

カザリ（人間態）は苦笑しながらウヴァとメズールの間に入る、と、ウヴァの言葉の意味を理解してバツと巨大生物を見た。

頭↓鯨。

長い胴体↓鰻。

吸盤付きの触手↓タコ。

巨大生物はメズールと同じ、三種類の水棲生物で構成されていた。触手の先の鎌は分らないが、ウヴァがメズールに似ていると言ったのは、そういう事なのだ。

変な所で鋭い虫頭だ。

そして、名無が変身したオース・タカウゾが、タカアイを輝かせながらカザリが予想していた事を言う。

「フム……。あの生物の中に“4枚の”コアメダルが見える。どうやら、あの生物はメズールのコアメダルを核に構成されているようだ」

「——ってやっぱりかああああああっ!!」

カザリの絶叫が響いた。

数多くの人・妖怪・妖精が集まっている所から、少し離れた草むらから紅魔館を見る人影があった。

アंक、小十狼、文の三人である。

文は愛用のカメラを構えながら、隣にいるアंकに呼び掛けた。

「アंकさん……これはやり過ぎじゃ……」

「……………うん」

流石にアंकも、これには冷や汗を流す。

昨日、にとりから渡された3枚のコアメダルをハツ目鰻に投入、ハツ目鰻を湖に放流した。

アंकは以前から、コアメダルの可能性を考えていた。

——コアメダルを生物に入れたら、どうなるのか？

どうなるか予想出来なかったため、人・妖怪・妖精で試すわけにもいかなかったのでハツ目鰻で代用したのだが……まさかこうなるとは。

「ま、止めなかった俺にもあるし。……ちょっと手伝ってきますか」

小十狼は立ち上がり、灰色の尻尾から、にとりから渡されたベルトを取り出す。

小十狼の視線の先では、異変を解決するため湖を渡って紅魔館に近づく面々がいた。

異変解決のため、湖を渡って一旦変身を解いた名無と霊夢、カザリ、マリサ、メズール、チルノ、鈴仙、メイリン、ウヴァが紅魔館に到着した。

なおこの他の面々は……岸で解決する光景を肴に宴会を始めている。

ここまで来るまで、名無は霊夢に抱えられ、他は自力で飛行していたのだが……ウヴァだけは全力クロールで泳いで渡って来た。

異変解決メンバーは、赤い紅魔館に巻き付く、青い巨大生物——コアビーストを見上げた。

「来てはみたけど、コレ、どうしろってのよ……」

コアビーストを見上げ、霊夢は呟く。

ハッキリ言って、霊夢は強さはともかくここまで巨大な生物と戦った事がない。それに、強力な再生能力があるのなら再生が追い付かない程の手数が、必殺の一撃で倒す必要があるが、生憎ここに居るメンバーは手数で攻めるタイプではない。

かと言って一撃必殺も、一部でも残っていたらそこから再生する可能性もあるためコアビースト全体に攻撃する必要がある。しかし、紅魔館に巻き付いているコアビースト全体に一撃必殺を叩き込むという事は、紅魔館も一緒に“必殺”しかねない。というか被害を出さないようにするのは無理だ。

「中にいる妖精メイドはともかく、レミリア達がどうなるかだな。これだけデカイの相手一撃必殺を叩き込むとなると、手加減出来ないし」

「瓦礫に押し潰されて、という可能性もあるしね……」

と、マリサと鈴仙は腕を組み悩む。他のメンバーも同じだ。

メダジャリバー・メダジャガンならコアビーストだけを狙えるかも知れないが……。

「霊夢」

「駄目よ。あの剣と銃、下手したら博麗大結界まで壊すかも知れないんだから」

と、幻想郷を守る巫女からNG。

「はあ。こういう時、紫がスキマでレミリア達を外に連れ出せればいいのに」

霊夢は愚痴る。

紫は鍊矢と外の世界に用事と、数日前から居ないのだ。

良い案が出ない中、名無が案を出した。

「……今の状況を打開出来る案が一つある。コレだ」

そう言って名無が出したのは鍬形と飛蝗の2枚のメダル。ウヴァのコアメダルだ。

「ウヴァの昆虫系メダルのコンボなら今最も望む結果を残せる。しかしコンボを使うためにはあと1枚、カマキリ・コアメダルが必要だ」

「フム、分かった」

「うん！ コアメダルがグリードにとって大事な物って自覚ないよねウヴァッ!？」

簡単にコアメダルを渡そうとするウヴァに、カザリが素早くツツコミを入れる。

その時だ、今まで大人しくしていた筈のコアビーストが、“何か
に反応したように”、突如名無達を襲い始めた。

『——ギヤアオオオオオオオオオオオオツ！！』

「「「「「「「「「「ツ！？」「」「」「」「」

「む？」

「くっ、変身……！」

《クワガタ！　ウナギ！　バッタ！》

コアビーストが振り下ろした触手の一本を、霊夢達は散開してかわし、名無はかわすと同時にガタウバに変身した。

オーズGUBと霊夢達がいる場所から少し離れた場所。そこに一人の人影——ライダーがいた。

黒のスーツに緑と銀の装甲、各所に配置された透明と緑の円形のカプセル。

仮面を被った顔には円形のカプセルと、U型のバイザー。

ベルトは、バックルに上下に開いたカプセルがある。

そのライダーは、オーズGUB等と戦闘しているコアビーストを見ながら、セルメダルを左手に持ち、バックルの左上部にある投入口に入れ、バックルの右側面にあるハンドルを回した。

《BREAST CANON》

すると、ライダーの左胸のカプセル（リセプタクルオーブ）が開き、幾つものパーツが出て一つに纏まり大型の巨砲——【ブレストキャノン】を作る。

更に、先程と同じ場所に、今度は2枚セルメダルを投入、ハンドルを回す。

《CELL BURST》

電子音の後、ブレストキャノンの砲口にエネルギーが集まり、U型のバイザーが赤く光る。

ブレストキャノンの持ち手をしっかり持ち、照準をコアビーストの頭部に合わせ、引き金を引いた。

鎌付きの触手がためめに振るわれる。

「おおおおおおっ！ プレイバーー！！」

触手の一本を、チルノが合体剣（当たり剣＋スイカソード＋チョコエッジ×2）で斬り裂く。しかし、斬り裂かれた触手は直ぐに新しい触手が生えた。

再生した触手がチルノを襲う。

「チルノっ!!」

「メイリンキイイクツ!!」

即座にメイリンが蹴り浴びせ軌道を逸らし、メズールは水のムチをチルノの腕に絡ませ引き寄せる。

オーズGUBは触手や紅魔館に跳び移りながら、仮面の下で苦虫を噛んだ表情になる。

触手を避け、各々が反撃するがダメージを与えた所から再生してしまう。

コアビーストを倒すには核となっているコアメダルを取り除く、と検索結果が出た。そのための昆虫系コンボなのだが……。コアメダルに反応しているのか、オーズ、カザリ、メズール、ウヴァを中心に襲ってくるためウヴァからカマキリ・コアメダルを受け取れない。

——どうする……？

そうオーズGUBが思った時だ、

「——ギヤアオオオオオオオオオオッ!?」

突如、どこから放たれた赤い砲撃がコアビーストの頭部に直撃。コアビーストが悲鳴を上げた。

オーズGUBが砲撃が撃たれた所を見ると、そこには見た事のないライダーが……。

探究心が形を持ったような存在であるオーズ（名無）は、当然そのライダーの検索をしようとする。

だが、砲撃を受けたコアビーストから輝く1枚のメダルが出たためそちらの回収を優先。回収したメダルは、カマキリ・コアメダルであつた。

「成る程、触手の先の鎌はカマキリ・コアメダルの影響だつたか。そうだっ！ あのライダーはっ!?」

しかし、謎のライダーの姿は既に無かつた。

オーズGUBは探したかつたが、今はこっちが優先と“仕方なく”欲求を抑え、ウナギ・コアを抜き、今手に入れたばかりのカマキリ・コアを装填、オースキャナーで読み込んだ。

《クワガタ！ カマキリ！ バッター！》

《ガータガタガタキリバ！ ガタツキリッバツ！》

鍬形の頭、蟪蛄の腕、飛蝗の足。

昆虫系メダルのコンボ、『オーズ・ガタキリバコンボ』。

コンボチェンジを終えたオーズGCは、雄叫びを上げた。

「……オオオオオオオオッ！ ——ハアッ！！」

すると、オーズGCの隣にもう一人オーズGCが現れ、更にもう一人、更にもう一人……。あっという間に、オーズGCが五十人まで増えた。

これがガタキリバコンボの固有能力・多重分身『ブレインシェイド』だ。

五十人に分身したオーズGCは、オースキャナーを持ち再びコアメダルを読み込ませる。

《スキヤニングチャージ！》

『フッ！ ハアアアアアアアアッ！！』

五十人のオーズGCは一斉に跳び上がり、空中でキックの体勢に入る。そして、一斉にコアビーストに必殺技【ガタキリバキック】を叩き込んだ。

「ハアアアアアアアアアアアアアッ！！」

「ギャアオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！？」

ガタキリバキックを全身に受けたコアビーストは、爆発。その中から一人に戻ったオーズGCが出てきた。

地面に着地したオーズGCの右手には、シャチ・ウナギ・タコの3枚のコアメダル。

オーズGCは変身を解き、名無の姿に戻る。やはりコンボはセルメダルの消費が激しく、足取りは覚束ない。

そんな名無の隣に霊夢が降りて来て、名無の頭を軽く小突く。そして、肩を貸すのであった。

その日の夜。

「――皆のもの、今日は世話になったわね。礼として、今夜は存分に楽しんで行きなさい」

と、久方ぶりにカリスマを振り撒きながら、レミリアが言う。

レミリアは数日間寝込んでいた事でストレスを解消、礼と称して紅魔館でパーティーを開いたのだ。

パーティーの参加者は、コアビースト戦を見物していた面々とコアビーストと戦闘した名無達だ。

そんなパーティーの一角で……。

「はあい、メズール、チルノ」

「あら、久しぶりね」

「レティ！」

人間態のメズールとチルノに声を掛けたのは、メズール（人間態）を成長させたような女性――レティ・ホワイトロックだ。彼女は冬の妖怪（雪女と思われる）のため、夏の間は山に籠って過ごしている。

「夏が終わって降りて来たら、随分賑やかなね」

「何言ってるのさレティ、ここ（幻想郷）で賑やかじゃない日なんてないよ」

「フフ、それもそうね」

「でも……本当に久しぶりね、レティ」

「そうね、メズール」

一時期だけだが、久々の再会にメズールとレティは抱き合う。

見た目が似た二人のため、普通なら姉妹に見える筈なのだが……何故か百合の花が見えた。

「あつれー？ 何故か二人のバックに百合の花が……」

「あら、チルノ妬きもち？」

「大丈夫よチルノ、貴女の事は忘れていないから」

「あれっ！？ あたいの本能が貞操のピンチだと叫んでいるっ！？」

そして、別の一角では……。

「HACHIMITSU!!」

「大人しく食べんのか虫頭っ!!」

「ウヴァさーんっ!!」

「えい♪」

「ぎゃああああああつ!?!」

ハチミツにハイテンションになった虫頭（怪人態）にカザリ（人間態）が蹴りを入れ、リグルが叫び、幽香が日傘でカザリをフルスイング、カザリが悲鳴を上げる。

セルメダルを吐き出し倒れたカザリに、アリスの人形である蓬菜が頭に乗し、小悪魔が慌てて駆け寄る。

その光景を食事しながらマリサとアリス（と上海）、パチュリ―が傍観しているが……いつもの事なのでスルーしよう。

そして出張・夜雀食堂の影で……。

「クソ、次こそは……！」

「あんま騒ぎデカイのは止めとけよ？ 巫女に遠慮なくズドンされるから」

「……………うん」

「それにしても、蠅螂のメダルっていつ入ったんだろうな。アंकコが入れたのは、3枚だった筈だし」

「俺はアंकだ……」

今回の騒ぎの首謀者のアंक（人間態）と小十狼が、ハツ目鰻の蒲焼きを食べながら談笑している。

カマキリ・コアメダルは、湖の底にあった物をハツ目鰻が飲み込んだのだが……そんな事は知るよしもない。

今回出た4枚のコアメダルだが、ウナギ・コアを1枚以外は全て名無が所持する事になった。メズールとウヴァが、「今のままでいい」と譲渡したのだ。

「——はい霊夢」

「……………紫」

一人で黙々と料理を食べている霊夢の隣にスキマが開き、中から紫が出て来た。

霊夢は紫をジト目で見る。

「……随分楽しんできたみたいね」

「あんゝ そんな目で見ないですよ。これでも大変だったのよ？」

そう言い、いつも通りの妖艶な笑みを浮かべ右手に持った扇で口元を隠す紫。しかし右腕に包帯を巻いており、手首には見慣れないブレスレットをしている。よく見れば、左手にも包帯をしており顔にも消えかけの切り傷があった。

紫は大妖怪だ、並みの傷なら直ぐに塞がって消える、それ以前に傷を負う事自体少ない。その紫が傷を負うとは……。

気になった霊夢が聞く前に、口を開いた。

「まあまあ、ちゃんとお土産もあるから機嫌を治してゝ 今名無が来るからゝ」

「名無が？ そう言えばさっきから姿が見えないような——」

『オオオオツ！』

霊夢が姿が見えない名無を探そうとした時、パーティー会場に歓

声が上がった。

釣られて、霊夢は歓声を上げたモノ達の視線を先を見て……絶句。

——そこに居たのは、一人の“姫”——

肩と背中が大胆に開いた紅と純白のドレスを身に纏い、長い黒髪は左サイドポニーテールに纏められ、各所にはお洒落なイヤリングや指輪や腕輪、髪飾りにネックレス。

顔もメイクが施され、洗練されたその姿は正しくどこかの国の姫。会場の全員が魅せられる美しさがあった。

……どこぞの二ートの引き籠もり百合な元姫とはえらい違いだ。

「どういう意味だっ!？」

「輝夜も昔は……。はあ……」

「師匠……」

「永琳も鈴仙も残念な物見る目で私を見るなあああああっ!！」

パーティー会場に現れたドレス姿の“少女”は、咲夜に手引かれながら、霊夢の前にやって来る。

ニヤけ面のスキマ妖怪の顔面を一発殴りつつ、霊夢は頬を引きつらせながら“自分と瓜二つの擬似グリード”に声を掛けた。

「め……名無？ あんた何やってるの……？」

「八雲 紫に着ると迫られた。霊夢が喜ぶからって。

追加報告をすれば十六夜 咲夜に着替えを手伝って貰った」

現れた“少女”——名無は特に気にした風もなく答える。

とにかく言いたい事が多々あったため……霊夢は一気に吠えた。

「紫っ！ あんた何してんのっ！？」

名無は何の抵抗なく着てるのっ！？ 一応男でしょっ！？

咲夜も止めるおおおおおおっ！！」

「だって霊夢こっぴどく持って来ても着てくれないもんっ！！」

「特に断る理由がない」

「同じく。と言うより霊夢、何言ってるの？ 着替えを手伝った時に見たけど、名無は歴^{れっき}とした“女性”だったわよ？」

「……………はっ！？」

シレッと（一名別）と返す面々。そして咲夜の最後の言葉に、霊夢は耳を疑った。

驚いた表情のまま、霊夢は名無を見る。

「事実だ。どうやら、メズールの水棲系コアメダルを取り込んだ事で、肉体が女性型に変化したようだ」

「大丈夫よ、お湯を掛ければ元に戻るから。水を被ると女の子になるけど」

「1 / 2 ? 1 / 2 的なアレ？」

あまりにも予想外の事態に霊夢は困惑する。

その隙に、紫が霊夢の足元にスキマを開き霊夢を落とした。

「実は同じ衣装がもう一着あるから、ここは姉妹仲良く同じ格好に着替えましょう」

「え？ え？ ええええええええええええつ！？」

何の抵抗も出来ずスキマに落ちて行く素敵な腋巫女。

……数分後、名無と同じドレス姿の霊夢（髪はウィッグを付け右サイドポニーテール）がパーティー会場に現れた。

更に名無とのツーショット（若干上目遣い＋頬染めた状態）がバラッチ天狗に激写され人里や、その他諸々の場所にバラ蒔かれ、

後日そのお陰で博麗神社に多数の参拝客が来たとか。

C o u n t 1 4 に続く

今回手に入れたメダルは？

オーズ

・カマキリ×1

・シャチ×1

・タコ×1

メズール

・ウナギ×1

Count 13 『誕生ライダーと分身昆虫と完全姉妹化』（後書き）

一話に纏めたら長くなった。

さて、今回は多く語らずに一つだけ。

名 無 女 体 化 ！

これにつきます。

擬似コアメダルのニンゲン・コアは、元々男女両方の情報があり体を構成した結果、男性型になったただけなので女性型になる可能性は元々ありました。

今回水棲系コアメダルを3枚取り込んだ事がキツカケで女性型に変化が可能になった訳で……。

これで口調以外の見分け方がなくなり、完全に博麗の巫女姉妹になりました（名無は巫女ではないのですが……）。

紫の言った通り、お湯を被ると男に、水を被ると女になります。

ら。ま1/2です（笑）。

では次回に♪

Count14『とあるグリードの一日・虫頭編』（前書き）

東方欲望録、これまでの3つの出来事！

一つ、アंकの実験によりコアメダルを体内に入れられたハツ目鰻が暴走、コアビーストとなって紅魔館に巻き付いた。

二つ、誕生の名のライダーが現れ、名無は昆虫系コアメダルのコンボ・ガタキリバコンボを発動。コアビーストを撃破。

三つ、水中系コアメダルを体内に宿した名無が、女体化し霊夢の姉妹としか言えなくなった！

Count Tie Medal.

オーズとグリードが持つメダルの数は？

オーズ

・ニンゲン（疑似コアメダル）

・タカ×1

・クワガタ×1

・カマキリ×1

・バッタ×1

・トラ×1

・チーター×1

・サイ×1

・ゴリラ×1

・ゾウ×1

・シャチ×1
・ウナギ×1
・タコ×1

アंक

・タカ×1
・コンドル×1

ウヴァ

・クワガタ×1
・カマキリ×2
・バッタ×2

カザリ

・ライオン×2
・トラ×2

ガメル

・サイ×2
・ゴリラ×1
・ゾウ×2

メズール

・シャチ×2
・ウナギ×2
・タコ×2

Count14』とあるグリードの一日・虫頭編』

——我輩はウヴァである。

——名前はウヴァ・ガリレオ・ガリレイ三世。

——ウルがそう言えいいと言っていた。

——我輩は幸せだ。

——過去は、もう殆ど覚えていないが、“幸せ”とを感じる事は無かった。今思えば、あれは“憂鬱”だったのだろう。

——しかしそんな殆ど覚えていない過去、もはやどうでもいい。今が幸せ。それだけ分かればいい。

——我輩はウヴァ・ガリレオ・ガリレイ三世。我輩は今、幸せなのだ。

——……その我輩我輩って止めるっ！ とうるかお前ただのウヴァだからっ！ ガリレオ・ガリレイ要らないからっ！！

——煩いぞ、カザリ。

——誰のせいだああああああっ！？

そんなオープニングトークはさて置き、早朝、風見家。

虫頭……もとい昆虫系グリードのウヴァの朝は早い。

『……む？ 朝か』

カーテン越しから差し込める朝日の光で目を覚ましたウヴァ（怪人態）は、自分専用のベッド……というかミノムシの巣……のよう
に梁から吊るされた、繭型の寝袋の中から、内側のジッパーを開け
て出てくる。

そして繭（寝袋）から“天井”に降り、“天井”の一部を開け下
に降りる。

ここまでで分かると思うが、ウヴァは天井裏で寝ている。

スチャツと、音を立てずリビングに着地したウヴァはそのまま隣接している玄関の扉を開け外に出た。

玄関の向こう……風見家の家の前には、カブトヤミー、クワガタヤミー、クロアゲハヤミーが揃っていた。

「「ウヴァ様！ お早うございます！」」

「うむ、お早う」

ウヴァに気が付いたヤミー達は、声を揃えて朝の挨拶をする。

ウヴァも挨拶を返し、井戸に移動し水を汲んで顔を洗った。

「ウヴァさん！」

「む」

顔を洗っていたウヴァに掛けられた声。ウヴァが声のした方へ顔を向けると、ライトグリーンの繫ぎを着た緑色の髪に二本の触覚を生やした少女が小走りで近付いて来ていた。

少女の名はリグル・ナイトバグ。まだコアメダル1枚だったウヴァが取り憑こうとし、幽香と出会うキツカケを作ってくれた少女だ。

最初は最初がたっただけに警戒していたが、今ではすっかりウヴ

アに懐いている。

「少し早いが、リグルも来た事だし始めるか」

「「「「はい！」「」「」」

ウヴァの提案にリグル＋3ヤミーが大きい声で返事をする。

ウヴァを正面に、右からリグル、クロアゲハ、カブト、クワガタ
ヤミーと一列に並んだ。

するとどこからともなく、音楽が流れる……。

『さあ、今日も753お兄さんの言う通りイクササイズを始めなさい。』

——上げなさい、上げなさい、足を上げなさい！』

「「「「上げなさい、上げなさい、足を上げなさい！」「」「」」
「」

と、音楽と共に聞こえる声の言う通り動く虫軍団……。

このエクササイズ——イクササイズは中毒性があるらしく、虫軍団はもう手遅れだ。今頃マザーツツコミ・カザリが音楽の出所に向かって全力疾走している事だろう。

——暫くして派手な爆発音と共に音楽が止まりウヴァ達もイクササイズを止める。

「皆、お早う」

「うむ、お早う、幽香」

「幽香さん、お早うございます！」

「「「幽香様！ お早うございます！！」「」」

すると家から、幽香が微笑みを浮かべながら出てきた。USCの笑みではなく、慈愛に満ちた微笑みで。

因みに幽香服装は、いつもと一緒に見えるが、実は材質が違う。所謂『のうかりん』だ。

朝の挨拶をする幽香に、ウヴァはいつものように、リグルは元気良く、ヤミー達は直角90°に頭を下げて返事を返す。

主なメンバーが揃ったところで、まず最初は朝食の準備だ。

ウヴァとリグルは木の実を取りに森へ向かい、幽香は畑で必要な野菜と果物を採る。ヤミー達は朝食を取る必要がないので、敷地内の見回りに向かう。

ここで森に向かった、ウヴァとリグルに目を向けてみよう。

ウヴァはリグルを肩車をして森（not魔法の森）に、ピヨーン
ピヨーンと擬音が聞こえそうな…… 実際響かせながら跳ねて来た。

ウヴァは飛べるのだが、大概の長距離移動の場合は跳ねる。構成
するコアメダルの中に、飛蝗があるせいだろうか。

森の中の一本の木、木の実が生っている木の前に着地しリグルを
下ろす。

「リグル、少し離れている」

ウヴァがそう言うと、リグルは言う通り一定の距離を取る。

リグルが離れたのを確認すると、ウヴァは木の表面に左手を置き、
その上に右手を重ねる……。

「……………覇っ！！」

そして声と同時に、腕、手を伝い“力”を木に流し込む。すると木がビクツと震え、“木の実だけが”落ちてきた。

もう一度言うが、木の枝や葉を一切落とさず、木の実だけを落としたのだ。

それを、ウヴァは満足そうに頷きリグルは持ってきていた袋に入れていく。

落とした木の実を全て袋に入れると、リグルを再び肩車し家に向かって跳ねて行った……。

「いやいや何っ！？ 中国拳法っ！？ お前はどこの達人だっ！！」

「何壁に向かって騒いでんだカザリ？」

「あ、いや、なんかツツコミを入れなきゃいけない気がして……」

と言うのは、猫ちゃんがプリントされたライトイエローのエプロンを着けたカザリ（人間態）。その右手にはフライ返しを持ち、左手はフライパンを握っている。

そんな彼と会話しているのは、カザリが作る朝食待ちのマリサ・キリサメ。

それはいい。いつもの光景だ。

だがカザリの疑問は他にあった。

「……ねえ」

「何だ？」

「何？」

「何かしら？」

「何ですか？」

「うん、何でアリスとパチュリーと小悪魔がいるのかな？ あと上

海ありがと。蓬萊は頭から降りてくれないかな？」

カザリの問い掛けにマリサ、アリス、パチュリー、カザリの横で一緒に作業している小悪魔の順に反応。更にカザリは皿を食器棚から持って来てくれた上海に礼を言い頭の上を占領している蓬萊に聞くが、蓬萊は無視して動こうとしない。

それに軽くorzになりつつ、カザリは再びテーブルに集まっているアリス達に目を向けた。

「……で、何で？」

「あら、私はマリサに呼ばれたのよ？ 『いつも飯を集ってるからたまには食いに来い』って。だからお言葉に甘えて来たの」

「私は小悪魔がどうしてもって言うから、付き添いで来ただけよ」

「私のせいですかパチュリー様……」

「飯は大人数で食ったほうが旨いぜ！」

カザリの問い掛けに、アリス、パチュリー、苦笑する小悪魔。最後にマリサが笑ってサムズアップする。

カザリはガツクリと肩を落とす。

なんだかんだで、マリサに口で勝った事はないしアリス達が既に

着席している時点で手遅れだ。……それに人数分の朝食を作ってしまっている。

肩を落としたまま、カザリは出来たばかりの朝食を出すのであった。

さて、カメラは戻ってウヴァ side。

朝食を食べ終えたウヴァと幽香は、腹ごなしの軽い運動として、

「マスタースパーク♪」

「超級ウヴァ！ 電撃弾っ！！」

スペルカード無しの、バトルを繰り広げていた。

幽香は閉じた日傘の先から極太のレーザーを放ち、ウヴァは体を高速回転させ緑色の雷を纏い突っ込んで行く……。

どちらも洒落にならない威力の技で、しかも弾幕ごっこではないから当たったら確実に消し飛ぶ……。

なお、ウヴァの『超級ウヴァ電影弾』は体を高速回転させているが頭は回転していないため、かなりシュールだ。……某拳で語るガンドムの技なのに。

もう一度言うが、これは軽い運動である。

「ばあああく雷っ！ ウヴァッ！ フィンツガアアアアアアアア
ッ！ー！」

右平手に雷を宿し、背中からオーラで出来た昆虫の羽根を六枚出したウヴァが、満面の笑みを浮かべた幽香に突っ込んで行った……。

朝食後の軽い運動の後、畑の手入れだ。

カブトヤミが鍬を振るい、クワガタヤミが畑の大きい岩を退かし、クロアゲハヤミが空中から水を撒く。

そしてウヴァは、畑の手入れをしながら……髭を蓄えた濃い顔の大根——親父大根と話していた。

「旦那、最近はめつきり冷え込むねえ」

「そうだな。香霖堂で買ったビニルハウスが役に立つ」

「そついや旦那、旦那の畑って季節に関係なく色んな作物が採れるよな？ 何でなんだい？」

「さあな。特に特別な事はしてないけど……。さて、次に行くか」

「おう。頑張れよ旦那」

そうしてウヴァはその場合を離れて行く。

因みに、畑の端の土から、黄色のメダルが2枚……。ライオン・コアメダルとチーター・コアメダルが覗かせていた……。

ウヴァが次に向かったのは、敷地内にある牧場……。そこでは家畜の牛や馬（not妖怪）が放し飼いにされており、見張りにバツタヤミーがいる。

この牧場・家畜・牧舎は錬矢が“土地ごと”持ってきた物で、ウヴァは大いに気に入っている。

「異常はないか」

「ハッ！ 異常はありません、家畜達も健康です、ウヴァ様っ！」

「そうか。しっかり頼むぞ」

「ハッ！」

牧場の様子を見たウヴァは、大きく跳躍し移動する。

リグルは友達の所に遊びに行き、幽香は昔馴染みのレティの所へ
“戦士の顔をして”出払っている。

なので、ウヴァもちよとした買い物に人里に行く事にしたのだ。

……怪人態のままで。

——いい加減擬態しろやああああああつー！！

途中、カザリの声が聞こえたので、仕方なく人間態になって向かった。

「ふう……。結構重いわね、うどんげっていつも人里と永遠亭を往復しているのかしら……。？」

人里へと続く道、長い銀髪を三つ編みに纏め、赤と青の二色のナース服のような服の女性――八意 永琳は多数の薬が入った籠を背負い、冬なのに額に汗を流し歩いていた。人里に、作った薬を売るためだ。

本来なら、弟子の鈴仙の仕事なのだが、生憎数日前から“アレな時期”に入ってしまったい、自分を抑えるために部屋に籠ってしまっている。

もう一匹の弟子は遊びに行ったのか既にいなく、更に言えば人里

に行ったらイタズラばかりして仕事にならないだろうから、なので永琳自ら行く事になったのだ。なったのだが……。

「最近運動不足だから、歩いて行こうと思ったけど……やっぱり思い付きで行動するものじゃないわね……」

背負っていた籠を地面に置き、一息吐く。

ここで言っておくと、別に永琳が貧弱なのではなく、籠がかなり重いのだ。

やっぱり飛んで行こうかしら、そう思った時だ。

隣に、茶髪のオールバックに緑の繋ぎの上半身部分を腰に巻きタックトップを見せている、引き締まった肉体の男——ウヴァ（人間態）が着地したのは。

突然の事に、永琳は目を丸くする。

一方ウヴァは再び跳躍しようとするが、永琳の存在に気付き声を掛けた。

「む、どうした？」

「え、あ、急に人が降ってきたものだから驚いて……」

「そうだったか、すまん」

自分に非があると思い、ウヴァは素直に謝る。これがアंकや力ザリだったら、謝らなかつただろうが。

だが永琳は驚いたのでない。空から人が降ってくるなど、幻想郷じゃ日常茶飯事だ。

永琳は観察していたのだ。ウヴァ……グリードという生物を。

オーメダルと呼ばれるメダルで構成されるグリード、永遠亭に“橙色の同じ物”があるが、グリードになる気配がない。一体どうやってグリードが誕生するのか、グリードとは何か、興味があつた。

（確か、ウヴァって呼ばれてるグリードよね。今は風見幽香の所に居候している。

それにまさしく擬態ね、普通の人間と変わらないわ……）

こんな所で出会つたのは予想外だったがチャンス、と永琳は思案する。

なお永琳が人間態のウヴァをグリードだと分かつたのは、以前ウヴァが怪人態で人里をほつき歩いてて力ザリにド突かれ人間態になつた所を、見た事があるからだ。

永琳は早速行動を起こし、わざとらしく右腕で額を拭う。

「ふう、重い重い」

「ぬ、大丈夫か？ 良ければ持とう」

もう来た？ と永琳は内心驚きながら好都合と笑みを浮かべる。
本当はもう少し演技するつもりだったが、ウヴァが予想より早く出たのだ。

まあ相手はウヴァなので、そんな難しい策はいらないのだが……。

「そうですか？ それでは、よろしく願いします」

「うむ、任せろ」

永琳の思惑に気づく様子もなく、ウヴァは薬が入った籠を背負う。
そして、永琳をお姫様抱っこで持ち上げた。

「……え？」

「しっかり掴まっている。行くぞ」

「え、えええええええええええつ！？」

状況が理解出来ない永琳を他所に、ウヴァは永琳をお姫様抱っこ

のまま空高く跳躍する。

ウヴァにとつての『持とつ』は、『疲れているようだから荷物と一緒に運ぼう』であった……。

一方その頃、霧の湖で、目のハイライトが消えた——所謂レイプ目のチルノが体育座りで岸に座っていた。

後ろの方でレイティと幽香が、大剣と日傘をぶつけ合い衝撃波を撒き散らそうが、今のチルノには聞こえていない。

「……あたい、もうお嫁に行けない………」

チルノの呟きは、衝撃音で誰の耳にも届く事はなかった……。

永琳をお姫様抱つこで抱え籠を背負ったウヴァ（人間態）は、人里近くの森に着地する。人里の中に着地すると、人里の人達を驚かせてしまうからだ。

ウヴァは抱えていた永琳を静かに下ろす。

「あと少しで人里だ。必要なら荷物持ちを引き受けるが？」

「いつ、いえっ！　ここまで結構ですっ！？」

ウヴァの申し出に、永琳は顔を真っ赤にして断り籠を慌てて受け取って人里に走り去ってしまう。

意味が分からず、首を傾げるウヴァだったが風邪気味なのだろうと思い自身も人里に入る。

ウヴァが欲しかったのは新しい鍬。事前に鍛冶屋に依頼してあったため、業物の一品を手に入れご満悦といった顔で人里中を歩く。

ウヴァにとってコア・セルメダルより農作業道具の方が嬉しいのだ。

「——それでは」

「む」

ウヴァが歩いていると、大きな屋敷から風呂敷袋を背負った慧音が出て来た。

慧音の方も気付いたようで、ウヴァに声を掛けてきた。

「ああ、確か貴方は……グリードのウヴァでよかったか？」

「そうだ。お前は……具志け——」

「慧音だ。寺子屋で教師をしている上白沢慧音だ」

危なく元プロボクサーと間違えそうになったところを、すんでのところで阻止する。

「ふむ、その上白沢慧音がどうしたんだ？」

「貴方は……。まあいい。ここの屋敷、稗田の家は代々幻想郷の歴史を記録している家系で外の世界の歴史書やその他文学の資料を持っている。寺子屋でもここの資料を借りて使ったりしていてな、今も明日の授業で使う資料を借りてきた所だ。今回は多くなってしまったが」

「そうなのか……」

「そう言えば、阿求……。ああ、稗田の家の現当主の事だ。その阿求は幻想郷の住人の事を本に纏めていて、それに貴方達グリードの事も載せたいと言っていたから、その内貴方の所に行くかも知れないな」

「そうか」

短く返すウヴァだが、話を二割程度しか理解出来ていない。

「さて、私はそろそろ家に帰るとしよう。では」

「そうか。……いや、待て。その量の荷物では重いだろう、俺が家まで“持って”送ろう」

荷物を担ぎ直し、帰宅しようとする慧音を引き止めるウヴァ。

ウヴァの申し出に「申し出は嬉しいが……」と断ろうとする慧音

だが、ウヴァは慧音の返事を聞く前に荷物を取って担いでしまった。

「あー!」

「力仕事は男の仕事だ。麗しい女性に荷物持ちをさせるわけにはいかないからな」

「なっ!？ そ、そうか、なら……頼もつかない……」

「うむ、任せろ」

ウヴァに、“麗しい女性”と真顔で言われ顔を真っ赤にする慧音。彼女は半獣であるため人間の男性より強く頼りにされる事はあるが、その反面一人の女性と扱われた経験が少ないのだ。

まあ、慧音を高嶺の花と人里の男達が手を出さないのが原因でもあるのだが。慧音はファンクラブがある程、人気が高い。

ウヴァは頼まれると、荷物を担ぎ直し、慧音をお姫様抱っこで持ち上げた。

「……へ?」

「行くぞ」

「へ? あ、いや待てっ!」

慧音は顔を赤くして暴れるが、ウヴァの方が力が強く抜け出せない。

そうこうしている内に慧音を担いだウヴァは人里の中を進む。当然、人里の人々に目撃されるわけで……。

死にたくなつた慧音を尻目に、慧音の自宅兼寺子屋に到着する。

「着いたぞ」

「そ、そうか！　ありがとう、ではっ！」

着くなり、慧音はウヴァから荷物を受け取り真っ赤なまま家に入り閉じ籠ってしまふ。

それに首を傾げるウヴァだが、風邪だろうと結論付け帰路に付く。

帰りの途中、薬を売り終えたらしい永琳を見付けたため、永遠亭まで送った。無論、お姫様抱っこで。

用事を終え、帰りを待つ家族の元へ帰るウヴァ（怪人態）。

昔は、家族……いや、仲間と呼べるのは同じグリードしかいなかった。

だが今は、帰る場所が、家族がいる。

何度目かの跳躍で、夕焼けに燃える太陽の畑改め、『天道虫牧场』デントウムシが見えてきた――。

Count14『とあるグリードの一日・虫頭編』（後書き）

慧音

「はぁ……」

もこたん

「どうした慧音、顔赤いぞ？」 ↑遊びに来た

慧音

「い、いや！？ 何でもないぞっ！？ 夕焼けのせいだ、うんっ！
」！
」

もこたん

「ふ、ふうん……（もう夜なんだけどな……）」

永琳

「はぁ……」

鈴仙

（師匠、どうしたんだろ。溜め息なんか吐いて。頬もほんのり赤いし……）

てい

「この部屋臭いウサっ!」

ぐーや

「ええそっね! 乙女臭いわっ!」

永琳

「……うどんげ」

鈴仙

「はい……」↑Shot!

ぐーや・てい

「ぐはっ!?!」↑ヘッドショット・Critical!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6918q/>

東方欲望録～全ては欲望を満たすため～

2012年1月8日19時52分発行